鼠（ねずみ）、影を断（た）つ

赤川次郎



角川文庫

鼠、影を断つ

赤川次郎



角川文庫 17529

目次

鼠、火の粉をかぶる　五
鼠、くじを引く　四七
鼠、面子をかける　八七
鼠、つきまとわれる　一三九
鼠、幻をみる　一五三
鼠、妖刀の影を断つ　二一三

解説　ペリー荻野　二六〇

鼠、火の粉をかぶる

火の手

おかしな気配だ。

次郎吉は目を覚ますと、素早く起き上った。

一瞬、「どこだ、ここは?」と思ったが、すぐに思い出した。

なじみの小料理屋の二階で飲んで、そのまま寝入ってしまったのだ。ここの女将は、おしまといって次郎吉に惚れているらしく、こうして泊って行っても少しもいやな顔をしない。

「――何だ」

次郎吉は、暗闇の中で、五感を研ぎすました。

臭いだ。これは……何かが燃えている臭いだ。

飛び立つように起きると、ガラリと障子を開けた。かすかに煙っているのが分ったが、煙は下から来ていない。下で燃えているなら、階段の辺りがもっと煙でかすんでいるはずである。

「ということは……隣か」

部屋から表を望む丸く切った窓を開けると、ほとんど軒先を接している裏手の平屋が、屋根の隙間から白い煙を噴き出していた。

「風があるな」

風はこっちへ向って吹いている。パッと火の手が上りゃ、こっちへ燃え移るのはアッという間だろう。

「おしま！　起ろ！」

次郎吉が階段を駆け下りて、「おい、おしま！」

襖が開いて、眠そうに目をこすりながら、女将のおしまが出て来た。

「何ですね、旦那？　こんな夜中に――」

と、欠伸をかみ殺している。

「店の者を起こせ！　火事だ！」

「え？――どこ……どこが？」

と、キョロキョロ見回す。

「ここじゃない！　隣から火が出てる。すぐ燃え移るぞ」

「あら、いやだ……。私、着物着ないと……」

「どうでもいい！　早くしろ！」

と言っておいて、次郎吉はくぐり戸から表へ出た。

こいつはまずい。風はかなり強く吹いている。一旦火の手が上れば、大火になりかねなかった。

煙の出ている隣家へ走って、

「おい！　大丈夫か！」

と、戸を力一杯叩いたが、中に人の動く気配はない。

炎がチラチラと見え始めていた。ためらっている余裕はない。

戸を蹴って外すと、もくもくと白い煙が湧き出て来る。息を止めて中へ飛び込むと、土間に小さな子供を抱いた母親が倒れていた。ここまで這い出して来て、煙に巻かれたのだろう。

初めに子供を、続いて母親をかつぎ出してともかく地面に下ろすと、小料理屋から、女中が寝衣姿に枕を抱えて転るように出て来た。

「旦那！　女将さんがまだ中に」

「分った」

中へ飛び込んで、「おしま！　何してるんだ！」

と怒鳴った。

「だって……。裸で焼け出されたら――」

「命あっての話だ！　ともかく出ろ！」

手を引張って表へ出ると、遠くで半鐘の鳴るのが聞こえた。
「隣は二人だけか？」
「ああ……。そう、確か旦那は上方へ仕事で――」
隣家はもう炎に包まれて手がつけられない。
「燃えちまうの？　ああ……。私の店が……」
おしまが涙声で言った。
まだ燃え移ってはいない。だが、ここが燃え上ったら火の勢いは止められない。
「おい、何とか火を止めよう。用水桶からどんどん水をくんで運べ！」
と、次郎吉はおしまに言った。
それから女中へ、
「近所の人を起せ！　早くしろ！」
「へえ……。火事だよ！　火事！」
女中の甲高い声は、こんなときには役に立つ。江戸の者は「火事」という言葉には敏感だ。すぐに、あちこちで戸が開いて、人が飛び出して来る。
「水をかけろ！」
燃えている家は放っておいて、次郎吉は小料理屋の方へ次々に水をかけた。ここで食い止めれば――。

二階が危い。

次郎吉は中へ駆け込むと、二階へ上って、軒先へ顔を出した。

「旦那！」

と、おしまが下で呼ぶ。

「水をくんだ手桶を持って来い！」

次郎吉は、洗濯物を掛ける紐を外すと、先に輪を作って、下のおしまへ投げ下ろし、

「これを手桶にくくりつけろ！」

水の入った手桶を引張り上げ、水を軒先にかけ、すぐに下ろす。自分もずぶ濡れだが仕方ない。

火の手が上って、こっちに延びて来る。

「あちち……。こんな所で〈鼠〉が焼け死んじゃ話にならねえ」

手桶を引張り上げる呼吸も合って来て、この調子なら、と思えた。階下の方は、近所の男たちが懸命に水をかけている。

「何とかなりそうだ！　頑張れ！」

と、次郎吉は声をかけた。

普通なら逃げ出している近所のおかみさんたちも、必死の形相のおしまを見て、水をくんだ手桶を運んでいる。

隣の家が焼け落ちて、どっと火の粉が舞い上った。
この分なら……。
そこへ、纏を掲げて、町火消しが駆けつけて来るのが見えた。

「クシュン！」
次郎吉はたて続けにクシャミをした。
「大丈夫？」
妹の小袖が、心配しながらもおかしそうに、「これが本当の〈濡れ鼠〉」
「からかうんじゃねえ」
どてらにくるまって、次郎吉は苦笑いした。
「はい、重湯」
「病人扱いするねえ。鰻でも食わしてくれたらすぐ治る」
「はいはい、後で道場の帰りに折にしてもらって来るから。今はおとなしく寝てらっしゃい」
——火は何とか広がらずに済んで、おしまはその場で気を失ってしまったそうだ。
次郎吉は風邪を引いて寝ているというわけだった。
「ごめんなせえ」

と、声がした。
「あら、誰かしら。――はい」
小袖が出てみると、「あら、お頭ですか」
火消しの頭、長五郎が、
「次郎吉さんはおいでですかね」
「濡れて風邪引いてます。どうぞ」
「そりゃあいけねえ。――次郎吉さん、ま、寝てて下せえ」
「いや、大したこたあないんで……。ハクシュン！」
小袖が出したお茶を一口飲んで、
「いや、次郎吉さんのおかげで火が広がらずに済みました。俺たちの駆けつけるのが遅れたんで、もし次郎吉さんがいなかったら、どうなっていたか……。今日はお礼に伺いました」
「よしなせえよ、長五郎さん。俺はね、なじみの店がなくなっちゃ大変と思って、張り切ったまでさ」
と、次郎吉は言って、「時に、あの焼け出された母子は大丈夫だったかね」
「ああ、療養所で、まだ寝ているようだが、命に別状はねえそうですよ」
「そいつは良かった」

「いずれ次郎吉さんにも礼が言いたいとのことでしたがね。——実はね、次郎吉さんに折り入って頼みたいことがあって」
「俺に？　何だろう」
「いや、あの火事場での次郎吉さんの身軽さに、みんな感心してましてね。次郎吉さんをぜひうちの組に兄貴分として迎えたい、ってことなんで」
「へ？」
次郎吉は目を丸くして、「クシュン！」
と、もう一つクシャミをした……。

寂しい女

三日ほど寝て、すっかり良くなった次郎吉は、あの小料理屋へと出かけて行った。
むろん、おしまが大喜びで迎えてくれ、
「好きなだけ、飲み食いして下さいよ」
と言ってくれる……と思っていたのだが。
「何だって？」
閉った戸の貼紙に、〈閉店のこと〉とある。

「せっかく俺が頑張って、火事から守ってやったのに……」
面食らっていると、近所のおかみさんが、
「あら、この間の」
と、声をかけて来た。「おかげさんで、焼けずに済みましたよ」
「そりゃあいいが……。どうして、おしまの所は閉めちまったんだい？」
と、次郎吉は訊いた。
「あれ、あんたのとこに話が行ってないのかね」
「というと？」
「お店がね、えらくいいお金で売れたんですってさ。何でも、火事にならずに助かったっていうんで、『縁起がいい』って、どこかのお大尽が高値で買ったそうですよ」
「へえ……」
それにしても、こっちにひと言もないとは……。次郎吉はいささか落胆した。
火元になった家の跡は、もうきれいに片付けられている。
「隣の焼けた家の母子はどうしたね？」
「さあね……。ともかく無一物で焼け出されちまったからね」
「可哀そうにな。——ありがとうよ」
次郎吉は、焼け跡とも分らないほど、きれいに片付けられてしまった家の前に立っ

た。

まだ寒空に、あの母と子はどうしているのだろう。もちろん、捜せば見付からないこともあるまいが……。

「あの……」

と、口ごもりながらの声に振り向くと、お世辞にも上等とは言いかねるなりの女が、子供の手を引いて立っている。

「俺かい？」

「はい。もしかして、先日の火事のときの……」

「ああ！　それじゃ、ここに住んでなすったのはあんたたちかい」

次郎吉は改めてその母子を見直した。あの夜に、煙に巻かれて見ていただけなので、顔もよく分らなかったのだ。

「おかげさまで、私もこの子も助かりました」

次郎吉が漠然と思っていたのより、母親の方はまだ大分若い。とはいえ、暮し向きの苦労のせいだろう、老けて見えたのは仕方ない。

お常、と女は名のった。子供は、みすぼらしいなりだが、汚れた顔をちゃんと洗えば可愛い女の子だろう。お咲といった。

五つになっているそうだが、小さくて細い。

「もうすっかりいいのかい」
と、次郎吉が訊く。
「はい。幸い火傷はいたしませんでしたので……」
「まあ、ともかく命を拾いなすったんだ。長生きしなきゃいけねえよ」
柄にもない、とは思ったが、次郎吉の説教である。
「はあ……」
と、お常は曖昧に答えると、「ただ……どうして火が出たのか、さっぱり分らないのでございます」
「覚えがないってことかね」
「お恥ずかしいのですが、炭を買うお金もなくて、この子と二人、布団にくるまって寝ておりました」
「なるほど……」
言われてみれば、そんな気もする。
では、誰かが火をつけたのか？
しかし、なぜ？　このあばら家を燃やしたとて、何の得があろう。ただ単に、火事を起したいという奴でない限りは……。
「おっかさん……」

と、娘が言った。「何か食べたいよ……」
「お待ち。私が何とかするから」
そんな母子の会話を聞くと、
「ともかく、一度うちへ来な。誰かに、住み込みの働き口はないか、訊いてみてやろう」
と、つい言ってしまう〈鼠〉である……。

「まあ、似合うわよ、お咲ちゃん」
と、小袖が言うと、お咲はニッコリ笑った。
「可愛い？」
「ええ、もちろん」
と、小袖は笑って、「お咲ちゃんはべっぴんさんだもんね」
——小袖は、お咲を湯へ連れて来ていた。
母親の方は疲れているのと、少し熱っぽく、床をのべて寝かせてある。
小袖は途中でお咲に新しい肌着と着物を買ってやり、湯上りに着替えさせたのである。
「——さ、お母さんに見せてあげましょ」

「うん」
小袖は、お咲の手を引いて、長屋へ戻ろうとした。
「今夜は何かおいしいものを食べましょうね。お母さんも、元気になってもらわないと」
と言いながら歩いていた小袖は、お咲が不意に足を止めたので、「お咲ちゃん、どうかしたの？」
お咲の目は、別の方を見ていた。
「――お父っつぁんだ」
「え？」
「あそこに行くの、お父っつぁん」
と、指さした先に、旅姿の男がスタスタと足早に歩いて行く。
「あの人？　――本当に？」
お咲が肯く。
小袖はお咲の手を引いて、その男を追って行ったが、足取りが速く、なかなか追い付かない。小袖は橋のたもとで、
「お咲ちゃん、ここにいて。動かないでね」
と言い聞かせ、小走りにその男を追った。

橋の中ほどで、
「もし、失礼ですが」
と、声をかけると、男が振り返った。
その動きが素早い。
「あっしにご用で」
「ごめんなさい。実はあの女の子が、あなたのことをお父っつぁんだと言うものですから」
お咲が駆けて来て、
「お父っつぁん」
と呼んだが、お咲を見る男の目はけげんそうで、
「おいおい。人違いだぜ。俺は独り身で子供なんぞいねえよ」
と言った。
「お父っつぁん……」
「この子、お咲ちゃんというんですけど、ご存じありませんか」
「言った通り、女房も子供も持ったこたああありません。——お嬢ちゃん、すまねえな」
「それは失礼いたしました」

と、小袖は言って、軽く会釈して立ち去る男を見送った。
お咲は、わけの分らない様子で、
「でも……本当にお父っつぁんなんだ」
と、呟くように言った。

「お湯に入って、疲れたんでしょうね」
小袖は、お咲をおぶって帰って来た。
「まあ、眠ってしまって……。申し訳ありません」
お常が布団に起き上った。
「いいんですよ。寝てて下さいな」
眠ってしまったお咲を布団に寝かせて、「子供はいいですね。眠ってしまうと本当に罪がなくて」
小袖は、そう言って、「兄は出かけましたか」
「お医者様を頼んで来て下さると……。私は寝ていれば大丈夫と申し上げたんですけど」
「そうですか。好きにさせといて下さい。どうせ退屈してるんですから」
と、小袖は言って、「それより、お常さん。今、お湯の帰りにね……」

お咲が、父親だと言う男と出会った話をすると、
「この子が……。そうですか」
と、お常の表情が曇った。
「何かお心当りが？」
「いえ……。それは他人の空似です」
「じゃ、ご亭主は――」
「亭主は旅先で亡くなりました」
と、お常は言った。「でも、この子にはなかなか言えなくて。まだお父っつぁんはお仕事が終らなくて、上方から帰って来ないんだと言ってあります」
「そうですか……。亡くなったのは確かなんですね」
「江戸へ戻る途中、駿河の辺りで病に倒れて亡くなったと知らせがありました」
「その知らせはどなたから？」
「仕事仲間の左平という人から手紙で……。左平さんは、亭主の分も仕事を片付けなきゃならなくて、お骨を持って帰る余裕がないと言って、近くの寺にお任せしたそうです」
「ご亭主は何というお名前で？」
「伝吉と申しました。腕の立つ鍵職人で」

「鍵ですか」
「錠前を作らせたら江戸でも五本の指に入ると言われていました」
と、お常は言った。「その腕を買われて、大坂の問屋さんからお仕事をいただいたのです」
「そうでしたか」
「きっと、その方が伝吉によく似ていらしたんでしょうね」
小袖は黙っていたが……。
そこへ次郎吉が医者を連れて帰って来た。
――医者がお常を診ている間、次郎吉と小袖は表に出ていたが、
「ほう。あのお咲が？」
「ええ、でも、お常さんの話じゃ、亡くなってるってことだけど」
「それなら別人だろうぜ」
「それがね。ちょっと気になったの」
「何がだ？」
小袖は左右へ目をやって、
「その旅人、ただ者じゃなかった」
と、小声で言った。

「何だと？」
「振り返ったときの身のこなし、目つきの鋭さ。――あれは普通の町人じゃないわ」
小太刀の達人である小袖は、人の持つ気配を察知する。
「ふーん。そいつは少々気になるな」
「お咲ちゃんは、絶対にお父っつぁんだと言い張ってたわ」
「子供といったって、もう五つだ」
「ただ、今お常さんに訊くと――」
「知ってる。伝吉って亭主は、旅先で死んだってな」
「でも、お骨も届いてないのよ」
「うん、確かにな」
「お咲ちゃんを連れてなきゃ、旅人の後を尾けるところだったけど」
「ふむ……」
次郎吉は顎を撫でた。

死体

「次郎吉さん！」

呼ばれて振り返ると、火消しの長五郎である。
「ああ頭、どうしなすった」
次郎吉は足を止めて言った。
「今、忙しいかね」
「暇を潰すのに忙しいがね。何だい」
「ゆうべ火事があってね」
と、長五郎は言った。「二、三軒焼けただけで済んだんだが……」
「そいつは何よりだったね」
「ちょっと、あんたに見てもらいたいもんがあるんだ」
長五郎の顔は、少し気が重そうだった。
――焼け跡までは、ほんのわずかの距離だった。
「お頭、どうも」
「しっかり消したか？　くすぶってると、また風で炎が上ることがあるぞ」
「大丈夫でさ」
「次郎吉さん。こっちだ」
と、長五郎が焼け跡へ足を踏み入れる。
「たまたま、水桶のそばで、水が溢れ出たんで、あまり焼けなかった」

女が一人、土間で倒れている。
足の辺りは火で焦げているが、上半身はあまり火傷を負っていない。
「――見てくれ」
次郎吉は顔を覗いて、アッと小さく声を上げた。
「おしま……」
「やっぱりそうかね」
「ああ……。間違いねえ」
次郎吉はかがみ込んで、おしまの顔の汚れをそっと指で払ってやった。
「自身番へ届けなきゃいけねえな」
と、長五郎は言った。
次郎吉はおしまの体に手をかけ、ゆっくりとうつ伏せにした。
「背中から心の臓へ、一突きだな」
と、傷を見て、「こいつは殺しだ」
「焼けちまえば分らねえと思ったんだな」
と、長五郎は肯いて、「悪いことはできねえもんだ」
「可哀そうに」
次郎吉は立ち上ると、「確か、江戸に身寄りはないと聞いた。――もし引き取り手

がなかったら、俺が弔いを出してやる」
「そう伝えましょう」
と、長五郎は言った。「ご足労かけてすいませんね」
「とんでもねえ。――しかし、何だってこんなことに……」
次郎吉はふと思い付いて、「何か、おしまの持物らしいもんはなかったかね」
「さて……。捜してみよう。何か出れば知らせますよ」
「頼みますよ」
次郎吉は火事場を出て、空を見上げた。
誰かが、あのおしまの店を買ったのだ。そして、おしまは殺された……。
次郎吉は、やや足早にその場を離れた。

「もう少し飲む？」
と、小袖が訊くと、
「いや、一本で充分だ」
と、次郎吉は言った。
「でも、おしまさんがねえ……。恨みを買うような人じゃなかったけど」
新しい客が入って来て、

「おい、一本つけてくんな！」
と、声をかけた。
次郎吉はふと顔を上げて店の表を見た。
戸が閉る、わずかの間にチラリと覗いたのは十手の光るさまだったようだ。
「兄さん、表に……」
と、小袖が普通の口調で言った。
「うん。裏から出る。頼むぜ」
次郎吉は立ち上ると店の奥へスッと消えた。小袖は、兄の飲んでいた猪口を袖へ放り込んだ。
ガラッと戸が開くと、
「おい！　次郎吉はいるか！」
と、同心が大股に入って来る。
「――何でしょう？」
と、小袖が振り向いて、「次郎吉って、兄さんのことですか？」
「〈甘酒屋〉の次郎吉がこの店にいると聞いて来た」
「それじゃ、私のことと間違えなすったんでしょ。私は妹の小袖といいますが、兄さんに何か？」

「殺されたおしまのことで、訊きたいことがある。今、どこにいる？」
「さあ……。風来坊でしてね」
と、小袖は猪口を手にして、「一杯いかが？」
と言った。
「旦那、こいつは見当外れだと思いますぜ」
と、ついて来た岡っ引きが言った。「〈甘酒屋〉は、この間おしまの店が焼けそうになるのを食い止めたって、火消し仲間で評判になってますし」
「うむ……。おい、兄が戻ったら、自身番へ顔を出せと伝えろ」
「かしこまりました。――ご苦労さま」
戸を閉めながら、岡っ引きは小袖へちょっと笑顔を見せた。いつも次郎吉が酒をおごっているので、小袖とも顔見知りだ。
「あの同心は、若僧のくせに威張ってやがる」
と、店の主人が苦々しげに、「用心しなよ、小袖さん。手柄を上げたくて仕方ねえ手合だ」
「ありがとうございました」
小袖が銭を置くと、立ち上った。
夜道を長屋へと急ぐと、いつの間にか次郎吉が隣を歩いている。

「兄さん――」
「誰かがたれ込みやがったな」
「恨まれてる？」
「おしまを殺った奴だろう。火事で誰の死体か分らなくなるはずが、当てが外れて俺のことが怪しいと」
「このままじゃ、また何か仕掛けて来るかもしれないわよ」
「うん。――仕方ねえな。降りかかる火の粉は払わねえと」
と、次郎吉は言って、「おい、手を貸せ。あの同心がいると、あまり大っぴらに歩けねえ」
「高くつくわよ。帯の一本も買ってもらわなくっちゃ」
「いいとも。おしまの店を誰が買ったか、調べてくれ」
「いいわよ。――ねえ、お咲ちゃんたちはどうする？」
小袖が振り向くと、もう次郎吉の姿はなかった。

密会

何度も振り返った。

気のせいかもしれないが、誰かが後を尾けて来るような気がする。いや、内心後ろめたい思いを抱えているので、そんな気がするだけなのかもしれない。

お常は小走りになっていた。

神社の境内は人気がなく、寒々としていた。――お常は息を切らして、傍の立木に手をかけ、体を支えた。

しばらく寝ていたせいだろう、立ちくらみがしている。

足音にハッと振り向くと、

「左平さん！」

駆け寄って来た男へ、お常はすがるように抱きついた。

「お常さん……。あんた、すっかりやせて……。病気したのか」

「だって……食べて行くのもやっとで……。お咲だって可哀そうだったんだよ」

「何だって？　じゃ、兄貴は金を送ってなかったのか」

「あの人は……私とあんたとの仲に気付いていたよ」

「いや、そんな気配は素振りも――」

と言いかけて、左平は、「分らねえな。兄貴は俺にも素顔を見せなかった」

と肯いた。

「でも、あの人は江戸へ戻って来てるよ」

「兄貴が？」
「お咲が見かけたって。声をかけても、人違いだって行ってしまったらしいけど、お咲が見間違えるわけはないよ」
「そうだな……。家が焼けちまってるんでびっくりした」
「危うく焼け死ぬところを、〈甘酒屋〉さんに助けられて」
「ああ、近所の人に聞いた。それで文を持たせてやったんだ」
「左平さん、あんた——私との約束はお忘れだろうね」
「忘れやしねえ。忘れちゃいねえが……」
左平はお常から離れると、「旅先で、色々あったんだ。江戸の伝吉っていやあ、上方でも名が通ってる。向うでの仕事はいい首尾だった」
左平はちょっとためらうと、
「しかし、お常さんも知ってる通り、兄貴は博打好きだ。俺の知らねえ内に、そういう仲間と賭場へ通うようになってて、俺が気付いたときは、稼ぎのほとんどを注ぎ込んでいたんだ」
「まあ……」
「このままじゃ江戸へ帰れねえ、と言って、また残ったわずかばかりの銭を持ってっちまった。止めて止められるもんじゃねえ」

「それはそうだね……」
何といっても左平は伝吉の弟分だ。逆らうことはできない。
「すると――丸々二日間、兄貴は帰って来なかった。何かあったんじゃねえかと心配したが、どこを捜していいかも分らなくてな……」
「それで――」
「フラッと帰って来たときは、懐に小判で十両も持っていた」
「小判で？」
「賭場での稼ぎじゃねえのは分った。訊いても兄貴は何も言わなかったが、『もっと金になる大仕事がある』と言い出してね。それで俺にあの手紙を書かせたんだ」
「自分が死んだって手紙を？」
「うまく行かなかったときのための用心だと言ってね。大金が手に入りゃ、江戸へ帰ってびっくりさせてやると……」
「それは、まともな仕事じゃないね」
と、お常は言った。
「俺にもそれは分ったよ。何しろ、どんな錠前でも、兄貴にかかりゃ簡単だ。盗賊にとっちゃ、こんなに使える者はない」
左平は顔を伏せて、「すまねえ。すぐに江戸へ戻って来りゃ良かったが、どうにも

兄貴のことが気になってね」
「あんたは何もしなかったんだろ？」
「大坂で別れて、それきりだ。――兄貴が係ったらしい盗みが何件かあって、怖くなった俺は大坂を出て、フラフラと方々を旅して回ってたんだ」
「左平さん……」
お常は左平の肩にもたれて、「あんたが戻ってくれただけで、私は嬉しいよ」
「しかし――兄貴が戻ってるとなると……」
「あの人、江戸で何をしてるんだろうね」
「分らねえが……。大坂でやばくなって江戸へ舞い戻ったかな」
「私はともかく、お咲にも知らん顔っていうのは……」
「いや、係りになっちゃいけねえ。下手に会って、また一緒に暮すってことになったら、いざってときは……」
左平は周囲を見回して、「お常さん。今日はこれで。会いに行くから」
「ええ……。でも、いつまでもあのお家に厄介になってるわけにも……。あんたはどこにいるの？」
「それは……言えねえ。勘弁してくれ」
「左平さん」

「またな！」
左平は駆け出した。
追いかけて行くには、足に力がない。お常はやり切れない思いで、
「待ってるよ」
と呟いた……。
力なく、うつむき加減で境内を出て行くお常を、小袖は見送っていた。

「なるほどな」
次郎吉は小袖の話を聞いて肯くと、「しかし、伝吉ってのが、お前の見た奴だとすると、いやいや盗賊の仲間に加わったとは思えねえな」
「そうね。あの雰囲気はただごとじゃなかった。物騒な男に見えたわよ」
次郎吉は、長屋を留守にするとき、時々使う顔なじみの舟宿の二階に寝そべっていた。
「あのおしまさんのお店だけど……」
と、小袖が言った。「色々訊いて回っても誰が買ったか、はっきりしないの」
「そうか」
「でも、人が出入りしてる様子はないわ」

次郎吉は表を眺めて、
「風があるな」
と言った。
「雲が流れてる。今夜は風が強そうよ」
次郎吉は、しばらく雲の動きを見上げていたが、
「おい、小袖。長五郎さんに伝えてくれ」
「お頭に？　何て言うの？」
「今夜はいつでも出られるように、仕度しとけってな」

罠

腕組みをして、ちょっとウトウトしていた長五郎だったが、遠い半鐘の音でハッと目を覚ました。
「――お頭！　煙です」
と、若い者が駆け込んで来る。
「落ち着け。どこだ？」
「それが――。この前と同じみたいで」

「何だと？」
長五郎は手鉤をつかむと、「おい！　行くぞ！」
と怒鳴った。
全員が身仕度して待っている。
「今日の風は危いぞ。遅れると大事だ」
一人が纏を手に、長五郎に続く。
風の吹きつける夜の道へ、火消したちは一斉に飛び出して行った。

同じ半鐘を聞いて、仕事の手を止めた男がいた。
「――近いぞ」
「まずいな。店の者が起きて来る」
黒い頭巾をかぶった男たち、五、六人が、商家の土蔵の前に立っていた。
一人が、土蔵の鍵をいじっている。
「――おい、逃げた方がよかねえか」
「今さら、やめられるか！」
と、鍵を開けるのに手間取って、苛立った声。「誰か起きて来やがったら、構わねえ。叩っ斬れ！」

浪人らしい二人が白刃を抜き放つ。
「――よし。開いた」
と、息をついて、「手間取らせやがって」
「火事だ！」
と、店の中で声がした。
「おい、土蔵に目張りしろ！」
「急げ！」
浪人たちが、雨戸の開くのを待ち受けていると、庭のくぐり戸から外で様子を見ていた一人が走り込んで来る。
「兄貴！　煙が上ってる」
「でかい声を出すな」
「だけど――方角が」
「どこだって言うんだ？」
「あの店の方だよ」
「何だと？」
「ともかくあの辺には違いねえ」
「畜生！　――おい、仕方ねえ。ここは諦めよう。あの店の方なら、放っちゃおけね

え」

雨戸がガラリと開いて、寝衣姿の小僧が姿を現わしたが、目の前に白刃が光って、

「キャーッ！」

と叫んで腰を抜かした。

くぐり戸から、黒ずくめの男たちは次々に外へと飛び出して行った。

「お頭！　あの店だ！」

長五郎は足を止めた。

あの、おしまのものだった店から、もくもくと白い煙が上っている。

「おい！　戸を外せ！」

ダダッと駆け寄ると、大きな槌で雨戸を一撃して外し、中へ飛び込む。

「煙が濃いぞ！　吸い込むな！」

炎が台所辺りから上っていた。

戸が外れ、外の風が吹き込んで来たせいか、火が障子をメラメラ引きはがすように上って行く。

「二階だ！」

長五郎が先頭になって階段を上る。

この風だ。隣へ燃え移るのを食い止められるかが勝負だった。
「おい！　火元はどこだ！」
と、長五郎が怒鳴る。
二階には、火は見えていなかった。――どこか妙だ。
煙は派手に上っているが……。
下から炎の熱が上って来た。
「お頭！　どうします？」
「この家で火を止めるんだ。おい、下を手伝って、塀に土をかけろ」
「へい！」
と、階段を駆け下りて行く。
長五郎は、座敷の天井を見上げると、手にした手鉤を目一杯長く持って、天井板へとガッと食い込ませた。
「――大変だ！」
と、声が上った。
「どうした！」
振り向いた長五郎は、ダダッと駆け上って来た黒頭巾の男たちと向い合っていた。
「何だ、てめえらは！」

「手を出すな！」
と、一人が言った。「出て行かねえと、命はないぞ！」
「ふざけるな！」
天井板へ食い込んでいた手鉤をぐいと引くと、メリメリと音がして、板が裂ける。
すると――。
天井から派手に音をたてて、小判が流れるように落ちて来たのだ。長五郎は目を丸くして、
「こいつは――」
「斬れ！」
という声に、浪人が刀を抜いて長五郎へ斬りかかろうとする。
その浪人が「ウッ」と呻いて、よろけた。
小柄が飛んで来て、浪人の首に刺さったのだ。血がふき出し、浪人が倒れた。
「誰だ！」
白い煙の中から現われた人影は、同様の盗っ人のなりだが、短刀を手に、長五郎の前に進み出ると、無言で奥へと押しやった。
「貴様！　――〈鼠〉だな」
もう一人の浪人が振り向きざま、脇腹を斬られてよろけ、階段を落ちて行った。

「おい！　どこだ！」
煙がひどく立ちこめて、人影はぼんやりとしか見えない。
「畜生！」
短刀をやみくもに振り回す男たちが、次々に脚や太腿を斬られて倒れる。
その間にも、天井からは小判が滝のように落ちて、畳に山となりつつあった。
そのとき、呼子が鳴った。
「あんたは……」
長五郎が呼びかけると、二つの人影が素早く窓から消えて行った。
あの身のこなし。――長五郎には見覚えがあった。
捕手たちが踏み込んで来て、二階へ上って来たときには、煙が大分薄れていた。
「――これはどうだ！」
役人が目を丸くして、小判の山と、傷を負って呻いている男たちを見回した。
「長五郎でございます」
「こいつらは……」
唖然としているのは、若い同心だった。十手を手に張り切って来たのだが――。
「ここを寝ぐらにしていた盗賊でしょう。盗んだ小判を天井裏に」
「誰が斬ったのだ？」

「さて……」
長五郎は首をひねって、「煙がひどかったんで、同士討ちしたんじゃありませんかね」

「左平さん！」
お咲の手を引いて、お常がやって来る。
「待ってたよ」
左平が二人を迎えると、「今夜はともかく野宿でもして、朝になったらどこかへ身を隠そう」
「ええ。あの人は？」
「さあ……」
三人が夜道へ出ると、
「待て！」
と、立ちはだかったのは、肩に手傷を負った男だった。
「あんた……」
お常がお咲を抱き上げる。
「兄貴――」

「てめえ、たれ込みやがったな！」
伝吉は短刀を手に、息を弾ませ、「一緒にあの世へ行け！」
「兄貴……。やめてくれ！」
短刀を必死でかわすと、左平は、「兄貴、我が子まで殺す気か！」
「縁は切った。大坂にゃ女があるんだ。お常、悪く思うな」
と、伝吉が言った。
「縁は切ったんですね」
と、女の声がした。
「小袖さん」
「縁を切ったのなら、仕方ありませんね」
伝吉は小袖に向って斬りつけた。
小袖の小太刀が二度、白く光ると、伝吉がフラッとよろけて倒れた。
「見るんじゃねえ」
次郎吉がお咲の顔を手拭いで覆ってやった。
「次郎吉さん……。この人を見逃してやって下さい！」
お常が左平をかばって、「脅されて、仕方なく盗みを手伝っていたんです」
「いや……。拒めなかった俺が弱い人間だったんだよ。お常さん。——幸せになって

おくれ」
「左平さん……」
涙にくれているお常へ、
「うまく逃げられりゃ儲けもんだね」
と、次郎吉は言った。「捕まった連中の口から、あんたの名も出るだろう。ま、逃げられるかどうか、やってみな」
――三人が夜の闇へ消えて行く。
「兄さん、帯二本ね」
「ああ」
おしまは伝吉の女だったのだ。天井裏の小判のことがあったので、隣が焼けたとき、あれほど必死になって火を消したのだった。
「――兄さんの正体は知らなかったのね」
「そうだろうな。もともと隣の家の亭主だった伝吉と深い仲になってたんだ。その後で伝吉が大坂へ行って、盗っ人稼業になって戻って来た」
「おしまさんも、そのときに手を切りゃ良かったのに」
「気が付かなかった俺も、間抜けだった。伝吉たちが江戸で荒稼ぎしてたのにな」
「お常さんの家が焼けたのは……」

「ありゃ、ちょっとした残り火の不始末だろう。二人が死なねえで良かった」
「おしまさんも、まさか好いた男に殺されるとは思ってなかったでしょうね」
「可哀そうな奴だ」
派手に煙だけ出るように仕掛をして、伝吉たちがあわててやって来るのを待っていたのだ。
「あの同心も、これで手柄になるってもんだ」
次郎吉はちょっと首をすぼめて、「また風邪ひいちまう。帰ろうぜ」
と言うなり、
「クシュン！」
と、クシャミをした。

鼠、くじを引く

恋わずらい

「おい、〈甘酒屋〉さんも、一つどうかね」
熱いおでんを食べていた次郎吉は、
「え……。ちょっと……」
口の中で熱い大根が崩れて行く。あわてて冷めたお茶を飲んで、
「――何の話だい」
と、顔見知りの新三へ言った。
大店の三男坊で、遊ぶことだけは達者な若者である。
「くじを引かねえか」
「お前の引くようなくじじゃ、ろくなもんが当らねえだろう」
「ひでえなあ。こいつは本物だぜ」
と、新三はむくれた。
「何が当るんだ？」
「それがさ……」

と、新三は次郎吉のそばに座って、「いい女が当る」
「何だ？」
次郎吉は呆れて、「吉原へでもくり込もうってのか？　俺はそんなむだづかいはごめんだぜ」
「そうじゃねえよ。――ともかく、引いてくれよ。な」
「誰かよそを当んな」
次郎吉は素気なく言った。
「ちぇっ。後で文句言っても知らねえぜ」
「言うもんかい」
「当りゃ、滅多にお目にかかれねえ美人が思いのままだぜ」
「新三。お前も、ちっとはまともに働いちゃどうだい」
と、柄にもなく説教めいて、「悪い仲間に誘われたのか？」
「そんなんじゃねえ。あのな――」
と、声をひそめて、「知ってるだろ、役者とねんごろになって、大奥から追放された女の話を」
「ああ、瓦版で読んだが、当てにならねえ話だ」
「ところが、あれは本当の話なんだ。大奥で一時は将軍様のお目にも留った女が、今

じゃ無一文で、住む場所もねえ有様さ」
「それでどうだってんだ？　みんなで助けてやろうっていうのなら感心だが」
次郎吉の読んだ瓦版が正しければ、「お涼の方」という中臈が、歌舞伎役者と恋に落ち、それが発覚したとか……。
大奥という、いわば将軍の「女の国」で、恋をしてはいけないというのも、残酷な話だ。
「手討にならなかっただけ、運がいいってものだろう」
確か相手の役者は捕えられて、遠島になるということだった。
「その女がさ、ここから遠くねえ空家にいるんだ。俺のちょっと知ってる親分が間に入ってよ、一人一両で抱けるってんだ。いい話だろ」
次郎吉は苦笑して、
「酒がまずくなる。あっちへ行け」
と、冷ややかに言った。
「何だよ、冷てえな。――じゃ、他を当るぜ。〈甘酒屋〉さんだからと思って、一足先に知らせてやったんだ」
「勝手にしろ」
次郎吉は、新三が二階へ上って行くのを見て、ちょっと首を振った。

大奥に上っていた女が、どこの馬の骨とも分らない男に抱かれようというのだ。——本当なら哀れなものである。

むろん、次郎吉以外にも「一足先に知らせて」やる相手が何人もいるのだろう。

新三はしばらく店を出たり入ったりしていた。一人ではなく、二人、三人と相手にするつもりらしい。

やれやれ……。

次郎吉が店を出ようとしていると、

「さあさ、入ってくんな！」

新三が上機嫌で店に入って来ると、それに続いて、どこかの商人らしい男たちがゾロゾロと——というほどでもないが、店に入って来た。

二、三、四人だ。

「ま、二階で酒の用意もありますんで。上って下せえ。どうぞどうぞ」

新三は、もう次郎吉のことは見向きもせずに、まるで幇間よろしく案内している。

一人一両か。——次郎吉はフラッと外へ出た。

「失礼だが——」

と、声をかけられ、「お暇はあるかな？」きちんと羽織袴の侍である。

「ご用ですかい」
と、次郎吉は訊いた。
「今、この店へ入って行った者たちをご存じか」
「いや、別に……。案内してた新三って奴は知ってますがね」
「話は聞いておられるか」
「くじを引け、ってしつこく言われましたよ」
「そうか。――拙者は引いた」
「じゃ、お侍さんも新三の客ですかい」
「そういうことになるな」
と、侍は真顔で肯くと、「くじで一番を引き当てた」
「さようで」
「一番は三両だそうだ。後は一両」
くじを引くほどのこともなかろうが、人間、くじで当ったとなると、気が変るということもなくなる。
「お払いになるんで？」
「もう払った」
侍は言った。「頼みがある」

「何でしょう？」
「拙者の代りに、その女の所へ行ってくれぬか」
次郎吉は面食らって、
「手前に、その三両の一番札を買えとおっしゃるんで？」
「金はいらぬ。ただ、代りに行ってほしいのだ」
次郎吉は首をかしげた。
「よく分りませんね。三両といやあ、安かあない。ご自分で行く気もないのに、なぜ買われたんで？」
「その疑念はごもっとも。——わけあって、その女にこの書状を早く手渡したいのだ」
侍は懐から手紙を取り出した。「それをおぬしに頼みたいのだ。預かってくれぬか」
「それなら、ご自分で渡しゃよろしいのでは？」
「拙者の顔を見たら、女は受け取らぬ」
「はあ」
「いいか？　礼は別にちゃんとする」
次郎吉は少しその侍を見ていたが、
「——承知しました。ですが、新三には何と言いますんで？」

「拙者が行くことにはしておく。おぬしは、ここで待っていてくれ」
「それじゃ、その辺の暗がりで、お侍さんの出て来られるのをお待ちしてますぜ」
「頼む。かたじけない」
侍は店の中へと、縄のれんを揺らして入って行った。
我ながら物好きだと思うが、次郎吉が気を変えたのは、女に興味あってのことではない。
話をしながら、侍の目がチラチラと他のどこかを見ているのに気付き、そこに人の気配を感じたのである。
どうやら裏に何かありそうだ。
大奥を追われた女、侍、そして三両の一番くじ……。どんな話ができることやら。
――少し待っていると、侍と新三が出て来た。
「このすぐ先ですからね、迷うこたあありませんよ」
と、新三が言った。
「分った。呑み込んでおる」
「では、お楽しみになって」
新三が薄笑いを浮かべて店の中へ入って行く。侍は周囲を見回した。
「――旦那、ここです」

「そうか。では何とぞよろしく頼む。この手紙を女に」
「お預かりします」
「これは少ないが、取っておいてくれ」
「確かに。旦那はどうなさるんで？」
「拙者はこの近くで待っている。ことが済めば、あの店に一旦戻らねばならん」
「ご苦労さまで」
次郎吉は、ちょっと肩をそびやかし、懐手して歩いて行った。
——空家はすぐに分った。戸口が少し開いている。
中へ入ると、奥の方にチラチラと灯が揺れていた。
入って行くと、畳に薄っぺらな布団が敷かれ、その前に女が座っていた。
次郎吉がその女を眺めていると、
「私を買ったのでしょう。遠慮はいらぬ」
と、女は言った。
大奥からそのまま出て来たような打ち掛け姿。しかし、次郎吉が驚いたのは、中臈といいながら、見た目にも若々しいこと。
「あんたが、お涼の方かね」
と、次郎吉は訊いた。

「もうその名は捨てて来た」
「ずいぶんと若いね。いくつだい？」
「十……九」
「その若さで、大奥に上り、今度は追放か。えらく老け込みそうなもんだ」
「大奥に未練などありませぬ」
と、女は言った。「ただ――文之進様のことだけが気がかり」
「それは、役者の浜島文之進のことか。瓦版にあった通りってわけかね」
「余計なことを言わず、早く済ませて下され」
と、女は次郎吉の方へ初めて目を向けた。
「こいつを頼まれて来た。どこぞのお武家さんにね」
「私へ？」
女は手紙を取り出して広げたが、「私をからかっておいでか」
白紙だ。――次郎吉は空家の表に人の気配を感じると、
「命を狙われる覚えは？」
「命を？」
「ともかく、ただごとじゃない。心当りは？」
「分りません」

と、女は初めて感情を露わにして、「あの方にお目にかかるまでは死ねません！」
声が震えた。潤んだ目は恋心で光っているようだ。
「立ちな」
と、次郎吉は言った……。

空家へバタバタと、浪人者が二人、踏み込んで来た。白刃を抜いて、
「男も一緒に斬り捨てるんだぞ」
「分ってる」
と、布団を敷いた奥へとやって来たが——。
「わっ！」
と、声を上げて立ちすくむ。
鴨居のきしむ音がして、女が赤い腰紐で首を吊り、ゆっくりと揺れていたのである。
その影が天井に大きく広がって揺れる。
「おい……」
「話が違うぞ」
浪人二人は気味悪そうに、ぶら下った女を見上げていたが、顔を見合せると、
「——逃げるか」

「よし」
二人はそのまま奥へと駆け込んで、裏の戸を蹴破って逃げ出して行った。
浪人たちが逃げ出した後、入って来たのはあの侍で、女の姿を見て、
「これは……」
と、息を呑むと、「まさか……」
青ざめた顔で、よろけるように空家を出て行く。表の引き戸が外れて倒れたが、まるで気付かない様子だった……。

流され者

「邪魔だ！　引っ込んでろ！」
怒鳴り声と共に、店先に店の手代が転り出て来た。
道を行く人々が、何ごとかと足を止めている。
「あらあら。——けがはありませんか？」
と、やっとこ起き上った手代へ声をかけたのは、次郎吉の妹、小袖である。
「すんません。——乱暴な奴で」
「どうしなすったの？」

「この辺の親分の半次郎の子分たちで……。何やら、新三さんを隠しちゃいないかと……」

「新三さん？　ああ、三男坊の」

「へえ。遊び暮してて、一向にうちへは近寄りませんので、そう言ったんですが……」

小袖は、のれんをそっと上げて中を覗いた。

「――ですから、先ほどから申し上げている通り、ここ何日も新三は帰っておりませんので」

店の主、久兵衛が店内で応対している。

「いい加減なこと言いやがると、承知しねえぞ！」

三人連れの半次郎の子分たちが怒鳴るので、客は早々に退散して行く。

酒問屋という商売柄、そう普通の客は多くないが、店の番頭や手代がこわごわ奥から顔を覗かせている。

「いいか、新三の野郎はな、親分の顔に泥を塗りやがったんだ。金で始末のつく話じゃねえんだぞ！」

「申し訳ございません」

久兵衛は、ひたすら頭を下げるばかり。

小走りに出て来た番頭が小さな包みを久兵衛の手もとに置く。
「色々ご不満でもございましょうが、本日はこれでお引き取りいただければ……」
久兵衛が包みを差し出すと、
「――ふん、こんなもので話がついたと思うなよ」
と、しっかり懐へ入れて、「ともかく新三の奴を見付けるまでは、親分も腹の虫がおさまらねえんだ！　いいな、新三が現われやがったら、半次郎親分に詫びを入れさせるんだぞ。分ったか！」
「重々承知いたしております」
子分たちは、ひどくいきがって店を出て行った。
「もう大丈夫だ。みんな出ておいで。お客様がお待ちだよ」
久兵衛はさすがに落ちついている。
「旦那様……」
と、番頭がやって来た。
「よくやってくれた。まあ、これからのことは、また考えよう」
と、久兵衛は立ち上った。
だが、奥へ入ろうとしてフラッとよろける。
「旦那様！」

「大丈夫。――大丈夫だ。大事ない」
久兵衛は、使用人たちの手前、しゃんと背を伸し、一歩一歩踏みしめるようにして奥へ入って行った。
「番頭さん……」
と、先ほどの手代が入って来る。
「ああ。けがはなかったかい？」
「へえ。おかげさんで。――旦那様は」
「うん。何ともないように見せておられるが、内心は……」
番頭は、店の入口に立つ小袖に気付いて、
「これは小袖さん。お見苦しいところを」
「ね、番頭さん」
と、小袖は言った。「ちょっと表に」
「へえ」
番頭はのれんをくぐって、「――何かお話でも？」
「新三さんには困ったもんですね」
「ええ、まあ……。三男坊に生まれなすったのはお気の毒ですが、旦那様も少し甘やかしてお育てになりました」

「でも、ああいう甘えん坊には、いくら叱られるからといって、自分の家以外に頼って行ける所はないはずですよ」
「小袖さん……」
小袖は、チラッと周囲を見回すと、
「本当は、あなたがどこかへ匿まってなさるんでしょ？」
番頭は明らかに動揺した。小袖はすぐに、
「ご心配は無用ですよ。口外するようなことはありません」
と言った。「でもね、半次郎の所の子分たちだって、あんな馬鹿ばかりじゃありませんよ。いずれ、新三さんの居場所を突き止めます。一旦、あの連中の手に落ちたら、それこそ千両だって返して寄こしゃしませんよ」
番頭の喜助は見るからに実直で真面目な人柄。困った表情でうつむいてしまう。
「ほらほら、すぐそんな顔して。それじゃ嘘はつき通せませんよ」
喜助は頭をかいて、
「恐れ入ります。小袖さんにはかなわない」
「うちの兄さんに何か手伝わせましょうか。新三さんのことも知ってますし」
「ああ！　次郎吉さんですか！　そいつは気付かなかった。いや、もしお願いできるものならぜひに。――いえ、もちろんお礼はしっかりさせていただきます」

「話してみましょ。ゆうべはどこぞに泊ったようだけど、もう帰ってるでしょうから」

「よろしくお願い申します」

喜助は深々と頭を下げた……。

「何だ、その生っちろい奴は？」

と、牢の奥から声がした。

ただでさえ手狭な牢の中へ、さらに五人も罪人が放り込まれて来たのである。

「てめえのことだよ」

と、罪人の一人が、その色白な男を肘でつつく。

「お邪魔いたします」

と、その男はていねいに頭を下げた。

「ふざけてやがるのか？」

と、奥からのっそりと現われたのは、がっしりした体つきのひげ面で、「何を食ってりゃ、こんなに真白になるんだ？」

と笑った。

入口辺りに正座していた男は、じっと顔を伏せている。

「おい！　何とか言わねえか！」
と、いきなり足げにされて、男は転った。
「よさねえか」
と、張りのある声が牢の中に響いた。
「だって、兄貴――」
「その人を知らねえのか。役者の浜島文之進さんだ」
「役者？」
出て来たのは、細身ながら、どこかにじみ出る貫禄を感じさせる男だった。
倒れていた男を助け起すと、
「すみませんね。何しろ、芝居なぞ見たこともねえ奴らばかりで」
「いえ……。ありがとうございます」
「文之進さん。俺はあんたの舞台をよく見ましたぜ。義経なんかやると、あんたのは本当に気品があって良かった」
「恐れ入ります」
「わけは聞いてます。あんたも運がなかったね」
「いえ……。これも前世からの定めかと思っております」
「よく言いなすった。――なあに、ああいう強がってる奴は、島へ送られると急にし

おれちまうんでさ。あんたのように、芯の強い人の方が、島の暮しに耐えられる」
「あなたは……。島へ前にも？」
「へえ。もう今度で三度目。――全く、こりない話でさあ」
と笑って、「俺は秀治郎、役者みてえな名でしょ？　ケチな盗っ人でさ」
「よろしくお願い申します」
「しかし……お上も気がきかねえ。人の恋路を邪魔するばかりか、島流しとはね。あんたはそう長かないんでしょう。辛抱することだ」
「私はともかく――お涼の方様の身の上が案じられてなりません」
「何でも大奥を追放になったとか聞いたがね」
「さようです。私と秘かに会っていたといっても、それが誰の迷惑になったわけでもなし……。お気の毒としか申し上げられませぬ」
文之進はそっと涙を拭った。
「今のお上は、何かと口実を見付けちゃあ、『人の道に外れておる』ってやって、人を牢へぶち込むんだ」
と、秀治郎は腕組みをして、「――さ、奥へ来なせえ」
「恐れ入ります……」
浜島文之進は、秀治郎の親切が身にしみたのか、涙を何度も拭いながら、牢の奥へ

と腰をかがめながらついて行く。
「お役者かい」
「こんな近くで見られるとはね」
と、他の罪人たちが珍しそうに眺めている。
秀治郎は、腕組みをしたまま、壁にもたれて座っていたが、
「文之進さん、どうだろう。失礼は承知で頼むんだが、ここで一さし舞っちゃくれまいか」
「私が……」
「三味線もないが、何か簡単なもんでいいから」
「それはもう……。かしこまりました」
と、文之進は正座して、「もうこの先、舞を舞うことなどありますまい。ご親切へのせめてもの恩返し。扇もなしで失礼いたしますが」
「ありがとうよ。――おい、みんな、場所を空けろ！」
言われて、罪人たちが壁の方へよけると、中央に畳何畳分かの空間ができた。
「では……女形でございましたので、静の舞を」
文之進は、その空間の中にスッと立った。
少し膝を曲げ、腰を落として立つと、「女」の香りが漂うようだった。

自ら唄いながら、「道行初音旅」の静御前を舞う姿は、衣裳も扇もないのに、華やかで、流れるように美しい。

およそ舞など見たこともない罪人たちも、初めはもの珍しげに、やがて食い入るように文之進の、いや静の舞姿に見入っていた。

「――失礼いたしました」

文之進が手をついてそう言うと、拍手が起った。牢の中が拍手で溢れた。

文之進は涙ぐんで、

「まさか――またお手をいただけるとは」

と、嬉しそうに言った。

秀治郎も泣いていた。

涙を拭おうともしていなかったので、涙が頬を濡らしていた。

「これで、ずいぶん気持が軽くなりました」

と、文之進は言った。「ありがとうございました」

秀治郎は立ち上ると、

「おい、みんな。こんな人が島へ送られるなんて、間違ってると思わねえか」

と言った。

「本当ですよ。何の罪もねえ人だ。でなきゃ、あんなにきれいに舞えやしねえ」

みんなが肯いている。

「――文之進さん」

と、秀治郎は言った。「ここは一つ、俺に命を預けなせえ」

「と申しますと？」

「命がけだが、あんたを逃がしてやる」

「――何とおっしゃいます？」

「俺たちで、あんたを逃がす算段をしようってえのさ。どうかね」

「そんなことが――」

と、文之進は言いかけて、「いえ、いけません。たとえうまく行ったとしても、あなたや、ここにおいでの皆様にご迷惑がかかります」

「なあに、うまくやりゃ大丈夫」

秀治郎はニヤリとして、「その代り、生きるか死ぬかだ。覚悟はしてもらわねえと」

「ですが、どうやって……」

「俺たちだけじゃ無理だ」

と、秀治郎は言った。「俺のちょっとした顔見知りの力を借りる。――おい、牢番を呼べ」

もう大分年齢の行った牢番がやって来ると、

「おい、ちょっと頼まれてくんな」
秀治郎が気軽に声をかける。「手紙を一本書きたい」
「すぐ持って来ますよ」
文之進は、牢番が素直に秀治郎の言うことを聞くのにびっくりした。
「普段から、あいつの母親や女房を何かと面倒みてやってるのさ」
と、秀治郎は言った。「ありがたがって、たいていのことなら聞いてくれる。もっとも、ここから出るのだけはだめだがね」
牢番が紙と矢立を持って来ると、秀治郎は手早く手紙をしたためてたたみ、
「――これを届けてもらいてえんだ。明日の昼までに。できるかい？」
「いいですとも。任しといて下さい」
牢番は懐へ手紙をしまった。
「――さて」
秀治郎はあぐらをかくと、「あんた、泳げるかね」
「はい。生れは小さな島でしたから、泳ぎは魚顔負けです」
「そいつは何よりだ」
秀治郎は身をのり出し、「よく聞きなせえよ……」

荒れ寺

今にも幽霊が出そうな、と言えば誰も近寄ろうとしないかもしれない。住職の途絶えてしまった荒れ寺は、塀さえ半ば崩れていて、どこからでも出入りできるのは便利だった。

次郎吉がその塀の穴から、荒れ果てた墓地へ入って行くと、ふと人の気配があり、

「誰だ？」

と、足を止め、鋭く訊いた。

「ごめん下さいまし」

と、小柄な男が墓の間から現われて、「〈甘酒屋〉さんとおっしゃるのはあなた様で」

「そうだが……。何ぞ用かい」

「この手紙を……。秀治郎さんから預かって参りました」

「秀治郎から？　あんたは？」

「牢番でございます。秀治郎さんに、ずいぶんお世話になっておりまして」

「ああ、そうか。あんたのことは聞いてる」

次郎吉は肯いて手紙を受け取ると、「秀治郎は、どうしてるね？」
「はい、体はお達者で」
「そいつは結構だ。これは少ないが手間賃だ。取っといてくれ」
「いえ、そんな……。では、ありがたくちょうだいいたします」
「ご苦労さん」
次郎吉は牢番が姿を消すと、少し辺りの様子をうかがってから、秀治郎の手紙を開いて、ザッと目を通した。
「何とまあ……」
と、思わず呟く。「妙な縁だ」
次郎吉は、荒れた寺の奥へと入って行くと、雑草が背丈ほども伸びた庭の隅に建つ小屋へと向って、戸を軽く叩き、
「いるかね」
と、声をかけた。
「――はい」
かすかな声で返事がある。
次郎吉が中へ入ると、たたんだ布団の上に座っていたのは、「お涼の方」だった。
「お涼さん、腹が減ったろう」

次郎吉が懐から竹の皮にくるんだ握り飯を取り出す。「さ、これを食べな。味はともかく、少しは元気が出よう」
「恐れ入ります」
と、今はただの「お涼」。「ご迷惑をかけて……」
「なに、どうせ遊んで暮してる身だ。――それより、どうだね、具合は」
「おかげさまで……」
「いくらか頬に赤みが戻って来たね」
次郎吉は肯いて、「待ってな。井戸の水をくんで来てやろう」
と、竹筒を手に小屋を出て行った。
――首を吊った、と見せたのは次郎吉のとっさの仕掛で、赤いしごきを少し短く切って首へ巻きつけ、長い方で体を縛って吊したのだ。縛った上に着物をはおっておけば、首を吊ったように見える。
「――よく食べるじゃねえか。それなら大丈夫だ」
と、次郎吉は、十九歳の食べ盛りに戻ったお涼を見て微笑んだ。
「おいしい……。大奥で、いつ毒を盛られるかと思いながら食べる料理より、ずっとおいしゅうございます」
「あんたも、とんだ目に遭ったもんだね」

と、次郎吉は言った。
「でも……あなたにまで何か害が及びましては……」
「いずれ、どこかへ落ちのびるといい。ただ、ちょっと思いがけねえもんが舞い込みましてね。——誰か来たな」
と、外の気配をうかがって、「何だ、小袖か？」
「兄さん、ここにいたのね」
小袖が戸を開けて入って来る。「あら」
お涼を見て、小袖は、
「もしかして、お邪魔だった？」
「馬鹿言え、そんなんじゃねえ」
「でしょうね。兄さんにゃ過ぎた人だわ」
「おい、自分の兄をけなしに来たのか？」
「ちょっと力を貸してほしいの」
「大もてだな、今日は」
と、ため息をついて、「今二つ頼られてるところだ。三つじゃやり切れねえ。お前、何とかしろよ」
そう言ってから、次郎吉は小袖を紹介した。

「まあ、妹さんでしたか。てっきり奥様かと……」
と、お涼は言った。「でも、戸の外の足音だけで、妹さんとお分りなのですね」
「足音にゃ、ちょっとうるさいんで」
「ちょっと、兄さん」
と、小袖が次郎吉を外へ引張り出す。
「何だってんだ」
「頼まれちゃったのよ、喜助さんから」
「喜助？」
「そう、新三さんのことをね」
「新三だって？」
次郎吉は目を丸くして、「やれやれ……。どうなってやがるんだ？」
「どうして？」
「いや、それは後で話す。それで、新三の奴がどうしたって？」
小袖が、半次郎の所の若い者たちのことを話すと、
「身から出た錆ってやつだ」
「そりゃそうだけど、お店の人はお気の毒よ」
「それで今、新三はどこにいるんだ？」

「聞いて来たわ。一緒に行ってくれるでしょ？」
「いやだと言っても、引張ってくんだろ」
と、次郎吉は肩をすくめた。「しかし、今度に限って、俺もちょいと係りがあるんだ。一緒に行くぜ」

「何だか、洒落た家だな」
と、次郎吉は林の中の道から、その別宅を眺めた。「あれは久兵衛の？」
「ええ、父親の久兵衛さんが、一時若いお妾さんを囲ってたことがあって、そのとき住まわしてた別宅なんですって」
「へえ。あの真面目そうな久兵衛がね」
「男なんて、みんな同じよ」
と、小袖は言った。
「おい、そう一括りにするなよ」
と言いかけて、次郎吉は足を止め、「おい、様子がおかしい」
「え？」
「障子が破れてる。誰かいるぞ」
「本当ね。——何人かいるわ」

二人は林の中で身を潜めた。
家の中から、バラバラと庭へ出て来たのはあの久兵衛の店の店先で暴れていた男たちだ。
「見付かったんだわ」
と、小袖が言った。「遅かったわね」
「待て。まだ誰かいる」
半次郎の子分たちは息を弾ませて、返り血を浴びているのが見えた。
そして、もう一人、庭へ出て来たのは――。
「まあ……」
小袖が目をみはった。
「――どうぞ私のことはご内聞に」
と、男たちへ、腰をかがめて言ったのは、番頭の喜助だった。
「分ってるよ。俺たちが見付けたってことにしねえと、こっちも親分に顔向けができねえ」
「では、後のことは――」
「ああ、お前の頼みは分ってる」
「よろしくお願い申します」

「女一人と、あの遊び人だろ。大した手間でもねえ」
次郎吉と小袖は顔を見合せた。
「首尾よくいきましたら、分け前は充分に、そちらにも……」
と、喜助は言った。
「ああ、楽しみにしてるぜ。しかし、お前も性質の悪い番頭だな」
「何しろ、あの店にいたのでは、一生こき使われて終りでございます」
「まあ、俺たちもこづかい稼ぎになりゃ文句はねえ。後は任せたぜ。これからその次郎吉って奴の長屋へ行って、手っ取り早く片付けてくる」
そこへ、
「わざわざ行くにゃ及ばねえ」
と、次郎吉は声をかけた。
「――次郎吉さん！」
喜助が素早く後ずさる。
「小袖も一緒だ。手間を省いてやる」
「喜助さん……」
小袖が言った。「そんな企みをしてるのなら、どうして私に新三さんのことを頼んだりしたの？」

「小袖さん……。お願いした後で思い付いたんですよ。苛々した旦那様に、『お前が新三をよく見てないからだ！』って、殴られましてね……」

喜助は庭の立木に身を寄せて、「頭に血が上ったんです。新三さんをこの人たちに始末してもらい……」

「死体を隠して、連れ去られたってことにして、店から身代金を騙し取ろうって寸法だね」

と、次郎吉は言った。「一旦そういう了簡を起すと、ろくな者になれないぜ」

「どうせ私なぞ……。ともかく、お気の毒ですが……」

「気の毒なのはどっちかしらね」

と、小袖は言った。

「二人まとめて片付けてやる」

半次郎の子分たちが刀を抜く。——四人だ。

斬りかかった刀が宙をフラッと泳いで、小袖の小太刀が一瞬の内に二人を斬り倒していた。

次郎吉の手に短刀が光って、一人の喉を切り裂く。

残った一人は愕然として、あわてて逃げ出した。次郎吉の手から短刀が飛んで、背中をみごとに捉える。

わずか数秒。

喜助が啞然として、その光景を眺めていた。

「――喜助さん」

小袖が小太刀をさげて庭へ入って行く。

「赦して下さい！　お慈悲です！」

喜助が地べたに這いつくばって、「魔がさしたんです！　どうぞ殺さないで下さい！」

「喜助さん」

と、次郎吉は言った。「人生にはね、手遅れってことがあるんだよ」

「畜生！」

喜助が突然懐から短刀を抜いて、次郎吉へと飛びつくように襲いかかった。

次郎吉が素早くかわして、喜助の体は前へ泳いだ。

小袖の小太刀が喜助の体を真横へ払うと、

「――ツイてねえ」

と、喜助は呟いて、ドッと倒れた。

「全くだ」

と、次郎吉は首を振って、「ツキが回って来ねえからって、焦ると、ろくなことは

ねえぜ」
「兄さん……」
中へ入ると、新三がうつ伏せになって倒れていた。背中に、二度三度斬られた傷。
「逃げようとしてやられたんだな」
「久兵衛さんに知らせないと……」
「いや、すまねえが、こいつはちょいと拝借する」
「え？」
小袖が小太刀を納めながら、ふしぎそうに次郎吉を見た。

船出

「荷は積み終えました」
と、船の差配をする役人が言った。
「よし」
合図と共に、島へ送られる罪人たちが、手首を縛られ、つながれて一列になってやって来た。
夜の海が暗く波の音を響かせている。

「あんた！」
送られる者の家族が、泣きながら駆け寄る。「行かないでおくれ！」
「おい！　向うへ行け！」
役人が追い払うが、何十人も集まった人々が、次々に駆け寄って、追い払い切れない。
「ぐずぐずするな！」
たまりかねて、奉行所の役人が船から下りて来ると、「こら！　お上の邪魔をするな！」
と、十手を振って、集まって来る女たちを追い払った。
「早く乗せろ！」
「へえ。——おい、急げ！」
すると——手首をつながれていたはずの一人が、パッと抜け出して駆け出したのである。
「おい！　逃げたぞ！」
役人たちがあわてて追いかける。
その罪人は真直ぐに海へと身を躍らせた。
「逃すな！」

「どこだ！」
大騒ぎになった。
「船が――」
小船が、島へ行く大型の船と岸との隙間に入り込んで来た。
「おい、あの小船だ！」
船へと渡した板が、波のあおりを食らって外れると、海中へ落ちた。
「おい！　危いぞ！」
船上の騒ぎで、船体が大きく揺らいで、岸に向って打ちつけられた。
挟まれた小船はメリメリと音をたてて裂け、バラバラになった。
――次郎吉は、罪人たちの中に秀治郎の姿を認めると、燈明の明りのそばへ寄った。
秀治郎が次郎吉に気付く。
次郎吉は小さく肯いて見せた。それで充分だった。
秀治郎はニヤリと笑って、頭を下げた。

「ゆうべは大変だったそうじゃねえか」
江戸っ子の早耳は、長屋の朝に、すでに昨夜の騒ぎを聞きつけていた。
「おい、〈甘酒屋〉さん、知ってるかい」

「ああ、罪人が逃げようとしたって」
次郎吉が起き抜けの顔で欠伸をする。
「役者の浜島文之進だったってよ」
「へえ、そうだったのか」
「もうちっとで逃げられるところが、船と岸の間に挟まれちまって、命を落としたとさ。ドジな話じゃねえか」
「そうか。そいつは可哀そうだったな」
「ねえ」
と、井戸へやって来たおかみさんたちの一人が、「文之進っていや、いい男だったよ。どうして島流しになんか……」
「ねたんだ奴がいたのよ、大方」
「そうだろうね」
次郎吉は顔を洗って家へ戻ると、身仕度をして、珍しく昼前から長屋を出た。
――あの荒れ寺へ着くと、小屋の戸をそっと開けて、
「小袖、いるか？」
「ええ」
中から小袖が立って来る。「様子はどう？」

「ああ。死んだのは文之進ってことになってる」
「じゃ、うまく行ったのね」
「もう少し、奉行所の様子を見よう。まあ大丈夫だと思うが」
暗い座敷に、二つの人影があった。
「ありがとうございました」
文之進が頭を下げる。
「秀治郎の頼みだ」
と、次郎吉はあぐらをかいて、「ともかくもう少しここに身を隠していなせえ」
「生きて、またお会いできるとは……。夢のようで……」
と、お涼が涙を拭う。
秀治郎との打ち合せ通り、罪人の家族を装った小袖が文之進のもとへ駆け寄って手首の縄を切り、文之進は海中へ。
文之進は深く潜って、船底の下をくぐり、暗い沖まで出て、そこで待っていた小船へと這い上った。
船と岸の間に挟まれたのは、罪人の衣を着せられた新三の死体で、顔も潰れて分らなくなっていたのである。
「お涼さんも、大奥を追われなすって、秘かに消されることになっていたんだね」

「あの武士は、公儀の者です。私もよく知っているので、自分では斬りにくかったのでしょう。浪人を雇って……」

「あんたの死体はないが、まあ首を吊ったという報告を聞けば、向うもそれ以上は調べねえだろう」

と、次郎吉は言った。

「お二人で、江戸を離れることね」

と、小袖は言った。「仕度は整えてあげますよ」

「何とお礼を申し上げたらいいか……」

と、文之進が声を詰らせる。

「その代り、舞台には立てないが、どこぞの田舎で畑仕事でもするといい」

「漁師もいいわね、あれだけ泳ぎが達者なら」

と、小袖が言った。

「私ども二人、何をしてでも、生きのびて参ります」

文之進とお涼が手を固く握り合う。

小袖が微笑んで、

「ここでチョンと拍子木が鳴って、幕だわね」

と言った。「兄さん、客は退場しましょうよ」

鼠、面子をかける

朝もやの決闘

その二人が、白い朝もやの中から姿を現わすと、二手に分れて集まっていた見物人たちは、それまで小声で交わしていたヒソヒソ話をピタリとやめた。

砂利を踏む足音だけが、静けさの中に聞こえていた。

二人の男は、ほんの数尺の距離で足を止めると、

「来たな、武市」

「うむ。――今日こそ決着をつけよう」

「望むところだ」

「助三郎、おぬしの妹はどうしている」

「波乃か。近々嫁入りすることになっている」

「なに、波乃殿が嫁入りと？」

「うむ。それがどうかしたか」

「いや……。それはめでたい」

ややあって、二人は深く息をつく。

「武市。合図は？」
「城の太鼓が合図だ」
「よかろう」
二人は、砂利を蹴りながら草履を脱ぎ捨てた。
周囲の人々の囁き交わす声も止んで、張りつめた空気が辺りを支配した。
城の太鼓がドンと遠く鳴った。
「次だ」
「よし」
砂利を踏む両足にぐっと力を込め、二人はそれぞれに振り向くと、
「いいか！」
と、声をかけた。
しばし——間があった。
そして、次の太鼓がドンと朝の空気を震わせた。
「行け！」
武市と助三郎が同時に怒鳴った。
二つの駕籠は、一斉に城へ向って突進した。
いずれ劣らぬ屈強な体つきの男たちが駕籠を前後二人でかつぎ、砂利を蹴って駆け

て行く。陸尺と呼ばれる男たちだ。

むろん、行列の他の者たちは置いて行かれる。

走っているのは二つの駕籠と供頭の二人だ。そして、駆け出すと同時に、見物人たちが一斉に大声を上げた。

「頑張れ！」

「負けるな！」

「走れ！　もっと走れ！」

ウォーッという咆哮と共に、陸尺たちは主君を乗せた駕籠が揺れるのも構わず、先陣を競って突っ走るのだ。

「走れ！　負けるな！」

駕籠の前を駆けながら、武市と助三郎はそれぞれに振り向いて怒鳴る。

陸尺たちは、顔を真赤にして走る。――しかし、駕籠は前後二人でかついでいるから、一人だけ足が速くても、却ってつり合いが悪く、遅れてしまう。

「エイ！　ヤ！　エイ！　ヤ！」

と、拍子を取りながら走る。

助三郎の駕籠の方がジリジリと前へ出て来た。見物人たちがワッと沸く。

「突っ走れ！」

と、助三郎が怒鳴った。

それが裏目に出た。助三郎側の陸尺は更に足を速めようとして、前後の動きにずれが生じたのである。

後ろの陸尺がつんのめるように、足取りを乱した。それに引張られるようにして、駕籠は斜めになって、地面をこすった。

アーッと見物人たちから声が上がった。

辛うじて駕籠は転ることなく持ちこたえた。しかし、その間に、武市の方の駕籠はぐっと先へ進んで、城の門へと着いた。

「やった！」

と、見物人が歓声を上げる。

拍手と歓声と野次が、しばし城の前の広場に溢れた。

「――俺の勝ちだ！」

武市は、後から着いた駕籠の助三郎へ、大きく息を吐きながら言った。

「ああ……。悔しいが仕方ない」

助三郎も真赤な顔で汗を拭う。

むろん、実際に駕籠をかついだ陸尺たちは武市たちどころではなく、喘ぎながらその場にしゃがみ込んでしまっている。

「助三郎……」
と、武市は息を吐きながら言った。「波乃殿の婚礼は……いつだ」
「来月の……初めだ……」
「そうか……」
息が上がっているので、話が途切れ途切れである。
そのころ、やっと行列が駕籠に追いついた。
「波乃殿の相手は……誰だ」
「そんなことを……聞いてどうする」
「いや……訊いてみた……だけだ」
すると、行列の供侍の一人があわてて助三郎の所へ駆けて来て、
「おい、助三郎！」
「面目ございやせん。この次にゃ、必ず――」
「いや、そうではない！」
「はあ」
「殿が――お駕籠の中で、目を回しておられる！」
――そのころ、集まった見物人たちの中では、
「おい！　武市の勝ちだぜ！　助三郎に賭けた奴は払いな！」

と、賭け金を集めている奴がいた……。

「へっ、馬鹿らしい」

通称〈甘酒屋〉の次郎吉は首をすぼめて、「朝っぱらから起きて見に来るほどのもんじゃねえな」

一緒に歩いているのは妹の小袖。

「何言ってんの。しっかり賭けて稼いだくせに」

「江戸っ子は何でも賭けるのさ。しかし、まあ駕籠の中の殿様も大変だな」

「この間なんか、どこかの殿様が駕籠から放り出されたってよ」

「下手すりゃ首の骨を折ってイチコロだな」

と、次郎吉は呆れて、「朝にゃ弱いから、一向に知らなかったぜ。こんなことが流行ってるたあ」

「たかがお駕籠の『先陣争い』だけど、あの武市と助三郎って中間にとっちゃ真剣勝負なのよ。『顔』のきく中間が供頭でつけば、たとえ行列が道で行き会っても、相手が道を譲るってんだから、お大名だって大事になるわ」

「へえ」

「中間の方も、そうして名を上げると、もっとお給金のいいお大名へ奉公できるんだ

から。うまく行きゃ、立身出世だって……」
「なるほどな」
次郎吉は首を振って、「小袖、お前、何でそんなことに詳しいんだ」
「こんなこと、誰だって知ってるわ」
と、呆れたように、「兄さんが世間に疎いだけよ」
「俺の興味は大名ったって、屋敷の蔵の中身だけだ」
と、次郎吉は言って、ふと通りかかった橋の中ほどに立つ町娘に目を留めた。
まだ十六、七というところか。じっと欄干の手すり越しに川面を見下ろす白い横顔は、目をひくほどに美しかった。
だが、そんな呑気なことは考えていられなくなった。
見ていると、その町娘が欄干を乗り越えて、いきなり川へ飛び込んだのである。
「兄さん！」
「身投げか！」
次郎吉は次の瞬間、自分も川の流れへと身を躍らせていた……。

「ねえ」
と、小袖が言った。「せめて、どこの誰だか、名前くらい言ったら？」
しかし、言われた娘の方は、
「誰だっていいでしょ！」
と言い返すだけ。
「だけどさ、こうして命を助けたのも、何かの縁じゃないの」
――川へ身を投げた娘を、次郎吉が自分も川へ飛び込んで救ったのだったが……。
気を失っていた娘を長屋へ運んで来て、やがて娘は息を吹き返した。
「どんな理由があるか知らねえが、その若さで死んじまっちゃもったいないぜ。そうだろ？」
と、次郎吉が話しかけると――。
娘はワッと泣き出して、
「死なねばならぬ深い訳がございます……」
と布団に突っ伏すか、はたまたシクシク泣いて、

「もう私には生きる望みもありません……」
と嘆くか、と思いきや――。
「何だって余計なことするのよ！」
と、次郎吉に食ってかかったのである。「せっかく、人が思い切って飛び込んだってのに！」
これには次郎吉も啞然として、
「勝手にしやがれ。もう助けねえ」
と、自分もずぶ濡れになっていたので、
「おい、湯へ行って来る」
と、手拭い一つ肩へかけて、出かけてしまった。
仕方なく、小袖がこの娘の相手をしているというわけだった……。
「誰も、助けてくれなんて頼んだ覚えはないわ！」
布団に寝てはいるものの、元気なこと。
「だけどあんた……十六？　十七？　まだ何もかもこれからじゃないの」
と、小袖は穏やかに言った。「生きていりゃ、これから楽しいことがいくらだって待ってるわよ」
「どうしてそんなことが分んのよ」

「だって、あんたよりは少し長く生きてるからね」
「人は色々でしょ。幸せになれる女も、なれない女もいるのよ」
「だから、その『幸せになれない』って訳を教えてくれない？」
「聞いてどうするの？　誰にも何ともできないのよ」
と、娘は投げやりな口調で、「自分のことはよく分ってる。どうすることもできないんだわ」
小袖はため息をついて、
「頑固だこと」
と苦笑した。
「悪かったわね」
と言った拍子に、「クシュン！」
と、クシャミをする。
「ほら、はなをかみなさい」
小袖が鼻紙を渡してやると、娘はクシャッと潰してはなをかんだが、そのとき小袖は娘の目から溢れる涙を確かに見たのだった……。
「ああ、やれやれ……」

湯で体を温めて、次郎吉はやっと一息ついた。
下手すりゃ、こっちまで風邪ひくところだぜ。それにしても、あんな若い娘が身投げとは。
普通なら大方叶わぬ恋の悩み、というところだろうが、あの勝気さはそうとも思いにくい……。
表に出ると、少し雲行きが怪しい。
これで、降られて、また濡れるんじゃかなわねえな。
次郎吉は小走りに長屋へ向ったが、そのおかげで跡をついて走る足音に気付いた。
フイと横丁を曲って細い抜け道から堀割の傍の空地へ出て待っていると、カタカタと下駄を鳴らしてあわてた足音。
空地へ出てキョロキョロしている若侍へ、
「何かご用ですかい」
と、声をかける。「人の跡を尾けて歩くのは、あんまり感心しやせんね」
「すまん！」
と、いやに素直に謝られて、却って調子が狂い、
「お見受けしたところ、物盗りってわけでもなさそうだ。俺に何のご用です？」
見るからに家柄の良さそうなりをしている。まだ二十歳かそこいらだろう。

「いや、申し訳ない！」
と、もう一度詫びてから、「実は――貴公が、身投げして溺れかかった娘を助けたと教えてくれた者がありまして」
「ああ、それなら確かに。――あんたは、その娘とお知り合いで？」
「いや、もしかして、私の捜している娘ではないかと思い……。その娘は今どこに？」
「俺の長屋にいますがね。何しろ強情で、名前も素性も言わねえと来てる。こっちも困ってたところで」
それを聞いた若侍はホッとしたような笑顔になり、
「ああ、それならきっと小夜だ！　とても気の強い娘でして」
「へえ。お侍さんはあの娘に惚れてなさるんで？」
そう言われるとカーッと赤くなり、
「いや、その……まあ、そうとも言えないわけでもないが……」
どうやら、人柄は良さそうだ。
「ついておいでなせえ。長屋はすぐそこだ」
「かたじけない！」
と、次郎吉について歩きながら、「申し遅れました。私は間久之進といいまして――

―」

「まあ、どんな事情かは聞きませんや。ともかくあの強情な娘を連れて帰っていただけりゃ、こっちは助かるってもんで」

「さて、ついて来てくれるかどうか……。しかし、他人様の家でご厄介になるのは、当人もきっと本意ではありますまい」

「ともかく、まずその小夜さんって人かどうか、会ってみて下さいまし」

二人が長屋へ入って行くと、パラパラと降り出した。

「いけねえ、雨だ。濡れねえ内に早く」

と、次郎吉は足を速めたが――。

ピタリと足を止めると、

「ご用心なさい」

「え？」

戸が半分開いている。――そして、

「ウッ！」

と、中から呻き声がすると、戸を蹴倒して抜身を手にした浪人が脇腹を押えて、よろけるように出て来る。

そして、浪人は長屋の反対側の方へと駆けて行った。

間久之進は呆然と立ち尽くしている。
次郎吉は駆け出すと、
「小袖！　無事か？」
「向うは無事じゃなかったけどね」
小袖が小太刀を鞘へ納めるところだった。
「どうしたんだ？」
「知らないわ。いきなり浪人が刀を振って飛び込んで来たのよ」
と、小袖は事もなげに言った。「手加減してる暇もなかったわ。斬ったけど、死んじゃいないでしょ」
「そうか……。あの娘は？」
「え？　どこかその辺に……」
と、振り向くと、ぷっと吹き出した。
枕屏風のかげから、丸くなっている娘のお尻がはみ出している。
「もう大丈夫よ」
と、小袖が声をかけると、こわごわ頭を出して、
「ああ……。怖かった！」
「死のうとしてたくせにか？」

と、次郎吉が言うと、
「自分で飛び込むのと、人に斬られるんじゃ違います！」
と、また強気に言い返す。
「まあいい。知り合いを連れて来たぜ」
次郎吉が、「さあ、お入りなせえ」
と呼ぶと、
「ごめん」
と、若侍が入って来る。
「久之進様！」
娘が目を大きく見開いた。
「小夜！　何てことをしたんだ！　お前を捜して、方々歩き回ったぞ」
小夜と呼ばれた娘は、久之進へ駆け寄ろうと二、三歩進んだが、ペタッと座ると、
「誰が捜して下さいと頼みましたか！」
と、また「強情な娘」に戻って言ったのだった……。

不器用者

下駄の音がして、振り返ると、
「ごめんなさい！」
息を弾ませた娘が小走りにやって来た。
「なかなか家を出られなくて……。兄さんが何か薄々気付いてるみたいで」
「そうか。――いや、無理言ってすまんな」
と、武市は言った。
「そんな……。他人行儀な口をきかないで」
と、娘が目を伏せる。
「しかし、俺たちは他人だ」
「武市さん――」
「仕方ないだろう。波乃さん、あんたはもうじきよそへ嫁ぐ身だ」
波乃は少し恨みを込めた目で武市を見て、
「そんな話をするために、私をここへ呼んだの？」
「いや、それは……」

武市は口ごもった。

――どこで会うといっても、武市は江戸市中で知られた顔だ。波乃にしても、兄、助三郎が武市とくり広げている、登城での「駕籠競走」のおかげで、方々で声をかけられる身だった。

今、二人の会う場所は、すっかり荒れ果てた空家で、何やら首をくくって死んだ店子の幽霊が出るとかで、人も近付かず、取り壊しもされていない。

「これから先、もう婚礼の仕度が進めば、後戻りはできなくなります」

と、波乃は言った。「それで、あんたは構わないの？」

「そう言わねえでくれ。――俺だって辛い」

と、武市はすり切れた畳の上にあぐらをかいて、「でもな、助三郎に言われりゃ、お前だっていやとは言えねえだろう。しかも相手はたいそうな家柄だってえじゃねえか」

「私はそんなもの、欲しくもない」

と、波乃はプイと横を向いた。

「何て侍だった？」

「間久之進。――お殿様に召し出されるわけじゃあるまいし、断りゃお手討ってこともないわ」

「うん……」
「じれったい人ね！」
波乃は武市の膝を拳で叩いた。「駕籠かきの陸尺たちに号令するときのあんたはどこへ行ったのよ！」
武市は無言で、じっとうつむいている。
そして——武市はいきなり波乃を抱き寄せると、畳の上に押し倒した……。

「父は、私がまだ三つのころ、胸を患って亡くなりました」
と、小夜は言った。「それ以来、私は母と二人暮しで、貧乏そのものの日々でした」
「それでご奉公に？」
と、小袖が言った。
「旅館の女中をしていた母が倒れたんです。去年のことでした。母の稼ぎがなくなると、その日から食べて行けません。母を、お医者様にも診せたい……。そのとき、大家さんが、ご存じの方のつてで、武家屋敷に奉公に出ないかと……」
「それで私の所へ」
と、久之進が言った。
「大家さんからは言い含められていました。『旦那様から、夜のお召しがあったら、

逆らってはいかんぞ』と……」
「それで実際には……」
「旦那様より前に、この――」
と、久之進の方を向いて、「久之進様と……」
「へえ」
次郎吉は面白がって、「久之進さん、あんたも若いくせに、結構隅に置けないね」
「いや、それは……」
と、間久之進は真赤になって、「小夜が部屋を間違えたのです！　本当なら父の寝所へ呼ばれていたのですが……」
「どの部屋だか、分りゃしませんよ」
と、小夜は言った。「夜は暗くて、ろくに見えないし。それに――私はもうドキドキして、死ぬかと思うほど怖くって……」
「しかし、すぐ私の床へ入って来たではないか」
「そりゃあ……。一旦覚悟を決めたら、ためらっていても仕方ありませんもの。思い切って、えい、やっ、と」
「こっちはびっくりしました」
と、久之進が言った。「眠っていたら、突然これが飛び込んで来たので……。何が

何やら分らない内に……まあ……それでも、何とかなることはなり……」
「私はもう夢中で、わけも分らず……。でも、落ちついてから、この方が『お前は誰だ?』とおっしゃったんで、もうびっくり」
「明りを点けると、小夜が胸もとをかき合せて座っておりました」
「何もそんなことまで!」
小夜に腕をつねられて、
「痛い! すぐつねるのはよせ」
小袖がふき出して、
「まあ、仲のおよろしいことで。じゃ、旦那様は待ちぼうけってわけですね」
「私は小夜を帰そうとしたのですが、動こうとせず……。結局朝まで私の部屋に」
「そんな! 久之進様が『帰るな』とおっしゃったんじゃありませんか!」
「まあ、どっちでもいいがね」
と、次郎吉は言った。「それであんたのお父上はどうしなすった」
「事情が分ると、父は大笑いしておりました。ただ——一つ問題が」
「というと?」
「私には、親の決めたいいなずけがあります」
と、久之進が言った。「父は、小夜のことは遊び相手と思っておりますが」

「それで身投げかい？　しかし、病気のおっ母さんのことはどうするんだ」
「忘れてました。――久之進様の冷たい仕打ちに、ただもうカーッとなって」
「おい、それはないぞ。私がいつそんな冷たい仕打ちをした？」
と、久之進は心外な様子。
「私をお呼びになっておいて、行ってみると波乃さんと手を取り合って……。あんなひどい仕打ちはありません！」
「いや、あれは違う！　お前は買物を言いつかって出かけた、と聞いて――」
「奥方様に伺うことがあったので戻ったのです。それでご伝言を聞き……」
「そんなことは知らなかった」
「でも、私がいないと分って、波乃さんに手を出されたんじゃありませんか。ひどいわ！」
「だからあれは……」
「まあまあ」
と、次郎吉は割って入り、「その波乃って方がいいなずけで？」
「そうです。助三郎という中間の妹で」
「助三郎だって？　あの朝の登城競走の？」
「すっかり知れ渡っているようです。妙なものが流行る世の中だ」

「確かにね」
「しかし、波乃さんはとてもいい人です。しっとりとしておとなしく……」
「私と違って、とおっしゃりたいのですね」
と、小夜がむくれる。
「いや、しかし波乃さんは私との縁談を喜んでいない。まあ、兄の言いつけ、というので口には出さないが、態度で分る」
「――なるほど」
次郎吉は顎を撫でて、「だが、肝心のことはさっぱり分りませんね。なぜここへ浪人が斬り込んで来たか……」
「小袖さんって、強いんですねえ！」
と、小夜は目を見開いて、「目にも留らぬ早業で浪人をスパッと……。久之進様なんか、きっと逃げ出してますね」
「武士に向って何だ、その言い草は！」
と、久之進は刀をつかんで、腰を浮かす。
「どうぞ斬って下さいまし。久之進様が斬れるのは、じっとしている女だけ、と評判になりますよ」
久之進は刀を放り出すと、

「全く！　いつもこうだから！　どうしてこんな娘に惚れてしまったのだろう！」
と、嘆いた。
「――あの浪人、『お前が小夜か！』って言って、斬りかかって来たわ」
と、小袖が言った。「あなたが狙われる心当りは？」
「こんな貧乏な女中を狙って何になります？」
「あんたが、どこぞの殿様の落としだね、とでもいうのなら、分らないでもねえが。しかし、そんな話じゃ面白くねえ。貧乏な女中が殺されそうになるってところが面白い」
「ともかく屋敷へ帰ろう。後のことは、また相談しよう」
と、久之進は言った。「次郎吉殿といわれましたな。ご迷惑をおかけして。――改めて、いずれお礼に」
「帰りません」
「またごねるのか？　いい加減にしろ」
「私を狙う者が、もし久之進様を誤って……。そんなの、いやです」
そう言われると、久之進も言葉がなく、パッと小夜の手をつかむと、
「私のことを心配してくれるのか」
「そりゃあ……。私のせいで久之進様が殺されでもしたら、一生悔んでいなくてはな

りません」
「小夜！」
「ちょっと待ちなって！　――全く、若い人ってのは分らねえ」
「兄さんももう年齢ね」
「からかうんじゃねえ。ともかく、小夜さんをどこかへ移そう。また新手が来るかもしれねえ。――といって、さて、どこへ隠すかな」
と、次郎吉は考え込んだ……。

邪な夜

「遅くなりまして」
と、久之進は襖を開けて言った。
「今、お帰りですか」
母親のさとが、別に不機嫌な様子でもなく、「たまには良いが、あまり夜遊びも過ぎぬがいいですぞ」
と言った。
「いえ、夜遊びというわけでは……」

「夕飯は済まされたのか？」
「それが……。腹が空いて、目が回りそうです」
「おやおや」
と、さとは笑って、「すぐ仕度させましょう。――誰か」
すぐにやって来た女中へ膳の用意を言いつけると、さとは、
「そうそう。波乃さんがみえていますよ」
「え？　波乃さんが、こんな時刻に？」
「何でも、あなたにお話があるとか。心当りは？」
「いや、一向に。――どうしましょう」
「私から言っておきましょう。ともかく、あなたはお腹の方を片付けなさい」
「はあ」
久之進はいささかきまり悪そうだ。
さとは三十代も半ばを過ぎているが、すっきりと細身の容姿の女である。少し冷たい感じを与えるほどに、何ごとにも几帳面な性格。
しかし、久之進を見る目は、どこか感情を押し殺したようなところがあった。
「父上は……」
「金山様の所です」

「また囲碁ですか」
「本当に、あれに熱中なさると、時のたつのを忘れてしまわれる。——あ、お帰りのようですね」
廊下をドタドタとやって来る足音は、父、間弘兵衛のものに違いない。
「帰ったぞ」
と、少し舌がもつれて、「今日は大いに負かしてやった！」
「それはようございました」
さとは立って行って、「お着替えを……」
「うむ……。床を敷け。少し飲み過ぎた」
酔うと眠くなる性質で、顔もほてったように真赤だ。
「少しおさましになってからの方が——」
「いや、眠いのだ。——ここでもいい」
「いけません。お風邪を召します」
さとは困ったように、「では、目を覚まされましたら……」
「ああ、起きたら一風呂浴びよう。——おい、誰か客か？」
と、袴を取りながらフラついて、「おっと……」
「ご用心なさいませ！——波乃さんが久之進にご用とかで」

「波乃？　ああ、あの娘か。一人で来たのか？」
「久之進も遅かったものですから。もうずいぶん待っておいでです」
「それはいかんな。帰り道が女一人では……」
「送らせますから、ご心配いりません」
——弘兵衛は早々と床に入って、いびきをかき始めた。

「お待たせしてしまって」
と、さとが部屋へ入って行くと、
「いえ、こちらこそ、勝手にお邪魔をしてしまいまして」
と、波乃はあわてて座り直した。
「久之進は今、台所で膳を用意しているので、少しお待ち下さいね」
「はあ……」
「せめてお茶なり、いれかえましょう」
「いえ、とんでもない！」
「堅苦しいことは言わずに。何も大名屋敷というわけではありませんよ」
と、さとは微笑んで、「ちょっとお待ちなさいね」
「恐れ入ります……」

波乃はいささか足もしびれて、疲れていたが、せっかくここへ来たのだから、何も話さずに帰りたくはなかったのである。

兄、助三郎の言いつけに背くことなど、以前の波乃には想像もできないことだった。

——早くに父を亡くして、助三郎を父親代りに育った波乃である。

その兄が、間久之進の許へ嫁げと言ったときも、波乃は大して迷いもせず承知した。久之進の側の事情で結納が延びて、その間に、波乃は生れて初めての恋に落ちてしまったのである。

自分が、二、三度会っただけの武市に夢中になり、進んで身を任せることなど、考えたこともなかった。

しかし、今となっては、久之進にすべてを打ち明け、婚礼は取り止めるしかない、と固く心に決めている。たとえ久之進が怒って、

「手討にする！」

と、刀に手を掛けたとしても、ならば潔く討たれる覚悟である。

武市と交わした契りに命をかけて、たとえ果てても、意に添わぬまま、好きでない男に嫁ぐことはできない……。

「——さあ、どうぞ」

さとがお茶を運んで来た。「じき、久之進も参りましょう」

「恐れ入ります」
さとが行って、一人になると、波乃はお茶を一気に飲み干した。喉が渇いていたのだ。
ホッと息をついて……。
少しすると、猛烈な眠気が襲って来た。
「こんなはずは……」
と呟くと、波乃はそのまま突っ伏すように倒れてしまった。

酔った夜は、ひどく喉が渇いて目が覚める。
――弘兵衛のくせというものだった。
「おい、誰か水を持って来い」
と、声を出してみるが、かすれて言葉にならない。「おい、さと！」
妻を呼んだが、答えはない。
そうか。――このところ、さとを遠ざけて離れに寝かせているから、呼んでも聞こえるわけがない。
屋敷の中は静かで、もうずいぶん遅い時刻のようだった。
仕方なく起き出した弘兵衛は、もうろうとした頭を振って廊下へ出た。

誰も起きていないのか……。

少し先の障子に明りが揺れている。——誰かいるのか？

弘兵衛はその障子をそっと開けてみた。

「これは……」

薄明りの中、若い娘が倒れている。

「——どうした。——おい」

と、傍へ寄って、急に目が覚める思い。

これは、あの波乃という娘だ。

そっと顔を近付けると、息づかいが感じられる。眠っているにしては妙だが、ともかく正体を失っているのは確かである。

弘兵衛は、立って行って廊下をちょっと覗くと、障子を閉めた。

久之進に会いに来たのだったか。

波乃は、少し唇を開けて、深い眠りに落ちている様子。そのあどけない顔立ちは、弘兵衛を身震いさせた。

久之進の嫁に、と、初めて挨拶に訪れた波乃を見たとき、正直、弘兵衛はしばらく、半ば恥ずかしげにうつむいた波乃の白い面差しから目を離せなかったものだ。

何と初々しく可愛い……。

傍のさとも、弘兵衛の目つきに気付いていたようで、後で皮肉を言われたのだが。
その波乃が、今目の前に意識もなく横たわっている。
弘兵衛の内にカッと燃え立つものがあった。——久之進のことなど頭になかった。
手を伸して、波乃の着物の裾を割って行くと、滑らかな白い脚がほの明りに光る。
目を覚ます気配はなかった。
弘兵衛は波乃の上に覆いかぶさって、白いうなじに口をつけた。
そのとき——フッと、誰もいないはずの部屋の中で息を吹く音がして、明りが消えた。
体を起した弘兵衛は、みぞおちを一撃されて、その場に気絶して倒れた。

「はて……」
明りが消えている。
さとは手に燭台を持って、そっと廊下を進んで行った。
障子越しに中の様子をうかがったが、何の気配もない。
静かに障子を開け、中を照らすと——。
「まあ！　これは……」
弘兵衛が畳の上に大の字になって倒れている。しかも帯を解き、前をはだけて。

「あなた！　どうなさいました！」
と、さとは駆け寄ると、弘兵衛を揺り起した。
弘兵衛は呻きながら、支えられてようやく体を起すと、
「何が……あったのだ？」
「存じません。あなたは……。ここに波乃さんがいたのでは？」
「ああ。しかし……誰かに殴られた……」
「どういうことです？　波乃さんのはずはありませんよ。あの娘は薬で眠っていたはず」
「うむ……。この当て身は……女などではない」
と、苦しげに呻いて、「薬……だと？」
さとは目をそらして、
「そんなことはどうでもよろしいでしょう。あの娘はどこへ？」
と見回して、息を呑んだ。
「母上」
廊下に、久之進が正座していたのだ。「どういうことです。波乃さんを薬で眠らせた、とは」
「お前は――お前は知らなくてよいことです！」

と、さとがうろたえて、「父上の――父上のためです」
「さと、それはどういうことだ」
「あなたは――波乃さんを欲しがっておられたではありませんか！　私が知らぬとでも――」
「母上！　仮にも波乃さんは私のいいなずけです」
久之進は唖然として、「それなのに、父上に……」
「久之進……」
さとは身をよじるようにして、「この人は――若い娘ばかりを追い回して、あなたを産んだ後、私に手を触れようとしなかったのです。一体何人の女中をはらませたか……」
「母上……。私も父上の放蕩は承知しております。ですが、それを止めるどころか、なぜ波乃さんまで……」
「あなたを――あなたを取られたくなかった！」
さとが絞り出すような声で言った。
「母上……」
「あなただけが……私のよりどころだった」
さとは畳に這うように伏せて、「誰にも――誰にもやりたくない！　やるものか…

…」

さとは泣き伏した。

「――どうかなさいましたか」

起き出した女中がやって来たが、

「用はない！　退がってやすめ！」

と、弘兵衛に怒鳴られて、

「はい」

と、あわてて廊下を立ち去る。

「父上……」

と、久之進が言った。

「知らなかった……。さとが、こんなことになるまで思い詰めているとは……」

弘兵衛は、あぐらをかいて、息をついた。急に老い込んだように見える。

「――母上は、小夜のことも殺させようとなさったのです。浪人を雇って」

「何だと？　で、小夜は？」

「無事です。私は小夜を嫁にします」

「――そうか」

「波乃さんは、他に好いた男がいるのです。小夜を好きになった今、私にも分りま

す」

久之進は静かに言った。「母上をいたわってあげて下さい、父上」

「うむ……」

弘兵衛は何度も肯くと、「しかし、波乃はどこへ行ったのだ。それに、わしに当て身を食らわしたのは？」

と、ふしぎそうに言った。

朝の光

空気がピンと張った、少し肌寒い朝だった。

門前には、また物好きな江戸っ子が何十人も集まっていた。

砂利を踏んで、武市が行列の先頭に立ってやって来ると、ほんの少し前に着いていた助三郎が振り向く。

二人が歩み寄って向き合うと、

「助三郎――」

「言いわけは聞きたくねえ！」

と、助三郎は燃えるような目で武市をにらみつけた。「よくも妹を傷ものにしてく

れたな」

武市は真直ぐに助三郎を見ると、

「波乃さんを責めないでくれ。俺は心底波乃さんに惚れてる。波乃さんだって――」

「そんな話は聞きたくねえ」

と、遮って、「決ったいいなずけのある身を……。俺の面子をつぶしやがった」

「それは謝る」

「江戸っ子はな、顔に泥を塗られてニヤニヤ笑っちゃいられねえんだ」

武市は深く息を吸って、

「どう決着をつける」

と言った。「俺を殴りたきゃ殴っていいぜ」

「逆らいもしねえ奴を殴るだと？　それこそ笑いものだ」

助三郎は城門の方へ目をやって、「いつも競ってる俺たちだ。――今度は俺たちの足で勝負をつけよう」

と言った。

「いいだろう。――俺たちだけの勝負だな」

「負けた方は、これからずっと先を譲るんだ」

「なるほど。もし俺が勝ったら？」

「妹はくれてやる」
二人は裾をはしょると、城門の方へ向って立った。
「そろそろ一番太鼓だ」
と、助三郎が言った。「その次の太鼓が合図だ」
「よし」
ドン、と朝の大気を震わせて太鼓が一つ鳴った。
二人が腰を落として身構える。
――見物人たちが静まり返った。
「いつもと様子が違うぜ」
「凄い気迫だな」
と、囁き合う声。
「――私のために」
と、波乃が震える声で言った。
「兄さん……」
小袖が次郎吉を見る。「こんなこと……」
「今さら止められねえよ」
次郎吉はそう言って、ちょっと振り返った。「来てなすったのか」

久之進が小さく頭を下げる。
「久之進様――」
「鳴るぞ」
と、次郎吉が言うと、次の瞬間二度目の太鼓が響き、助三郎と武市が一気に走り出した。
「ああ――」
波乃が顔を両手で覆った。
二人の男は風を切り、砂利をはね飛ばして駆けて行った。
ごくわずかだが、武市が前へ出た。
むろん、ほんの少しの間のことだが、その競走は長く感じられた。
必死で駆ける武市が、前のめりになって、足がついて行かない。フラついた体が砂利に足を取られて、アッという間もなく転倒した。砂利が飛び散った。
波乃が思わず一歩前に出る。
だが――助三郎は門の手前で足を止めた。
そして振り返ると、起き上ろうとする武市の方へ歩み寄った。
「何だ、その面は」
と、助三郎が笑って、「鼻の頭をすりむいてるぜ」

と、手を差し出した。
「助三郎……」
武市が助三郎の手をつかんで立ち上る。
「どっちも願ってるなあ同じこった。波乃の幸せだ。そうだろう」
「ああ、その通りだ」
と、武市は肯いた。「許してくれるのか」
「仕方ねえじゃねえか」
と、助三郎は苦笑して、「波乃の奴、俺が妹にゃ甘いって、ちゃんと承知してやがるんだぜ」
二人は息を弾ませながら、向き合っていた。
城の太鼓が鳴った。二人は行列の方を振り向いて、
「突っ走れ！」
と、同時に怒鳴った。
二つの行列が、
「行け！」
ウォーッと声を上げて駆け出す。
「行け行け！」

駕籠をかつぐ陸尺たちの中から、ひときわ甲高い声が上った。

久之進が目をみはって、

「あれは——小夜だ！」

いかつい男たちに混って、白い脚をむき出しに、駕籠をかついで駆けて行く小夜に呆気に取られながら、

「何て奴だ！　私の嫁になるというのに」

と、久之進が嘆いた。

「——驚いたね」

と、次郎吉が目を丸くして、「武市の所へ預けたが、こんなことになるとはな……」

「でも、いいじゃないの」

と、小袖が言った。「久之進さんのお母上に対抗するには、あれくらい威勢が良くないと」

「そうか。それもそうだ」

次郎吉は行列が門へとなだれ込んで行くのを見て、「どっちも負けるな！」

と、声をかけた。

「無茶言ってる」

小袖がふき出した。

鼠、つきまとわれる

仲裁

「おい、〈甘酒屋〉さん！」
朝っぱらから、ドンドンと戸を叩かれて、次郎吉は渋々、
「何だってんだ……」
と、布団から起き上って大欠伸をした。「おい、小袖、出てくれ」
と言ってから、気が付く。
そうか。——妹の小袖は、通っている小太刀の道場で用事があって、泊って来ると言ってた。
「〈甘酒屋〉さん！　頼むよ！」
その声は同じ長屋の九公だ。
「——今行くよ」
と、仕方なく起き出して、戸を開けに下りる。「おい、何だってんだ」
「すまねえ！」
九公は大工の下働きだ。この長屋に一人暮し。

「ここはともかく、〈甘酒屋〉さんを引張って来るしかない、って長屋の衆も言ってるんで」

「どういう話か、分るように言ってくれ」

「この先の神社の境内でな、斬り合いをしてんだ。止めようとして、けがしてもつまらねえってんで、誰も止めようとしない。あの分じゃ、どっちか死ぬね」

「やれやれ……。分った、行くよ」

「すまねえな！」

斬り合いだって？

そんなもの、いつまでもやってられるもんか。どうせ行くころにゃ終ってるさ。

次郎吉は、わざと少しのんびり仕度をした。

だが、次郎吉の予想は当らなかった。

神社へやって来ると、長屋の連中だけではない、話を聞きつけたらしい、よその野次馬も駆けつけて、何十人もが遠巻きに見物していたのだ。

「呆れたな」

と、次郎吉は言った。「こんだけ集まって、仲裁に入ろうってのはいねえのか」

「だってよ、仲裁ってのはどうするんだ？」

「知るか」

と、肩をすくめて、次郎吉は、「ごめんよ！」
人垣を分けて通り抜けると――。
「どこだ、斬り合いってのは？」
刀を持った武士の姿が見えない。
「今、一人は床下だよ」
と、傍の男が言った。
「床下？」
「もう一人は、あっちの杉の木の下で一服してら」
何だって？　次郎吉は、杉の木にもたれて座り込んでいる男を見た。
確かに刀を傍に置いている。しかし――侍らしいなりをしてはいるものの、どう見ても六十は過ぎていよう。髪もすっかり白くなって、喘ぐように息をしている。
「何だってんだ？　相手は何してる」
「それが……」
床下から、誰かが出て来た。
次郎吉は、急にはっきり目が覚めた。
こっちは、たぶん杉の木にもたれた男より年上と思える女である。
たすきを掛け、手には刀を握っているが、

「お待たせいたしました」
と、その女は言った。
「いや……。こっちも助かった」
と、男の方も立ち上ると、「すっかり息切れしておったのでな」
「では……いざ」
女が刀を構える。
一応剣術を学んだと思える構えだった。
「うむ……。もう決着をつけねば」
「ご同様。——ご覚悟を」
「何を。女といっても容赦せぬぞ」
「斬ってごらんなされ」
エイッ！　ヤッ！
年寄り二人、「斬り合って」いるつもりらしいが、刀を振り回しても、切っ先同士が一間も離れているのでは、相手に触れるわけもない。
見ていた次郎吉は苦笑して、
「こんなもの、仲裁に入ることもないぜ。その内、二人ともくたびれてやめるさ」
「そうかな……。だけど、万一どっちかが死ぬと、面倒だろ」

「まあな……」
すると、
「タアーッ！」
と、男の方が突き進んで、女は後ずさった。
女がその拍子に、石にでもつまずいたのか、ドサッと尻もちをついてしまった。
男は、ここぞとばかり女の方へ駆け寄ると、刀を大上段に振りかぶった。振り下ろせば、女は哀れ一刀の下に……と思いきや、
「ウッ！」
と、男の方は妙な声を上げて、固まったように動かなくなった。
そして目をむくと、顔を真赤にして、
「うむ……。こ……腰が……」
と、呻くように言うと、刀を振り上げたままの恰好で、その場に引っくり返ってしまったのだ。
「やれやれ……」
次郎吉はため息をつくと、「お二人さん、お待ちなさい」
と呼びかけて進み出た。
女の方がやっとこ立ち上ると、

「どうなされました？」
と、倒れて呻いている男へ訊く。
「腰が……矢でも当ったような痛みだ」
「大げさな！　それでも武士ですか！　お立ちなさい！」
「待ってくれ……。身動きができん……」
男の方は、青ざめた顔に脂汗を浮かばせている。どうやら相当痛いらしい。
「そんな見えすいた罠で、女の私を討ち取ろうというのですか？　恥をお知りなさい！」
と、女の方は手厳しい。
「いや……これは本当なのだ。お願いだ、勝負は日延べを……」
二人でやり合っているところへ、
「まあ、お二人とも、一旦刀をお引きなせえ」
と、次郎吉は割って入った。
「どなた様で？」
と、女は次郎吉をにらんで、「いらぬ止めだて。これは武家の名誉をかけた果し合いです。口出しは無用！」
「そうでもございましょうが、こちらの方はどうやら腰の骨がずれたご様子。こいつ

は痛いもんだそうですぜ」
「あなたは医者ですか？」
「そうじゃありませんがね。こいつは骨つぎの先生の所へ運ばねえと、とても自分じゃ歩けやしませんぜ」
女はしばらく男を見下ろしていたが、
「分りました」
と、刀を納め、たすきを外すと、「身動きできぬ者を斬った、とあっては武士の恥。ここは見逃すことにいたしましょう」
「ありがとうございます。――おい、誰か戸板を持って来い！　この方を乗せて、浩市先生の所へ運ぶんだ」
「あそこで大丈夫かい？　やぶだって評判だぜ」
と九公が言った。
「仕方ねえよ。あそこくらいしかねえだろ、この近くにゃ」
「ま、そうだな」
「遠くまでは運べねえだろう」
次郎吉は、倒れて苦痛に呻いている男の手から刀を取ると、鞘へ納めた。
世話好きなのが、戸板を見付けて持って来たが、倒れて動けない男を、戸板の上に

移すので大騒ぎ。

「痛い！　もっと――もっと、そっとやってくれ！　いたた……」

ちょっと動かしただけでも、絞り出すような叫び声を上げる。

「しょうがねえ。――おい、いくら喚いてもいいから、一、二の三でパッと戸板に乗せるんだ。手を貸せ」

都合五、六人がかりで、その武士の手足を持つと、

「一、二の――三！」

エイ、ヤッ、と持ち上げ、戸板の上に落とす。その武士の悲鳴は神社中に響き渡った。

「全く……。刀で斬られたって、これほどやかましくないだろうな」

と、次郎吉は苦笑して、「おい、九公、頼むぜ」

「へい、任してくれ」

武士が、まだ「痛い！」と喚きながら運ばれて行くのを見送って、次郎吉は、

「時に、一体何だって――」

と、女の方を振り向いたが、「どうかしなすったんで？」

女が下腹を押えて、その場にしゃがみ込んでいたのだ。

「面目……ありませぬ……」

「いや、どうなさいました？」
「手を……手をお貸し下さい……」
女の方も、額に汗を浮かべて苦しんでいるのだった。
どうなってるんだ？

因縁

「誠にお恥ずかしい次第で……」
と、髪のすっかり白くなったその老女はピタリと座ると、顔を伏せた。
「いや、まあ……。人間、誰でも年齢をとりゃ、同じようなもんで……。な、小袖」
「そうですよ」
小袖は茶を出しながら、「失礼ですが、今おいくつになられます？」
「六十七歳になります」
女は榊原兵部の妻、かつ女と名のった。
「骨つぎの先生の所へかつがれて行った方は……」
「山城直次と申しまして、私の夫と同様、かつては毛利藩の江戸屋敷に仕えておりました者」

「ほう。では同じ藩の……。それがどうして斬り合うはめになられたので？」
「それには……色々訳がございまして」
と、口ごもる。
「いいじゃないの、兄さん。人にはそれぞれ事情ってもんがあるわ」
と、小袖は言った。
次郎吉が、このかつ女をおぶって帰って来ると、じきに小袖も道場から戻って来た。果し合いのことを聞くと、
「大変だったわね……」
と言いながら、その実、自分がそこに居合せなかったのが悔しいのである。
「ですが、六十七で、あの剣の構えは立派なものです」
と、次郎吉は言った。
「父に厳しく仕込まれまして」
「剣術をですか？」
と、小袖が目を丸くして、「お武家様とはいえ、珍しいことですね」
「女も、いつどこで賊に出くわさぬとも限らない。剣の心得があれば、少々の盗っ人などは追い払える、と……」
「それにしても……」

次郎吉は、表の方を気にして、「おや、戻ったのかな？」
ザワザワと話し声がして、
「〈甘酒屋〉さん！　ごめんよ」
「九公、あの人は？」
「それが、あんまり効かないんだ」
戸板に乗せられて男――山城直次が運び込まれて来る。
かつ女が腰を浮かして、
「どんな具合ですの？」
「いくらか……動けるようにはなったが……。まだ一人では起きられぬ……」
と、山城直次は呻くように言った。「誠に……面目ない」
「どうしよう、〈甘酒屋〉さん」
と、九公が困り果てた様子で言った。
「構わぬ。その辺へ打ち捨てておいて下され」
と、山城は言った。
「まさか、そうも行かねえじゃねえか」
次郎吉はため息をついて、「しょうがねえ。大家さんに話して、この長屋の空家へ、一時置いてもらおう。――よろしいですね？」

かつ女は次郎吉の方へ向き直り、
「お心づかいはありがたいのでございますが……」
と、両手をついて、「私も直次殿も、家賃を払うだけの余裕が……」
「まあ、差し当り、手前が立て替えておきますよ。いつでも結構、金のできたときに返していただけりゃ」
「それではあまりに――」
「なあに、江戸っ子はこういう人助けが好きなんでさ。――おい、九公、大家さんのとこへ走って、話をつけて来な。俺が引き受け人だと言ってな」
「承知！　そう来なくっちゃ」
「馬鹿野郎、初めっからそのつもりだったくせしやがって」
へへ、と笑って、九公が駆け出して行く。
「――ともかく、山城さん――でしたっけ？　布団へ寝かそう。戸板の上にいつまでも放っとくわけにいかねえ」
「待って」
と、小袖が立ち上ると、「私も、剣を習っていますので、こういうときの心得を聞いたことがあります」
「お前が？」

「山城様をうつ伏せに。――いかがですか？」
「うむ……。体に鉛でも呑み込んでいるようだ」
「お辛いでしょうねえ。剣の修行をしておりますとね、若い人でも、時折こんなことになるんですの。そんなときには……」
いきなり、小袖はうつ伏せになった山城の腰の辺りにヒョイと両足で飛びのったのである。
次の瞬間、長屋中の人が仰天して飛び出して来るほどの凄絶な叫びを、山城は上げたのだった……。

「あの声で障子紙が破れるかと思いましたよ」
と、かつ女は言った。
「いや、何とも……」
山城は汗を拭って、「突然のことで、びっくりしてな」
「お前も何かひと言断ってからにすりゃ良かったんだ」
と、次郎吉が言った。
「いやいや、小袖殿のおかげで、こうして起きていられる。全く、何と礼を申し上げていいか……」

小袖の荒療治が効いて、山城は畳に座っていられるようになった。刀を杖にして、ゆっくりとなら歩ける。

「ともかく、出歩くのはまだ無理だ」

と、次郎吉は言った。「とりあえず、二、三日はここでお休みなせえ」

大家の許しを得て、空家になっていた所へ二人を連れて来た。そして、ご近所が、

「この布団、ボロだけど余ってますから」

「煮付をこしらえたんで……」

と、色々持ち寄ってくれる。

「かたじけない……」

山城は頭を垂れて、「縁もゆかりもない我々に……」

「そこが貧乏人のいいとこですよ」

と、次郎吉は笑った。「さ、俺は湯へ行って来るぜ。小袖、後は頼む」

「はいはい。——行水でもなさいますか？　ちっと寒いですけどね」

——次郎吉は手拭い一つ肩にかけて長屋を出た。

その次郎吉と、ふと目が合って、ハッとそらした者がある。

何気なく目が合うのと、気付かれまいとして目をそらすのと——。それはすぐに分るものだ。

「何だ……。気に入らねえな」
次郎吉は呟くと、少し行って角を曲ってから足を止め、そっと覗いてみた。
侍が一人、長屋の方を覗いている。
あの山城直次のような、くたびれた浪々の武士でなく、れっきとしたどこかの藩士だろう。
まだ三十そこそこといったところ。
その侍は、急ぎ足で反対の方向へと歩いて行く。
次郎吉は、少し迷ったが、
「お節介も俺の特技だからな」
と呟くと、足早にその侍の後を追って行った……。

ややあって、
「ごめん下さいませ」
と、次郎吉たちの家の前で声を出した者がある。
「はい、どなた？」
小袖がガラリと戸を開けると、立っていたのは立派な身なりの女中で、
「恐れ入ります。こちらは〈甘酒屋〉様のお宅でございましょうか」

「ええ……。甘酒は売ってませんけど」
と、小袖は言った。
「ご在宅でいらっしゃいますか」
「今、湯へ行っていて。じき、戻るでしょうけどね。ご用件は？」
「噂を耳にして、参りました。老いた男女の斬り合いを仲裁して、ここへお連れなされたと……」
「ああ、それなら――」
と、小袖が言いかけると、玄関先に、
「申し訳ありませんが、塩を少々お貸し願えませんか」
と、かつ女がやって来た。
「まあ！」
と、女中がびっくりして、「お義母様ではございませんか！」
かつ女が呆然として、
「そなたは……うめ殿か？」
「はい！　まあ……こんな所で！」
二人はしばし立ち尽くしていた。

困惑

「お帰りなさいませ」
うめは玄関へ出迎えて、「早いお帰りでしたのね」
「ああ」
夫、平太郎は大小を腰から引き抜くとうめへ渡して、「丈一郎は？」
「今日は笛の稽古に行っております」
「そうか。腕を上げたかな」
「あなた……。まだ通い始めて、やっと半年ですよ」
と、うめは苦笑して、「それも八歳の子供です」
「それがどうした。桐生殿の所では六歳から琴三絃を習わせているそうだぞ。丈一郎も、せいぜい努めなければ。——剣より音曲の世の中だ。殿のご趣味に合わなければ、出世は覚束ない」
平太郎は袴を取って息をつくと、「俺など、一日中、狭い部屋へ押し込められ、算盤とにらめっこだ。あんなお役目なら、ない方がましだ」
「でも、あなた……。それも立派なお役目ではございませんか」

「商人の真似をして、武士も情ないもんだ」
と、平太郎はせせら笑った。「――おい、酒をつけてくれ」
「こんな時刻からですか？」
「いいだろう、一本頼む。酒でもやらなければ、この気分は晴れん」
「あなた、実は――」
と、うめが言いかけると、
「話は後にしてくれ」
と、平太郎はゴロリと横になった。
「お義母様にお会いしました」
と、うめが言うと、しばらく反応は――。
「ふむ」
と、唸っただけだった。
うめは、また口を開きかけたが、思い直して、夫の脱いだ袴をたたみ始めた。
すると、平太郎が起き上って、
「誰に会ったと？」
「お義母様です」
と、うめがくり返す。

「母上に？――夢ででも会ったのか」
「いいえ、本当のお義母様です。幽霊ではございません。ちゃんとお話もいたしました」
「母上が――生きておられたと？」
「はい。私もびっくりいたしました」
「しかし……」
と言ったきり、平太郎は何をどう訊いたものか分らない様子で、黙ってしまった。
そして、しばらくしてポツリと、
「驚いたな」
と言った。「もう五年――いや六年だぞ。どこでどうしておられたのだ？」
「詳しいことは、おうかがいする暇がありませんでした。でも、ともかくお元気そうにお見受けいたしました」
「そうか」
平太郎は、しばし複雑な面持ちで、「ではやはり母上は、あいつと……」
「早合点されては……。お義母様は、山城直次様と果し合いをなされたとか」
「何だと？　それで――山城直次を討ち取ったのか？」
「いいえ。勝負がつかなかったと申します」

「どういうことだ？」
「山城様が腰を痛めて動けなくなり……」
「それは絶好の機会ではないか」
「ですが、お義母様もお腹を下しておられ、果し合いは中断いたしたそうです」
「何と……。では逃げられたのか」
「いえ、それが……」
と、うめは少しためらって、「どうやら、お互い体調がすぐれないというので、また の機会を、と約して別れたそうです」
「わけの分らん話だ」
と、平太郎は顔をしかめて、「しかし——お前はどうして母上の居場所を知っていたのだ？」
「訪ねて行ったわけではありません。所用で出かけまして、道でバッタリお会いしたのです」
「では、今、母上はいずこにおられるのだ」
「お訊ねしましたが、答えていただけませんでした」
と、うめは言った。「ただ——着ておいでの物などは、ずいぶん古びてしまって、苦労しておいでのようでした」

「母上が……。そうか」
「でも、私に『捜してはなりませぬ』と、くり返しおっしゃって……。私もそれ以上はお訊きできず、ただ持ち合せた金子を懐紙に包んでお義母様の袂へ」
「そうか。それは良かった。しかし、うめ、母上の跡を尾けて、今の居所を突き止めてくれれば良かったのに」
「申し訳ありません。考えが及びませんで。ただただ、びっくりしてしまいまして」
「それは分る。――山城の行方の方が捜し出せるかもしれんな。果し合いをしたというのだから、大方見物人もあったろう」
「ですが、あなた――」
「山城は、父を斬ったのだぞ。――そのときは致命傷にならずとも、半年の後にその傷がもとで死んだのだ。言うなれば父の敵」
「でも、それをお義母様が代りに――」
「母上がいくら剣を学ばれていても、女は女。まともに戦えば勝てる見込みはあるまい」
と、平太郎は言った。「うめ。俺は明日から母上の居場所を捜しに回る。城へは後で、風邪でもひいたと届ければよい」
「はい……」

うめは何か言いかけたが、玄関に、
「ただいま！」
と、息子丈一郎の声を聞いて、ホッとしたように立ち上った。

次郎吉は足を止めた。
同時に、ついて来る足音も止まる。——次郎吉は苦笑した。こんなに分りやすい尾行もない。
「ねえ、お侍さん」
と、次郎吉は振り返って、「俺に何かご用でしたら、そうおっしゃって下さいまし」
その侍は、いささか照れたように、
「気付かれていたか。たぶんそうだろうとは思っていましたが」
「何のご用で？」
「いや……。どう話したものか」
と、その侍は困ったように言って、「どこぞ、話のできる座敷はあるまいか。よければ鍋でもつつきながら話したい」
「そりゃあ、なじみの店ぐらい、二、三軒はありますがね。そちらでおごって下さるんで？」

「もちろん。こちらの用でお誘いするのですからな。なに、屋敷から払ってくれる」
「結構ですな。俺は遊び人なんでね。金を稼ぐのは大の苦手で」
次郎吉は、長屋を覗いていたこの侍のことをちゃんと知っていた。あのかつ女の夫、榊原兵部と、山城直次の仕えていた毛利藩江戸屋敷にいる、武内蔵人という男だ。
しかし、むろん、そんなことはおくびにも出さず、次郎吉のなじみの店の奥の座敷に上って、
「――まあ一杯」
と、酒を注いで、相手の名のるのを聞いた。
「旨い酒だ」
武内蔵人が感心して、「なかなか、宮仕えの身ではいい酒も飲めません」
「そんなもんですかい。――ああ、いや、俺は自分で」
次郎吉は一口飲んで、「それでどんなお話を？」
「次郎吉殿と申されるのですな。――先日、果し合いの仲裁に入られたと聞きました」
「江戸っ子は、ああいうことが好きでしてね」
「今、同じ長屋に当の二人がお世話になっているようですが」
「へえ。何しろ、果し合いの途中で、それどころじゃなくなりましてね」

次郎吉が事情を説明すると、武内は笑いをこらえ切れなくなったようで、
「そいつは……。さぞご迷惑でしたろう。ハハ……。呑気なことだ」
「俺はあんまり他人のことに口を出すのは好かねえんですがね。あのお二人も、以前は毛利藩の方とか」
「その通り。実は六年前、刃傷沙汰がござってな」
「あのお二人にですか」
「山城直次殿が、榊原兵部殿を斬ったのです。その後、榊原殿は亡くなりました」
「それで、奥方様が仇討に？」
「いや、それがどうにも妙なことで」
と、武内が言った。「奥方のかつ女様は、私も子供のころから親切にしていただき、よく存じているのですが……。山城殿が姿を消すと同時に、かつ女様もいなくなってしまったのです」
「同時に？」
「そうです。榊原殿は深手を負ってはいたものの、まだ生きておられたのに。――それで、藩内では、山城殿とかつ女様が手に手を取って逃げたのでは、と……」
「待って下せえよ。六年前といやあ、かつ女さんは六十を過ぎておいでしょう？」
「そうです」

「それで相手の山城さんが――そろそろ六十になるかどうかだ。そのお二人が手に手を取って？」

「むろん、私も『まさか！』とは思いましたが、何となく……。噂というのは怖いもので」

「それにしたって……」

と、次郎吉は苦笑した。「それより、なぜ山城さんは、かつ女さんのご亭主を斬ったんです？」

「いや、それも謎なのです」

と、武内は言った。「私にもとんと見当がつきません。しかし、それから六年。お二人の行方も知れず、その内、藩内でもお二人のことは忘れられていきました」

「妙な話ですね」

「全く。――それが、年寄り同士の果し合いと噂に聞いて、もしやと思い」

「どうもねえ……。俺も見物してましたがね、どっちも相手を斬ろうって気迫がなかった。ありゃあ、何かわけあってのことでしょうよ」

「そう思われましたか」

「たぶん、どちらの方も『相手を斬る』のでなく、『相手に斬られたい』と思って刀を振り回してらしたように思えました」

「――なるほど」
「それで、双方の家はどうなりましたんで？」
「はあ。今、かつ女様の倅平太郎とは私も親しくしているのですが、共にお城勤めです。妻君はうめ殿と申されて、可愛い、やさしい人です。一人息子の丈一郎の成長を楽しみにして……。もう八歳になられたかな」
「なるほど」
「しかし、今は武士の暮し向きも楽ではない。榊原の家もなかなか大変らしく、うめ殿はお屋敷に奉公されています」
次郎吉は肯いた。
しかし、分らないことは分らないままである。
「それで、少々困ったことが」
と、武内は言った。
「と言いますと？」
「あのお二人のことを……。実は迷ったのですが、殿のお耳に入れました。何といっても、以前は藩の者でしたのでな」
「すると？」
武内はどう言っていいか、困ったように酒を飲んだ。

道連れ

「湯に入ったのは久しぶり」
と、かつ女がさっぱりした様子で、「いいものですね」
「本当なら、どこぞの温泉にでも行かれて、のんびりされていいお年なのに」
と、小袖が言った。
「いいえ……」
かつ女は小さく首を振って、「私はもう棺桶に片足どころか、両足突っ込んでるようなものです。残る日数を勘定しても、そう手間はかかりません」
「そのお元気なら……。あ、山城様が」
山城が杖を突きながら出て来て、
「いや、待たせたかな」
「いいえ。大丈夫でしたか？」
「ああ、やはり湯に浸っていると、腰も楽になる。小袖殿のおかげだ」
「どういたしまして」
と、小袖は微笑んで、「では、のんびりゆっくりと帰りましょう」

むろん、山城の方はゆっくりと足を引きずるようにして歩くのだが、かつ女はそれに合せて、小刻みに歩いている。

ふしぎな男女だ、と小袖は思った。

はた目には、どう見ても「仲良く年老いた夫婦」だろう。

一体どうして敵討の間柄になってしまったのか、小袖にも見当がつかないし、かつ女も何も言わないのである。

そして、三人が長屋へ戻って来ると——。

「お侍が……」

と、小袖は言った。「お二人は姿を隠された方がいいのでは」

しかし、侍の供の一人が三人を目にとめていた。

「——やはり貴公たちか」

と、少々偉そうにしている侍がやって来ると、「久しぶりですな、山城殿、かつ女殿」

「そちらは……」

と、山城がけげんな顔をする。

「しっかりなさい」

と、かつ女が山城をつつく。「橋本様ですよ」

「橋本？――ああ、左内か！」
と、山城は目をみはって、「何年か見ぬ内に、ずいぶん太ったな」
「相変らず口の悪いお人だ」
と笑って、「そちらは小袖殿と申されたか。毛利藩家老の橋本左内という者」
「どうも」
と、小袖は会釈して、「お二人にお話でしたら、外しましょうか」
「いや、話はすぐ済みます」
と、橋本は言った。
そして懐から書状を取り出すと、二人の方へ示して、
「上意である！」
と言った。
「仇討？」
うめは平太郎の刀を受け取った手を止めて、訊き返した。「――今、仇討とおっしゃったのですか？」
「ああ」
平太郎は上機嫌で、「殿のお耳に入ったのだ。母上と山城が果し合いをしていたこ

とが」
「それで……」
「殿がな、『何年にもわたって、夫の敵を追い続け、女の身で仇討を果さんとする心は誠に立派で、藩の者たちも見習うべし』とおっしゃって」
「では――」
「屋敷の中庭にて、母上と山城の試合を行うことになった。むろん、これは仇討だからな。二人とも真剣だ。それに、俺が母上の助太刀をする」
「助太刀を？　では――山城様を斬るのですか」
「むろんだ、父の敵だからな。母上一人では、いくら相手がもうろくしていても、討つのは容易でないだろう。しかし、俺がついていれば……。これで殿のお目に留れば、俺が出世できることにもなる」
平太郎は目を輝かせていた。
「――あなた」
と、うめは言った。「そんなこと……。おやめ下さい」
「やめる？」
「今さら、具合の悪い山城様を討って何になりましょう。お義母様だって、そこまでして――」

「妙なことを言う奴だな。もう二人とも納得しているのだぞ」
「え？　それでは、お義母様と山城様もご承知で？」
「ああ。明日の朝、正々堂々と試合をして、仇討を果す」
平太郎は張り切って、「久々に刀を抜くのだ。手入れをしなくてはな」
と、腕を振り回したりしている。
「おい、刀をかせ」
うめは平太郎に刀を渡すと、やや青ざめた顔のまま、奥へと入って行った……。

「これは旨い」
と、山城は漬物を口に入れて唸った。「素人の手で漬けても、旨いものですな」
「あのおかみさんの自慢です」
と、小袖が微笑んで、「ご飯、お代りはいかが？」
「いやもう充分にいただきました」
「じゃ一杯」
次郎吉が酒をすすめる。
「では少しだけ……」
「本当に」

と、かつ女が言った。「長屋の方々にはお世話になって」

——次郎吉の所で、夕飯をとっている。

「しかし……」

と、次郎吉は言った。「殿様だって、もうとっくの昔に姿を消した家来に、『上意』もないと思いますがね」

「いや、それが武士というもの」

と、山城は言った。「私としては、懐しいお屋敷の庭で討たれれば本望と申すもの」

「勝負は分りませんよ」

と、かつ女が言った。

「しかし、そちらには平太郎殿が——」

「いいえ。手は出させませぬ」

と、かつ女は厳しい口調で、「あくまで試合は一対一」

「それにしても、この体ですからな」

と、山城は笑って言った。

少しの間、微妙な沈黙があって——。

「こんなことは、俺たちのような町人には係りないことでしょうがね」

と、次郎吉は言った。「こうしてわずかの間でも同じ長屋の住人になんな

二人のことだ。どうしても伺わねえじゃ気が済まねえ」
「兄さん……」
「なあ、山城さん、どうしてこのかつ女さんのご亭主をお斬りなすったので？」
次郎吉の問いに、山城はちょっと目を伏せただけだった。かつ女は穏やかに、
「むだですよ。私も、この人に何度それを訊いたか知れません。でも、答えてはもらえなかった……」
「言ったではありませんか。単なる、囲碁の勝負の上での口論がきっかけに――」
「いいえ」
と、かつ女は首を振って、「あなたのことはよく知っています。あなたはそんなことで人を斬る方ではない」
「しかし――」
「たとえ、夫、兵部がカッとなって刀を抜いたとしても、あなたは相手にしなかったはずです」
「かつ女殿……」
かつ女は次郎吉たちの方へ、
「私はこの山城直次様を、若いころよりよく存じ上げていました。この方も私を……」

「じゃ、もしやお二人は――」
と、小袖は身をのり出した。
「好き合っていたと申し上げてもいいでしょう。でも、私はこの人より二つ年上。早々と親の決めた榊原に嫁ぐしかありませんでした」
と、かつ女は言った。「ですから、この人のことはよく知っています。カッとなって人を斬るということのできる人ではないのです」
「なるほど」
「かつ女殿、あなたは私を買いかぶっておられる。私はつまらぬ男なのだ」
と、山城は言って、「次郎吉殿、もう一杯注いで下さらんか」
次郎吉は酒を注いで、
「頑固ですねえ、お二人とも」
と言って笑った。「お似合いのお二人だ。――そのお二人が、どうして斬り合うんです？　俺にゃ分らねえ」
「いや、それでいいのです」
と、山城は言った。「それですべてが終るのです」
山城に話す気がないのははっきりしていた。
結局、次郎吉もかつ女も、それ以上は訊かなかった……。

太鼓が、二度、三度、打ち鳴らされた。
白砂を踏んで、中庭に両側から二人が進み出た。かつ女と山城直次である。
二人は共に白装束だった。真新しい装束を与えられ、身仕度をして現われたのだ。
「早く始めろ」
まだやっと二十歳になったばかりの「殿様」は、むろん二人のことなど知らないのである。
ただ、真剣で人が斬り合うのを見たことがなかったので、面白がっていた。
そばの家来に、
「刀が飛んで来ることはないだろうな」
と、心配そうに訊いたりしている。
――かつ女も山城も、今誰が見ているのか、気にもしていない様子だった。
庭は幕で囲まれ、その内側に、主だった家来たちが並んでいた。
「榊原兵部が妻、かつ女。山城直次を、夫の敵として討つべく、試合に臨む」
と、橋本左内が述べて、「両人、正々堂々と立ち合うように」
そして数歩退がると、
「始め！」

と、声をかけた。
二人が刀を抜く。——しかし、山城は鞘の方も腰から引き抜くと、左手で杖の代りに持って、地に突いて体を支えていた。
見ていた侍たちの間に笑いが起った。
「老いぼれ同士か」
という声がした。
山城は鞘で体を支えたまま動かず、右手に持った刀を構えた。
かつ女がタタッと進み出て、山城の間近で刀を振り上げた。
エイッと振り下ろすと、山城がそれを右手の刀で受け止める。
二人の顔が近付くと、
「一歩退がって」
と、山城が小声でかつ女に言った。「次は胴を横へ払いなさい。私はよけない」
「そんなことはできません」
と、かつ女が言い返した。「どうして戦われませぬ」
「むだだ。そなたに斬られて死にたい」
「そんなことが——」
と、かつ女が言いかけたとき、

「榊原兵部が一子、平太郎、母の助太刀をいたします」
と、庭へ平太郎が進み出て来た。
「来てはなりません！」
と、かつ女が鋭く言った。
「母上。私は父の敵を討つのです」
平太郎が刀を抜いて、山城へと切っ先を向けた。
「さあ」
と、山城がかつ女にだけ聞こえる声で、「早く私を斬りなさい」
「ですが……」
「ひと太刀で。痛い思いは腰だけで充分だ」
かつ女は一歩退いて、構え直した。
「母上！　私が――」
と、平太郎が山城へ斬りかかろうとしたときだった。
「お待ち下さい！」
と、白砂を蹴って駆け込んで来たのは、うめだった。「その仇討、お待ち下さいませ！」
「うめ！」

平太郎が驚いて、「ここで何をしている！」

うめは白砂に身を半ば伏せると、

「山城様に咎はございません！」

と、涙声で言った。「山城様は私のために――」

「うめ殿！　いかん！」

と、山城が遮ったが、

「いいえ！」

うめは絞り出すような声で、「あなた、山城様を斬らないで下さい！　あのときのことは……私の咎でございます」

「何を言う」

「あなたは夜の見回りで帰られない夜でした。私は、丈一郎を寝かしつけようと、添い寝をしている内、自分もつい眠り込んでいたのです。ふっと目を覚ますと――私は、お義父様に組み敷かれていたのです」

「――何だと？」

平太郎が愕然とする。

「私は必死で逆らいました。でも、声を上げれば丈一郎が目を覚ますと思い……」

うめの声が震えた。「力尽きて、私は……。お義父様は思いを遂げられると、部屋

を出ようとして、囲碁の約束でおいでになった山城様がそこに立っておられるのに気付いたのです。お義父様はいきなり刀を取って、山城様へ斬りかかりました。山城様はそれをよけようとして――。丈一郎を踏みつけそうになり、よろけて倒れました。そのまま斬られるかと思ったとき、山城様は小刀をつかんでお義父様の刀を払おうとして――斬ってしまわれたのです」

「うめ殿……」

山城が呻くように、「言ってはならぬとあれほど――」

「いいえ！　何の咎もない山城様を討たせるわけには参りません。お義母様、申し訳ありません」

「そんなことだったの……」

かつ女は刀を下げた。「あなたも苦しんだのですね」

「しかし――父の敵には違いない！」

と、平太郎がうろたえて、「母上！　母上に代って私が――」

「あなた！」

うめが飛び立つように、山城と平太郎の中へ割って入った。

「そこをどけ！」

と、平太郎は顔を真赤にして、「うめ。お前も、身を汚されながら、どうして生き

ていたのだ！」
「あなた……」
「なぜそこで自害しなかったのだ！」
「死のうと思いました。何度も。でも、丈一郎のことを思うと……」
うめは、懐剣を抜くと、「ここで私が自害すれば、山城様を斬らずにいて下さいますか」
そこへ腹立たしげに、
「待て！　どういうざまだ！」
と、橋本左内が怒鳴った。「殿の御前で、見苦しいぞ！」
「どうなっておる？」
と、「殿様」が不機嫌な声を出した。「斬るのか斬らんのか」
そのとき——黒煙が中庭へ流れ込んで来たのである。
「何だ！」
「火事か？」
ただの煙ではない。真黒な塊のような煙が、もくもくと湧き上るように中庭を充たして行く。
「殿を守れ！」

「早く奥へ！」
という声も、たちまち黒煙に呑み込まれた。
そして……。
風がやっと黒煙を押し流した後には、呆然と一人、平太郎が立ちすくんでいた。
そして白砂に二本の刀が突き刺してあったのである。

「行先は舟頭が承知していますから」
と、次郎吉は言った。
小船に乗り込んだ山城とかつ女は、
「お世話になって……」
と、二人揃って次郎吉へ頭を下げた。
「お義母様」
うめが包みを手渡し、「途中で召し上って下さい」
「ありがとう」
かつ女は受け取ると、「どうせ、お互い先の長くない身。好きに生きてみましょう」
「それが一番だ」
次郎吉は肯いて、「おい、頼むぜ」

と、舟頭へ声をかけた。
夜半の川面へと、小船は静かに滑り出して行った。
小さな灯はやがて見えなくなり、
「うめさん」
と、小袖が言った。「命を粗末にしちゃいけませんよ」
「はい。——夫も、目が覚めましょう」
うめは夜道へ出ると、「丈一郎を残しては死ねません」
次郎吉と小袖は、うめと別れて長屋へ戻って行きながら、
「それにしても凄い煙だったな」
「オランダ渡りの煙幕？　高かったんでしょ？」
「まあな。——ま、かかった金はあの屋敷の蔵からちょうだいしよう」
次郎吉は伸びをして、「夜はいいな。余計なものが見えねえから。そう思わねえか？」

鼠、幻をみる

行列

今日も朝帰りだった。

今度は何と言いわけしよう？　まあ、どう言ったって、女房は信じやしないんだが。

それでも腹が立つのは、たまに本当の仕事で朝帰りになったとき、

「また女のとこへ泊ったんだね！」

と、泣かれることだ。

怒れる立場じゃないのは承知だが。

——朝もやが濃くて、何だか妙な雰囲気だった。

屋根職人の弥太吉は、それでも多少は後ろめたい思いがあって、小走りに道を急いでいる。

すると——道の向うから、妙な音が聞こえて来たのである。

鈴の鳴る、チリン、チリンという音。そして、何だか大勢で念仏でも唱えているかのような声……。

「何だ、一体？」

巡礼の一行だろうか？　早だちで、大山にでも向うのか。

もやの中に、黒い影が動いていた。

出会って、何か話しかけられるのも煩しく、弥太吉は道をそれ、立木のかげに身を寄せてやり過すことにした。

ザッザッと砂利を踏む足音が近付いて来た。——弥太吉はついそっと顔を出して覗いて見ずにはいられなかった。

やって来る。朝もやの中から、その行列は現われた。

——何だ？

弥太吉は目をみはった。

やって来たのは、子供たちだった。

子供たちばかり、二、三十人が、手に手に鈴を持って、振りながら、何か唱えて歩いているのである。

年のころ、大体七、八歳から十歳くらいだろうか。——大人が引き連れていない。

子供だけの巡礼？　そんなの、聞いたことねえぞ。

しかも、みんなのいでたちと来たら、巡礼どころじゃない。

みすぼらしい、ほとんどボロ布をまとったような身なりなのである。

裸足の子も半分近くいる。

その貧しげな子供たちの行列は、ゾロゾロと、弥太吉の目の前を通って行った。
すると、バタッと一人の子が転んだ。
もともと、少し行列から遅れていたので、他の子の誰も気付かなかったようだ。
子供は何とか起き上ったが、数歩行くと、またよろけて膝をついた。
弥太吉も見かねて、木のかげから走り出ると、その子供へ駆け寄った。
「おい、大丈夫か？」
と、腕をつかんで立たせると、「けがしてやしねえか？」
ひどくやせた青白い子だった。
「こいつは……」
と、思わず顔をしかめる。
その子は裸足で、何か尖ったものでも踏んだのか、右足から血が流れていた。
これじゃ痛くてたまるまい。
「傷の手当をしねえと。――誰か世話人はいねえのかい」
と、弥太吉が訊く。
その男の子は何も答えず、ただチリンと鈴を鳴らしただけだった。
「しかし、このままじゃ……」
と、周りを見回し、「ともかく、ついて行くのは無理だぜ。一旦引っ返すんだな」

と言った。

すると、うつむいていたその男の子が、顔を上げた。——弥太吉は一瞬、息を呑んだ。

目を開けてはいるが、そこには黒眼がなかった。白眼ばかりの両の目が、弥太吉の方をじっと見上げているのだった……。

「嘘じゃねえよ！　本当の話なんだぜ！」

と、弥太吉はくり返した。

「誰も嘘だなんて言ってやしねえぜ」

と、次郎吉は徳利を持って、「さ、もう少し行こう」

と注ぐ。

「すまねえな。——何しろうちの女房と来たら、俺の言うことなんか、はなっから信じやしねえ」

と、弥太吉はくさっている。

「だけど、朝帰りには違いねえんだろ」

と、次郎吉が笑って言った。

——通称〈甘酒屋〉だが、何も売って歩いてはいない次郎吉である。

「まあ……そりゃあそうだが」
と、弥太吉は渋い顔で言った。
「あんまりおかみさんを泣かせねえこった」
「べらぼうめ。俺がいつ女房を泣かしたと……。確かに泣いたか」
と、自分で苦笑する。「だけど、あの子供の白い眼が忘れられなくってよ。夢にまで出て来やがる」
「何だったんだろうな」
「うん……。まあ、俺はそのまま駆け出して帰っちまったが。あの後、あの行列がどこへ行ったのか……」
いささか舌はもつれていたが、一向に酔えてはいない弥太吉だった。

「――何の話かと思えば……」
と、小袖が言った。
「別に幽霊を見たわけじゃないぜ」
と、次郎吉は妹と並んで歩きながら、「大体、そんなわけの分らねえ嘘をついたって仕方あるめえ」
まだ日は高いが、弥太吉はすっかり酔って寝込んでしまったので、店に置いて来た。

「今ごろ、また夢でうなされてるかもしれないわね」

と、小袖が言って、「――何の騒ぎ？」

道行く人々が、あわてて左右へ割れる。

ドドドと音がして、馬が狂ったような勢いで駆けて来る。荷車を引いているのだが、大きな樽がくくりつけてあるものの、馬の勢いに振り回されて、今にも引っくり返りそうだ。

「危いわ」

小袖が素早く次郎吉の手をつかんで引張る。

「おい！　俺が転んじまうだろ！」

二人のすぐ傍を馬が駆け抜けた。しかし、そこへ運悪く荷車を引いた人足が角から出て来て、見ている者が「アッ」と声を上げたときには、人足は馬にはね飛ばされてしまっていた。

馬の引いていた荷車が人足の車にぶつかり、車輪が宙を飛ぶ勢い。

「おい！」

次郎吉が今度は小袖を押し倒すようにして伏せた。――車輪が二人の頭上を飛んで行き小間物屋の店先に飛び込んだ。

「キャーッ！」

ひと呼吸遅れた悲鳴は店番の娘で、けがはしていないが、仰天して腰を抜かしたのだった。

馬は駆け去って行き、樽が縄を切って転っていた。やがて樽の蓋がゴロンと外れたが――。

「わーっ！」

と、甲高い声が上った。「おい！――こいつあ死骸だぜ」

次郎吉は起き上ると、

「おい、大丈夫か？」

と、小袖に声をかける。

「ええ……。裾が泥で……。まあ、あの車がぶつからなくって良かったけど」

「樽の方で騒いでるぞ」

「聞こえたわ」

遠巻きにして、誰も近付こうとしない。

次郎吉は人垣を割って入ると、息を呑んだ。

「――兄さん」

「ありゃあ、子供だぜ」

男の子が一人、両足を抱え込んだ恰好で縛られて、樽から半ば転り出ている。

「〈甘酒屋〉さんじゃねえか」
と、顔見知りの一人が、「な、度胸あるだろ？　見て来てくれよ」
「そいつはいいが、もう生きちゃいめえ」
次郎吉は歩み寄ると、そっとかがみ込んで子供の体を仰向けにした。
「――縄でくくられて、可哀そうだ。誰か切る物を貸してくれ」
と、次郎吉が言った。
「でも兄さん……。自身番のお役人が来るまではそのままの方が」
と、小袖に言われて、
「――それもそうだ。もう息はねえから、今さら楽にしてやっても……」
小袖は両手を合せてから、
「兄さん、この子――」
「気付かねえふりをしろ」
と、次郎吉が小声で言った。
「ええ」
子供は白眼をむいて絶命していた。
「こいつは、もしかすると弥太吉の……」
「見てもらった方がいいわね」

小袖は死体をそっと横にして、「見て、兄さん」
「刀傷だな」
「侍の刀だわ。――目の見えない子供を後ろから斬るなんて……」
小袖の声が怒りに震えていた。

職人気質

「ちぇっ！　ふざけてやがる！」
弥太吉は、つい口に出して文句を言いながら、仕事場へ戻って来た。
足早にすれ違って行った若い男をチラッと振り返ると、
「――誰だ、あいつ？」
と、首をかしげた。
「棟梁、瓦の方が仕上ってます」
と、弟子の職人が声をかけて来る。
「そうか。――おい、竜」
「へえ」
「今出てった若いの、どこのどいつだ？」

「さあ……。見ませんでしたが」
「そうか。瓦のことで来たんじゃねえのか」
「知らねえ顔はありやせんでしたぜ」
「ふーん……」
弥太吉はちょっと口を尖らした。
さっきの男、なりは職人風だが、歩き方がどこか妙で気になった。
屋根職人は、高い梁の上を歩いたりするので、自然独特の歩き方になる。
「――用は済んだんで？」
竜に訊かれて、
「ああ。――何とかな」
弥太吉は不機嫌が顔に出ないようにするのに苦労した。
新築の家にかかって、忙しい身である。本当なら遊んでいる暇などないのだが、どこの子供か、
「これ、預かって来た」
と、小さく結んだ文を届けて来たのだ。
〈弥太さん
ぜひとも会いたいの。急なことですみませんけど、浄寛寺の裏へ来て下さいまし

このところ、弥太吉が足繁く通っている遊女からの文である。
確かに小田巻の手だと思えた。
後を竜に任せて、ちょっと留守にすることにして、文にあった場所へ向った。
そう遠くはないが、行ってみると人影はなく、待ってみたが小田巻は現われない。
昼日中とはいえ、遊女はそう好き勝手に出歩くことはできないので、うまく出られなかったのかと思い、それでも惚れた弱味。
しばらく待ってみたが、「遅れる」という使いもない。諦めて戻って来たところだ。
「――いい色に上ったな」
弥太吉は焼き上って来た瓦を叩いてみて、
「こいつは使えるだろう。載せてみるか」
梯子をスタスタと平地のように上り、屋根の骨組に立って見渡す。
「おい、弥太吉」
と、下から呼ぶ声。
「やあ、〈甘酒屋〉か。――昨日はすまなかったな」
と、弥太吉は言った。
「ちょっと、お前に見てほしいもんがあるんだ」

と、次郎吉が言った。
「ちょいと待っててくんな。ひと仕事片付ける」
「ああ。急がねえでくれ」
狭い梁の上を軽い足取りで歩いて行くと、
「おい、竜！」
と、声をかけた。
竜が瓦を投げ上げると、弥太吉はフワリと受け取って、それを手に屋根の端の方へと寄って行った。
足の指先が、異変に気付いた。
ギッと柱が鳴って、足先がわずかに傾いた。
おかしいぞ！
足を止めると同時に、渡した梁がメリメリと裂けた。瓦が落ちて砕ける。
「あ……」
俺が屋根から落ちるなんて！　そんな馬鹿なことがあってたまるもんか！
しかし、いくら身軽でも梁が折れたら立ってはいられない。
弥太吉は頭から落下した。——が、一瞬落ちるまでに間があった。
次郎吉はとっさに弥太吉が落ちる真下へ、カンナくずを山と盛った箱を蹴込んだ。

まさかこう上手く行くとは次郎吉も思っていなかった。
弥太吉は頭からカンナくずの中へズボッと突っ込んだのである。

「命の恩人だ」
と、弥太吉は次郎吉に向って手を合せた。
「よしねえ」
と、次郎吉は苦笑して、「だが、どういうわけだい？」
「――兄貴」
と、竜がやって来た。「間違いねえ。誰かが梁に鋸を入れてますぜ」
「畜生！　誰の仕業だ！」
と、顔を真赤にしたが、「そうか、あいつかもしれねえ」
「心当りがあるのか」
弥太吉が、ここへ戻るときすれ違った男のことを話すと、次郎吉は、
「なるほど、そいつは怪しいな」
と肯いて、「しかし、お前がここを離れることをどうして知ってた？」
「――そうか」
弥太吉はキョトンとしていたが、「いや……。まさか！」

「何だい」
「実は……お恥ずかしいんだが」
と、事情を説明すると、
「その文は偽物だったのかい？」
「たぶん……そうだろう。俺をおびき出しといて……」
「だが、その——小田巻とやらからの文じゃなかったのか？」
「見たところは、あいつの手だったんだが」
次郎吉は厳しい表情になって、
「万が一ってことがある。その小田巻が無事かどうか、すぐ確かめた方がいいと思うぜ」
「そうか！　分った」
「後は大丈夫ですよ」
と、竜が言った。
「すまねえな。頼んだぞ」
「俺も一緒に行こう」
次郎吉と弥太吉は、急いで小田巻のいる店〈ひな菊〉へと向った。
「——お前の見た子供のことだ」

と、途中、次郎吉が話すと、
「殺された？」
「あの子かどうか、見てほしいんだ」
「分った」
弥太吉は肯くと、「俺は……何か、とんでもねえものを見ちまったのかな」
と、ちょっと身震いした。

いきなり、五、六人の男たちに囲まれた。
「穏やかじゃねえな」
と、次郎吉は言った。
「何だってんだ！」
気の短い弥太吉が怒鳴った。「お前ら、見た顔だな」
「廓の飼ってる用心棒だ」
と、次郎吉は言った。
「おい、弥太吉！」
と、頬に傷のある一人が、腕組みをして言った。「小田巻をどこへ連れて行きやがった！」

「何だと？」
「こっちにゃ分ってるんだ。とぼけてねえでおとなしく小田巻を返してよこしな」
「待ってくれ」
と、次郎吉は言った。「何か勘違いしてるようだな。こっちも小田巻とやらに会いに来たんだ。いねえのか」
「いりゃあ、騒ぎやしねえ」
「それもそうか。——しかし、この弥太吉も小田巻の行方は知らねえぜ。俺が請け合う」
「てめえはどこのどいつだ！」
と、短刀をチラつかせて、「余計な口を出すと、一緒に切り刻んでやるぜ」
「まあ、頭を冷やしな。女を足抜きさせたのなら、こうしてノコノコやって来やしねえ。そうだろう？」
と、次郎吉は言って、「すまねえが、女将さんに取り次いでくれ」
男たちは、ちょっと顔を見合せたが、
「やかましいや！」
と、一人が斬りかかって来た。
次郎吉は、弥太吉が身構えるより早く、その一人を叩き伏せていた。

何がどうなったのか、さっぱり分らない内に一人が地面に大の字になってのびているのを見て、男たちはあわてて二、三歩退がった。

「穏やかに話そうぜ」

と、次郎吉が言った。「けが人が増えてもつまらねえだろ」

やや沈黙があった。そこへ、

「おどき」

と、小柄ながら辺りを払う貫禄を感じさせる女が現われた。

「女将か」

と、弥太吉は言った。「なじみの客に、これはねえだろう」

「これは失礼いたしました。——私の言いつけたことじゃないんですよ。お前ら、引っ込んどいで」

小柄な、髪の半ば白くなった女将のひと言で、男たちは、のびている仲間を抱きかかえて姿を消した。

〈ひな菊〉へ上ると、むせるような白粉の匂いに包まれる。

奥の座敷へ通された次郎吉は、

「小田巻という女はいないんですか」

と言った。「この弥太吉の奴が、呼び出されて行ったところが、姿を現わさないそ

うで」
「弥太吉さん、じゃ、小田巻から文でも？」
「ああ、ここにあらあ」
と、くしゃくしゃになった文を手渡す。
女将はそれを眺めて、
「確かに似ちゃいるけど、あの子の手じゃないね」
「そうか。俺はてっきり――」
「女将さん。小田巻が見えなくなったのは、いつぐらいだね」
と、次郎吉が訊いた。
「昼間は、みんな思い思いにしてますんでね。いつからいないか、よく分りません」
と、女将は言った。「いないと分って、大騒ぎになったところでしたんでね」
「そうか」
「あの子に何か」
「分らねえが――。どうもこの辺がざわついてね」
次郎吉は胸に手を当てた。
「――女将さん」
襖が開いて、まだ十二、三と見える娘が座っていた。

「お国かい。どうしたの？　お客様の前だよ」
下働きの女中だろう。雑巾を縫い合せたのかというなりをしている。
「小田巻姐さん、おられんのですか」
と、眉を寄せて不安げだ。
「ああ。お前、何か知ってるの？」
怯えたように目を伏せる娘を見て、
「心配するな。叱りゃしねえ」
と、次郎吉は言った。「知ってることがあったら教えてくんな」
すると——両の目から、見る見る内に、大粒の涙がこぼれ出て、お国はワッと泣き伏した。
「——何だね、この子は。泣いてちゃ分らないだろ」
女将が苛々と言うと、
「すみません……。黙っててね、って姐さんに言われて」
と、しゃくり上げる。
「分った」
と、次郎吉は肯いて、「誰かに頼まれて、小田巻に文を届けたね」
お国がコクンと肯く。

「で、小田巻からこづかいでももらって、口止めされたんだね？　しょうのない子だ」

「まあ、女将さん。それぐらいのことは誰だってやってますよ」

と、次郎吉は取りなすように言って、「その文を頼んだのは、知ってる人かい？」

「いいえ……。大工さんみたいな恰好の人でした。だからてっきり、弥太さんとこの若い人かと……」

「あいつだ」

と、弥太吉が膝を打つ。「あの普請の場へやって来た奴に違えねえ」

「な、お国」

と、次郎吉は言った。「その文を小田巻に渡したとき、何が書いてあるか、聞かなかったかい？」

お国は少しためらっていたが、

「あの……小田巻姐さんのとこへ文を持ってくとき、途中で落として、ちょっと濡らしちゃったんです」

と、お国は言った。「すぐ拾って、広げて水を拭いたんで……。文を読みました」

「お前、字が読めるのか」

「この子は、何でも字が書いてありゃ、そばの誰かれをつかまえて、『これ、何て書

いてあるんですか？』って訊くんですよ。女は字なんぞ読めなくたっていいんだ」
と、女将は言った。
「それで、何と書いてあったんだね？」
と、次郎吉は訊いた。
「はい……。〈二本松を忘れぬように〉とありました」
「〈二本松〉だって？」
と、弥太吉が眉を寄せて、「何のことだ？　俺は知らねえぞ」
「それだけかい？　名前も何もなかった？」
「はい、それだけでした」
と、お国は肯いた。
「分りゃしませんよ、こんな子の言うことなんて」
と、女将は顔をしかめて、「小田巻の行先を知らないんだったら、さっさとお行き。いくらも仕事があるだろ」
「はい……」
と、お国が立ちかけると、
「待ちな」
と、次郎吉は言った。「女将さん。すまねえが、この子をちょっと貸してくんな」

「お国をですか？」
「ほんの何時かだ。只とは言わねえ」
次郎吉は懐から財布を出して、「こいつを取っといてくれ」
小判一枚をポンと投げ出したので、女将はびっくりして、
「まあ！　いいんですか？　こんな子供ですよ」
「おいおい、勘違いしねえでくれ。そんなんじゃねえんだ。――弥太吉、お前、さっきの件を忘れねえでな」
「え？――ああ、そうだ」
二人は、お国を連れて表に出た。
「じゃ、自身番へ行きゃいいんだな」
「ああ。確かめてくれ。俺はこの子と行く所がある」
「分った。しかし、小田巻はどうしたんだろうな」
「今は心配してもしょうがねえ。また後でな」
「ああ、分った」
弥太吉は、小走りに別れて行った。
「さてと……」
次郎吉はお国を見て、「ちょっと一緒に来てくんな」

「はい……」
お国は少し怯えたような目で、次郎吉を見上げていた……。

神隠し

「さ、お食べなさい」
小袖が皿にのせて出したお団子を、お国は目を丸くして見ていたが、
「でも……こんなもの、私には……」
と、目を伏せる。
「いいのよ。兄さんに、と思って買って来たんだから」
「おい、何だよ、そりゃ」
と、次郎吉が苦笑する。「いいから食べな。放っとくと固くなっちまうぜ」
「いただきます……」
お国は震える手でお団子の串を持つと、かぶりついた。——夢中で食べ切って、ホッと息をつくと、
「こんなおいしいものが……あるんですね！」
と、涙ぐんでいる。

「どうやら〈ひな菊〉じゃ、ろくなもんを食わしてもらっちゃいないようだな」
「はい、お茶。胸につかえるわよ」
小袖が湯呑みを置くと、お国はポロポロ涙を落として、
「ありがとう……」
と、畳に手をついた。「こんなに親切にしていただいて……」
「こんなことぐらいで……。あなた、字を憶えてるそうね。偉いわ」
「おっかさんが、『江戸へ行ったら、読み書きくらいできないと』って。——でも、〈ひな菊〉に奉公するとき、女将さんは、『ちゃんと寺子屋へ通わせて読み書きできるようにしてあげる』っておっしゃったんですけど……」
「そりゃあ口先だけだな」
と、次郎吉は言った。「お前、いくつだい」
「十二です」
小袖が覗き込むようにして、
「まだ——お客を取らされちゃいないわよね？」
「ええ……。下働きだけってことだったんですけど……。女将さんは『十三になったら売りものになるから』って」
「そうか」

次郎吉は小さく首を振った。
確かに、きちんと化粧をして、それなりの恰好をさせりゃ、なかなかの美人だろう。しかし、自分から文字を憶えたりする前向きなところは、このまま〈ひな菊〉に置いておくのは惜しい。
「――ともかく、今は小田巻のことだ。お前、あの〈二本松〉って文のことで、何か言いたそうにしてたな。何か知ってるんじゃないのか？」
「それは……」
と、お国が目を伏せる。
「お前がしゃべったってことは、決して誰にも言わねえ。心配するな」
お国は固く拳を握りしめた。――迷っているのだ。
「でも、兄さん」
と、小袖が言った。「〈ひな菊〉ってとこへ帰りゃ、この子がしゃべったと思われるでしょ。その女将がもし何か絡んでるとしたら……」
「まあ、そうだな」
次郎吉も腕組みして考え込む。
そこへ――ガラッと戸が開いて、
「おい、〈甘酒屋〉」

入って来たのは、弥太吉だった。
「どうした？」
「見たよ」
と、弥太吉は硬い表情で、「間違えねえ。俺が見た子供だ」
「やっぱりそうか」
「しかし、ありゃ刀の傷だろう」
「それもお侍のね」
と、小袖は言った。
「可哀そうなことしやがる！」
と、弥太吉は上り込んで、ドッカとあぐらをかいた。
話を聞いていたお国が、
「子供って、何のことですか？」
と、身をのり出す。
「実はな。——弥太吉、この子にお前の見たことを話してやんな」
「ああ……」
弥太吉が、ふしぎな行列の話をすると、お国の顔から血の気がひいて行った。
「それじゃあ、その子が殺されてたんですか？」

「背中からひと太刀だ。あんな子供をな」
次郎吉の言葉に、お国は息を呑んで、
「そんな……。ひどいわ」
「ああ」
「次郎吉さん」
お国は真直ぐに次郎吉を見て、「私――〈二本松〉って、知ってます」

どこかふしぎな山間（やまあい）の道だった。
夜が明けて来て、朝もやが道を埋め始める。
近くを流れる川のせいか、朝もやはずいぶんと濃くなっている。川の音が聞こえていた。
〈二本松〉など、どこにでもありそうだが。
「――あの松の木です」
と、お国が指さした。
なるほど、白い朝もやの中、頭だけが並んで見えている。
「この辺なのか、お前の家は」
「ここから一日ほどの山奥です」

と、お国は言った。

木立の間に、次郎吉と小袖、そしてお国と弥太吉も身を潜めている。ひんやりと湿った空気が体を包んだ。

「この辺は山が多くて、米が不作になることがよくあって……」

と、お国は言った。「つい一年前にも、飢饉になりかけました。村で助け合って、何とかしのいだんですけど」

「年貢は待っちゃくれねえからな」

「ええ。でもお上に文句なんか言えませんもの。――そのときに、江戸の口入れ屋だという男の人が村へやって来たんです」

「見たことのない奴か」

「ええ。三人くらいで。でも一人はお侍みたいでした。口のきき方とか……」

「それで？」

「口減らしをしないかと言われて。もちろん畑仕事のできる子は、出すわけにいかないんですけど、うちには一人、目の見えない弟がいて……。そのとき七つでした」

「病かね」

「というか……。おっかさんのお腹にいるとき、ひどく貧しくて、ろくに食べられなかったからじゃないかと……」

「なるほど」
「その男の人は、『その子を引き取ってやる』と言ったんです。畑仕事もできないし、ただ飯を食ってるだけだろう、と言って。――でも、おっかさんは、その弟が不憫だと言って、とっても可愛がってるので、断りました」
「そうか」
「でも、村には同じように目の見えない子が何人かいて、他の家じゃ、口減らしになるならと言って、承知した所もあったんです」
「そういう子を連れて行って、どうするつもりだと？」
「それは心配するな、とだけ言ってました。――子供を出す家にはいくらかのお金も出たようです」
「妙な話ね」
と、小袖が言った。「そういう子たちを集めてどうしようっていうのかしら」
「みんな、何かよくないことがあるんじゃないかって、思ってはいても、口に出しませんでした。――たぶん村から三、四人の子が連れて行かれました」
「そうか」
「そのときに、この二本松の所へ、子供を連れて来いってことだったんです。そして松の木の下に子供を置いて帰れって……」

「二本松か……」
「お役人には、誰も本当のことは言いませんでした。子供を売ったなんて、言えないですものね。それで『神隠しにあった』と言ったんです」
「なるほど」
「そのときに、お役人が首をかしげて言ってました。『ここんとこ、よく神隠しって話を聞くな』って」
「おそらくお前の村だけじゃないんだろう」
と、次郎吉は言った。「そういう子たちを集めてる奴がいるんだ」
「兄さん……」
と、小袖が言った。「聞こえる？」
確かに、それは鈴の音だった。——リン、リン、といくつもが近付いて来る。
「あれだ」
と、弥太吉が言った。「俺が聞いたのも、あの音だ」
朝もやの中を、鈴の音が近付いて来た。
そこへ、別の方向から馬の足音がやって来た。
「——お侍だわ」
小袖が小声で言った。

旅仕度の侍が三人、馬で二本松の下へやって来た。朝もやが晴れかかって、松の木の下に、町人が二人、五、六歳から十歳足らずの子、三人を連れて立っていた。

「――首尾は」

と、侍の一人が訊く。

「今、こちらへ六人が参ります」

「都合九人か。よし」

侍が包みを町人へ渡した。

「あの男です」

と、お国が言った。「口入れ屋と言っていた人。――私、気になって、ここへ忍んで来て見ていたんです」

「金を渡してるな」

と、次郎吉は言った。

「――また頼むぞ」

と、侍が口入れ屋の男へ言った。

「へえ。この辺りは今年も不作で、子を手放したい家がいくらもありましょうから」

「うむ。集まったら知らせろ」

「へえ。――おい、おめえたち、このお方におとなしくついて行くんだぞ。そしたら、

腹一杯飯を食わしてもらえる」

と、口入れ屋が言った。

鈴を鳴らしてやって来たのは、やはり同じようなみすぼらしい身なりの子供たちで、大人が一人、先頭に立っている。

「よし、後は任せろ」

と、侍が言った。「川に舟がつないである。そこまでは我々が連れて行く」

「あの野郎……」

と、弥太吉が言った。「侍の中の若い奴、あいつだ。歩き方に覚えがある」

「ああ……。小田巻姐さんに文をと言ったの、あの人です」

と、お国も肯く。

口入れ屋たちが、

「では、我々はここで……」

と、立ち去ろうとしたときだった。

いきなりどこからか駆け出してきた女がいた。

「小田巻だ」

と、弥太吉が目をみはる。

「待て！」

と、小田巻は短刀を振りかざして、口入れ屋の男へ斬りつけた。
「何しやがる！　てめえ――」
「私の子をどこへやった！　人を騙しやがって！　あの子を返せ！」
と、髪振り乱し、短刀を振り回す。
「斬れ」
と、侍の一人が命じると、あの若い侍が刀へ手をかけた。
次郎吉の投げた短刀が、侍の胸に突き立った。侍が崩れるように倒れる。
「誰だ！」
「小田巻！」
弥太吉が駆け寄る。
「あんた……」
侍たちが刀を抜く。
「目の見えねえ子供を斬ったのは、おめえさんたちか」
と、次郎吉は立ちはだかると、「どうせろくなことじゃねえんだろう。どうしてこんな真似をしてやがるんだ？」
「やかましい！　斬れ！」
口入れ屋たちも短刀を抜く。

小袖の小太刀が朝の光にきらりと光った。
「見るな」
と、次郎吉が言った。
弥太吉は小田巻を腕の中へ抱え込んだ。
数秒でことは終った。
「――もういいぜ」
次郎吉は短刀の血を拭った。
「兄さん、斬ったの？」
「お前は？」
「一人、峰打ちにしておいたわ」
「よし。脅しつけてやりゃ吐くだろう」
小田巻がワッと泣き伏す。
「おい、しっかりしねえか」
「あの子が……。奴ら、あの子を人質にして……」
と、しゃくり上げる。
「お前、こいつらを知ってたのか」
「私の客になったとき、聞いちまったんだよ。そしたら、人に預けてあった私の赤ん

坊をさらって、しゃべれば命がないって……」
「そうか」
弥太吉が顔を真赤にして、「その息のある野郎をとっちめてやる！　なに、きっとおめえの子は助け出してやるぜ」
「江戸っ子だな」
と、次郎吉が言った。「だが、これまで連れて行かれた子たちは……」
鈴を手にした子供たちは、途方にくれた様子で立っている。
「この子たちを、親の所へ帰さないとね」
と、小袖が言った。
「舟があると言ったな。そこにも誰かいるだろう。この侍たちのことは、そいつに訊こう」
「どこの藩だか……」
と、小田巻が言った。「殿様が、病名も知れない病だとかで、占い師が、七、八歳の目の見えない子供の生き肝が妙薬になると言ったんですって。それで家来の衆が、この辺りで子供を集め……」
「生き肝だって？　じゃ、みんな殺されてるってことか！」
弥太吉は身震いした。「ひでえことしやがる！」

「大方、そんなことだろうと思った」
と、次郎吉は言った。「弥太、お前はその子たちを見ちまった。足をけがした子は邪魔になって斬ったんだ。――いずれ殺されていただろうが」
「お願いです。あの子を……」
「訊き出してやる。――ともかくここは任せな」
と、次郎吉は言った。

「聞いたぜ」
次郎吉は帰って来ると、「東北のさる藩で、殿様が腹を切ったとよ」
「じゃ、ご公儀のお咎めが？」
「取り潰しにならねえためだろう。――世間じゃ大騒ぎだ。仕方ねえさ」
「でも、良かったわね。小田巻さん」
赤ん坊は口入れ屋の所で無事に見付かった。
「――小袖さん」
戸が開いて、「お魚、買って来ました！」
「何だ、お国じゃないか」
と、次郎吉は目を見開いて、「何してんだ？」

「あら、兄さんがお国ちゃんを身請けしたんじゃないの」
と、小袖が言った。
「何だと？」
「弥太吉さんに頼んで話をつけてもらったわ。安いもんだったわよ」
「お前……。勝手なことしやがって！」
「よろしくお願いします！　何でもしますから！」
お国のキラキラ輝く目を見て、次郎吉も苦笑いするしかなかった。
「しょうがねえな！　じゃ、一つ腰でももんでくれ」
と、ゴロリと横になる次郎吉だった……。

鼠、妖刀の影を断つ

駕籠

「止めてくれ！」
呻くような声が聞こえて、駕籠をかついでいた源太と小助の二人は足を止めた。
「おい……」
「ああ、今、『止めてくれ』って……。旦那、まだ本所じゃありませんぜ」
と、源太が、駕籠に乗った客へ声をかけた。
「――旦那？」
駕籠を地面へ下ろすと、中からゆっくりと客の男が倒れ出て来たのである。
「ワッ！」
二人はびっくりして飛び上った。
初老の侍だったが、具合が悪いのか、苦しげに、
「頼む……医者へ……」
と、絞り出すような声で言った。
「医者ったって……。どこにいるんだ？」

「知るかい」
「じゃ、そこだ！　この先の番所へ届けよう」
「それがいいや。医者がどこにいるかも知ってるだろ。――お侍さん、ちっと辛抱して下せえよ」
二人して何とか駕籠の中へ侍を戻すと、
「じゃ、行こう。――あんまり揺らさねえようにしようぜ」
「そうだな」
――江戸の夜は、ひっそりと静かである。
本当なら、吉原あたりのにぎやかな場所で商売したいところだが、駕籠かき仲間の縄張りや取り決めがあって、今夜は寂しいこの辺りでの仕事だ。
しかも病人を乗せたとは……。
源太も小助も内心舌打ちしていたことは間違いなかった。
「――ごめんよ！」
番所の戸をガラッと開けて、「すまねえが、客が途中で具合悪いって言い出してよ。医者はここらにいねえかい」
「俺は留守番だからな……」
と、眠そうな顔で出て来たのは、ちょっとやくざ風の男で、「――何だ、源太じゃ

ねえか」
「お前、浩次か」
「知り合いか」
と、小助が言って、「――そうか、博打仲間だな？」
「そんなことより、病人だ」
と、源太は言った。「ちょっとここへ寝かせてもいいかい」
「俺は構わねえが……。医者はこの先の長屋に一人いるぜ。腕のほどは知らねえが」
と、浩次は懐手をして、「ともかく、中へ運べよ」
「ああ。じゃ、座敷へ。――おい、小助」
「分った」
しかし、二人は青くなるはめになった。
侍はもう息をしていなかったのである。白眼をむいて、口を半ば開けたまま、絶命している。
「ちぇっ、ついてねえ」
と、源太は舌打ちした。「おい、浩次、友だちのよしみだ。何とかうまく始末してくれねえか」
「どうしろってんだ？」

「だってよ、こんなことにかかずらってちゃ、商売上ったりだ。どこの誰かも分らねえ侍だしよ」

浩次はちょっと顎を撫でていたが、

「よし、分った」

と肯くと、「じゃ、その辺の暗がりに寝かしときな。俺は何も知らなかったってことにする」

「すまねえ！　恩に着るぜ」

と、源太は拝んで見せた。

「いいから、早く運んでけ。誰か戻って来るとまずい」

「ああ。——小助、足の方を持て」

「分った」

二人して、駕籠から侍をかつぎ出す。

「腰のものも持ってけよ」

と、浩次は言って、駕籠の中に立てかけてあった刀を取り出したが……。

「何だ」

座布団の下に隠れるようにして、立派な金糸の模様の袋に入った刀があったのである。

長さは短めだが、その袋を見ても、結構な値打物と分る。
浩次は、源太たちが表に出て行ったのを見ると、その刀を素早く奥の座敷に敷いた布団の下へ押し込んだ。
そして、侍の刀を手に外へ出ると、
「――おい、これを腰へ差しとけよ」
と、源太へ渡す。
「おっと、そうだな」
侍は、番所の脇の狭い隙間へ寝かされていた。
「おい、忘れるところだ」
と、小助が言った。「こいつの草履だ」
「おっと、そうだった」
二人は、あのもう一振りの刀のことには気付いていないようだ。
浩次は内心ニヤリとした。
あれが名のある業物なら、いい金になるかもしれない。
「――やれやれ」
源太は汗を拭いて、「じゃ、すまねえが、頼むぜ」
「ああ。朝になりゃ、誰かが見付けるだろう」

「じゃ、さっさと行こう」
「でもよ、源太。ここまでの駕籠賃ももらわねえのかい？」
「ケチなこと言うな。仏の懐から金をくすねちゃ、罰が当るぜ」
「まあ、そうか……」
「さ、行こうぜ」
源太と小助は、空になった駕籠をかついで、早々に行ってしまった。
浩次は戸を閉めると、座敷へ入って、布団の下からさっきの刀を取り出した。
袋の口を開けて取り出すと、白木の柄に鞘の、小刀を少し長くしたくらい。そっと力を入れて引くと、スッと抜けて来た。
「こいつは……」
むろん、浩次に刀を見る目などない。しかし、澄んだ輝きを放つ刀身を見ただけで、ただものでないという気がする。
「拾いものだ……」
と呟くと、急いで刀を袋へ戻し、そばに丸めてあった半纏をつかむと、刀をそれでくるんだ。
見られちゃ面倒だ。
留守番くらい、途中で失敬してもいいだろう。——浩次は急ぎ足で番所を出ると、

夜道に消えて行った。

狂刃

次郎吉は、ちょっとため息をついて振り返ると、
「おい、もういいから帰んな」
と言った。
「でも、小袖さんに言いつかってます」
と答えたのは、まだ十二歳のお国。「ちゃんと旦那さんのお供をするのよ、って」
「全く……」
次郎吉は苦笑いして、「そいつは小袖の冗談だ。俺は一人で行かなきゃならねえ所があるんだよ」
お国はちょっと心配そうに、
「旦那さん、吉原に行くんですか？」
と訊いた。
「そうじゃねえよ。――それに、その『旦那さん』ってのはやめてくれねえか」
「でも、私、旦那さんに身請けされたんですから」

「だけどな……」
次郎吉たちは、縁日のにぎわいの中に来ていた。
「な、お国」
「はい」
「こういう場所にもあんまり来たこたあねえんだろ？　一人で見物して行きな」
方々から威勢のいいかけ声が飛ぶ。
「面白そうですね」
お国も十二歳の少女である。珍しい光景に目が輝く。
「そうだろ？　ほら、こづかいをやるから、好きなもんを買って、一人で帰ってな」
「でも……」
「いいんだ。お前はまだ子供なんだぞ。大人みたいに、男にくっついて歩くのは早すぎる」
お国は少し迷っていたが、
「いただきます」
と、ペコンと頭を下げ、こづかい銭を両手で受け取った。「でも――寺子屋の分まで出していただいて……」
「いいってことよ。お前はよく働いてくれるからな。小袖の方がよっぽど助かってん

だぜ」

十三になったら客を取らせるという廓の女将から、小袖が勝手に身請けして来たお国である。

「じゃ、帰りにお豆腐を買って行きます」

と言うと、お国は小走りに人ごみの中へ消えた。

「やれやれ……」

次郎吉は、つい微笑んでいた。

妹、小袖との二人暮しにお国が加わって、困ることもある。何しろ次郎吉の商売は盗っ人だ。夜中に出歩くのに、お国は邪魔である。

今はまだ夜ぐっすり寝入っていて、次郎吉が出入りしても目を覚ますことはないが、その内、「おかしい」と思うかもしれない。

どこか、しっかりした奉公先を見付けてやろうとは思っている。

次郎吉は歩き出したが――。

数歩と行かない内に、背後にただならぬ悲鳴を聞いて振り返った。

人があわてて逃げ惑っている。

「どうした？」

次郎吉は急いで駆け出した。

「助けて！」
女が一人、髪振り乱して駆けて来る。着物も前をはだけ、裾を引きずって、ただごとではない。
「人殺し！」
と叫ぶと、女はバタッと次郎吉の目の前で倒れた。
次郎吉は息を呑んだ。女の背中が斜めにざっくりと斬られて、血で染っている。
男が血刀を下げて、目を血走らせ、立っていた。
正気の目ではない。
「ざまあ見やがれ」
と、男は唇を歪めて笑った。「俺を馬鹿にしやがって！」
見覚えのある顔だった。
「お前、浩次だな」
と、次郎吉は言った。
賭場で時々見かける顔だった。しかし、今は次郎吉のことなど見ていない。
そのとき、次郎吉は遠巻きにしている野次馬たちの前に倒れているお国に気付いた。
「お国！」
次郎吉は駆け付けた。お国が太腿を押えて唇をかんでいる。指の間から血が流れて

いた。「斬られたのか！」
「すみません……」
「血を止めねえと。――痛いだろうが、我慢しろ」
と、次郎吉がしゃがみ込むと、お国が目を上げて、
「危い！」
と叫んだ。
とっさのことだ。振り返る間もなく、次郎吉は体を起しながらひねって、すぐ後ろに立っていた浩次に下から体当りした。
直感が的中して、刀を振り上げていた浩次は仰向けに引っくり返り、手から刀が飛んで行った。
「この野郎！」
次郎吉は駆け寄ると、肘で浩次の腹を一撃した。浩次がぐっと白眼をむいて気絶する。
「死んじまったか？――ま、構やしねえ」
次郎吉は息をついて立ち上ると、近くの男へ、
「おい、役人を呼んで来てくれ。こっちはけが人の手当をしなきゃならねえ」
「あいよ」

斬られた女はもう助かるまい。次郎吉は、
「おい、お国――」
と振り返って、言葉を切った。
お国のそばに膝をついて、布で右腿のつけねをギュッと縛っているのは、淡い色の小紋の着物を着た町娘だった。
「我慢できる？　偉いわ」
「こりゃどうも」
と、次郎吉が声をかけると、娘が顔を向けた。
きりりとした眉に、強い力のある目。二十歳になるかどうかの色白な娘だった。何より、その目がじっと自分を見つめているのに次郎吉は少々うろたえて、
「ご親切に」
としか言えなかった。
「これでは血は止りません」
と、娘は立ち上ると、「この子のお兄さんですか？」
と、きびきびした声で言った。
「いや……。ま、そんなもんです」
「家は近くです。おぶって来ていただけますか？」

「ええ、そりゃあ……。しかし――」
「家は医者です」
「分りました」
次郎吉はお国を抱き起した。
「私……歩けます」
「馬鹿言っちゃいけねえ。けが人は素直に言うことを聞くもんだ。ほら、背中につかまれ」
「すみません……」
お国をおぶって、次郎吉は、その町娘の後からついて行った。
一瞬、浩次が手にしていた刀のことを思い出したが、
「ま、大方誰かが役人に渡すだろ」
と呟いて、足取りを速めたのである。

粋人の別宅かと思える、小ぶりだがこった作りの家で、
「どうぞ」
と、娘が玄関を開ける。
「血が落ちますぜ」

おぶった次郎吉の腕に、お国の生温い血が流れて来ていた。
「構いません」
娘は次郎吉にそう言って素早く上ると、「――こちらへ」
いくぶん洋風の戸をガラガラと開けると、
「その上に寝かせて下さい」
そこは診療所だった。次郎吉はそう世話になったことはないが、板ばりの床、白い布の衝立の向うに、滑らかな革を貼った寝台がある。
お国をそこへ寝かせて、
「痛むか」
「すみません……」
お国は汗をかいていた。痛みを必死でこらえているのだろう。
「いちいち謝るな。――どうやら、ちゃんとした医者らしい。心配しないで、じっとしてろ」
「でも……血で汚れて……」
「心配するなって言ったろ。――災難だったな」
「あの人はどうして……」
「さあな。男と女は色んなことがあるんだ」

と、次郎吉は言って、お国の手を握ってやった。「お前ももうちっと大きくなりゃ分るさ」

「でも……私、斬られたくない」

「全くだな」

次郎吉は微笑んだ。

「お待たせしました」

と、声がして、振り向くと、あの娘が白い上っぱりを着て入って来た。

次郎吉は面食らって、

「あんたが医者か」

「長崎でオランダ医学を学んで来ました」

と、娘は言った。「すみませんが、今日は助手がいません。台所で湯を沸かしていますので、沸騰したら金だらいに入れてここへ持って来て下さい」

腕をまくって、「太い血管が切られています。早く血を止めないと死んでしまいます」

「分りました。――何でも手伝います」

「台所で、ていねいに手を洗って下さい」

娘の指示には迷いがなかった。

その動作の手早さに、次郎吉は並でない人間の「力」を感じた。
急いで台所へ行くと、何度も手を洗い、湯が大鍋にぐつぐつと沸くのを、金だらいへあけた。
診療所へ運んで行くと、
「――どんな具合で？」
「今、薬で眠っています」
と、娘は言った。「刀の傷ですね。刀が地面に触れたんでしょう。傷口に砂や泥がついているので、洗い落とさなくては。――ここを押えていて下さい。一旦血の流れを止めないと」
「分りました」
次郎吉は肯いた。

「ごめん下さい」
と、玄関の方で声がした。
「何だ……。小袖か」
次郎吉は出て行くと、「よくここが分ったな」
「長屋に知らせに来てくれた人がいて……。その血……。お国ちゃんの？」

小袖は青ざめた。
「ああ。大分出血した。――だが、今は落ちついて眠ってるよ」
自分のなりを見下ろして、次郎吉は、「なるほど、ひでえもんだな」
「ここは若いお医者さんがいらして、近所の評判だって……」
「上れよ。よく礼を言ってくれ」
次郎吉は血と汗とで着物もぐっしょり濡れていた。
「上っても？」
「ああ」
小袖は上って、廊下へ出て来た娘と顔を合せた。
「こちらがここの先生だ。お国の命の恩人だぜ」
小袖はちょっと目を見開いて、
「まあ……。ありがとうございました」
「いいえ」
娘は、やはり血で両手も上っぱりも赤く染め、髪は汗で崩れて額にはりついていた。
「俺の妹の小袖です」
と、次郎吉が言った。
「そうですか。――私は仙田良安の娘、千草と申します」

と、ていねいに頭を下げた。
次郎吉は初めてその女医の名前を知ったのだった……。

行方

「刀が消えた？」
と、次郎吉は思わず訊き返した。
「そうなんだ」
十手で肩を叩きながら肯いたのは、目明しの定吉。「〈甘酒屋〉さんが何か見てたかと思ってね」
〈甘酒屋〉は次郎吉の通称である。
「いや、俺はけが人を運んでったんでね」
「うん、それはあそこに居合せた連中から聞いたよ」
——縁日での人斬り騒ぎから一日たっていた。
慣れない「医者」の手伝いに、次郎吉もさすがにくたびれ果て、長屋へ帰ると、そのまま翌朝まで死んだように眠ってしまった。
お国は当分あの千草という娘の許に置いて手当しなくてはならない。小袖が毎日通

うことにした。

やっと昼過ぎになって起き出した次郎吉は、湯へ行って体をじっくり洗うと、飯をガツガツと食べた。そこへ自身番から次郎吉を捜しに来たのだ。

「刀が浩次の手から飛んでったのは憶えてますがね」

と、次郎吉は言った。「あれだけ人がいたんだ。誰か見てたでしょう」

「そこがふしぎだ。誰に訊いても首をかしげるのさ」

「妙な話ですね。まさか刀が一人で歩き出しゃしないし……」

と、次郎吉は腕組みして、「時に、浩次の奴はどうしました？」

「お前さんが片付けといてくれたんで助かったよ」

と、定吉は言った。「女は死んだ。宿屋の仲居で、浩次と深い仲だったらしいな」

「やはり……」

「他に男がいるってばれたらしい。浩次が突然刀を抜いて斬りつけたってことだ」

「しかし、どうして浩次があんな刀を持ってやがったんだろう」

「そいつは誰も知らねえ。鞘が残ってたが、中身の方は行方知れずさ」

「そうですか……」

次郎吉は胸さわぎがした。

浩次のことは多少知っている。女が他に男をこしらえたといって、いきなり斬った

りする男ではないように、次郎吉には思えた。
「――浩次はどうしてます？」
「牢で、腑抜けのようになって寝てるよ。話しかけても返事もしねえ。聞こえてねえ感じなんだ」
「そうですか」
「ま、獄門はまぬがれねえな。しかし、とっくに死人になっちまったようだ」
「そんなことがね……」
次郎吉は考え込んだ。

「おい、酒だ！　酒を持って来い！」
そう怒鳴る声は、すでに舌がもつれて、かなり酔っていた。
襖が開くと、
「恐れながら」
と、用人が頭を下げて、「間垣様がおみえでございます」
「間垣？」
「間垣左内様でございます」
「あいつか」

と、吐き捨てるように、「あんな奴に用はない。追い返せ」
総之介は、さる大名の三男である。父親の跡を継ぐ見込みもなく、日々、遊び暮していた。
日も高い内から、酒を飲み、側に女をはべらせている。
「それが、どうしても若様にお見せしたい物があると申されまして」
「俺に見せる物？　よほどいい女か」
と、総之介は笑った。
「いえ、そういうことではないようでございますが……」
「ふん。よし、通せ。もしつまらぬ物を持って来たのなら、丸裸にして放り出してやる」
総之介の腕の中で女が甲高い笑い声をたてた。
ややあって、小柄な白髪の武士が現われると、
「若様にはご機嫌美しう――」
「よせ。ちっとも美しくなどない」
と、総之介は遮る。「何か持って来たといったな」
「御意」
「何だ？　見せてみろ」

間垣左内は進み出ると、
「以前より、名刀をお求めでございましたな」
「ああ」
「たまたま手に入りましたこの刀剣、ぜひご覧下さいませ」
と、黒塗りの箱を差し出す。
「短いな」
「ですが、ぜひご一見を」
「出して見せろ」
「は」
左内は紐を解くと、箱から布に包んだ刀を取り出した。
「柄、鞘は、とりあえず急ぎ作らせました」
「貸せ」
総之介は手に取ると、刀を抜き放った。そして——その白刃のふしぎな光にじっと見入った。
「いかがでございましょう」
と、左内が言った。
「左内……。これは誰の作だ」

声はもう酔っていなかった。
「分りません。無銘でございますが、ただならぬ出来栄えかと……」
「うん」
総之介はその刀身から目をそらすことができなかった。——体に回っていた「酔い」が、その刀にスッと吸い取られて行ったような気がした。
「——ふしぎな刀だ」
「お気に召しましたでしょうか」
「うん……。これはみごとなものだ」
「そうおっしゃっていただけますと——」
「よくやったぞ。これは俺の宝にする」
総之介はふっと我に返った様子で、刀を鞘に納めた。
その刀からは、ふしぎな力が伝わって来た。
——俺は強い。俺は誰にも負けぬぞ。
「そうだ」
と、総之介は言った。「左内」
「は」
「このところ、兄上たちと会っておらん。——一度茶会でも開いて、久々に兄上たち

を招びたいが」
「結構でございますな」
「そなた、面倒でも手配してくれぬか。――兄上たちが必ず来てくれるように」
「かしこまりました」
「いや……。兄上たちの顔を見るのが楽しみだ」
総之介の顔に、別人のような笑みが浮んでいた……。

刀剣

暗い牢の中、さらに暗い所へと逃げ込もうとするように、浩次は奥の隅へ小さくうずくまっていた。
「これじゃ話ができねえ」
と、次郎吉は言って、「旦那、中へ入れちゃもらえませんか」
同心はちょっと顎を撫でて、
「おい、開けてやれ」
と、牢番へと言った。「だがな、〈甘酒屋〉、何かあっても、俺は知らんぞ」
自分で、「浩次と話してくれ」と頼んでおいて、その言い草はないだろう、と内心

苦笑したが、お役人とはそんなものだ。
「結構です」
次郎吉がそう言うと、牢番が重い錠前をカチャリと開けた。
きしむ音をたてて戸が開くと、湿った臭気に鼻を覆いながら次郎吉は中へ入った。
浩次の方へ近寄ると、次郎吉は片膝をついた。しかし、浩次の目は開いてはいるが、何も見ていなかった。
次郎吉は浩次の耳もとへ口を寄せると、
「丁！」
と、一声かけた。
浩次がギクリとして、カッと目を見開く。
「それとも半か。――おい、浩次」
博打好きの浩次である。賭場のかけ声を出してみたのだ。
浩次がゆっくり頭をめぐらせて、
「――誰でえ」
「俺だ。〈甘酒屋〉だよ」
浩次が目を細くして、
「あんたか……」

「分るか、俺のことが」
「ああ……」
まるで深い眠りから覚めた、とでもいう様子で、「俺は……どうしたんだ」
「憶えてねえのか。お前は、女を斬り殺したんだよ」
浩次はぼんやりと次郎吉を見ていたが、
「――憶えてる。何となく、だが」
「そうか」
「あいつは、若い男と……。俺が用立ててやった金を、そのまま男へやっちまったんだ。俺はそれが許せなくて……」
「そうだったのか」
「俺は……あいつを殺したのか？」
「ああ。お前らしくねえな。どうして、お前は刀を持ってた？」
「刀……」
「そうだ。その刀で女を殺した」
「そうだ……。刀だ」
浩次は何度も肯いて、「刀が言ったんだ。『女を斬れ』って」
「何だと？」

「そう聞こえたんだ……。妙だよな」
「浩次。あの刀を、どこで手に入れた？」
と、次郎吉は訊いた。
「さあ……。よく憶えてねえ。何だか――誰かが死んで……」
「死んで？」
「駕籠だ……。源太の奴が、侍を乗っけて……その侍が……」
浩次は急に頭を抱えると、呻いて、「痛え！　頭が痛えんだ！」
と、突っ伏して呻き続けた。
次郎吉は、浩次の背中をそっと撫でてやると、
「また来るからな」
と言って、立ち上った。
牢を出ると、同心は表で、欠伸しながら待っていた。
「〈甘酒屋〉、何か分ったか」
と、大して気にもしていない様子。
「あいつは病気ですぜ」
と、次郎吉は言った。「すぐにお仕置ってことはございませんか」
「さあな。俺みたいな同心には分らん」

「少し待ってやって下さいまし。消えた刀のことが分るやもしれません」
「一応、お上へ伝えよう。しかし、約束はできんぞ」

「その源太って人は？」
と、小袖が訊いた。
「よく賭場に出入りしてる駕籠かきだ。俺も顔は知ってる」
「浩次って人の話だと、源太さんの駕籠に乗ったお侍の刀が、どうしてだか浩次さんの手に入った、ってことらしいわね」
「おそらくな」
次郎吉はそばをすすって、「源太を捜して、いくつか賭場を回ってみたが、見付からなかった」
「でも刀は行方知れずでしょ？」
「ああ。気になるんだ。浩次の言葉がな」
「刀が、『女を斬れ』って言ったっていう……。そんなことがあるかしら」
「分らねえが、刀ってもんは色々人の恨みを引きずったりすることがあるだろ」
小袖はそばを食べ終えて、
「そば湯をお願い」

と頼むと、「――誰かが刀を持って行ったってわけね」
「そこが心配だ。ただ金になると思って持って行ったのならまだしも……」
小袖は少し考えていたが、
「兄さんらしくもない」
「何だよ、出しぬけに」
「見落としてるわよ、一つ」
「何だと？」
次郎吉は酒を注いで、「お前には見えてるってのか」
「残ってるものがあるでしょ」
「――鞘か」
「そう。もし、その刀を刀として使おうって人が持ち去ったのなら、鞘が必要だわ」
「なるほど！　こいつはうっかりしてた」
次郎吉は額を打って、「刀に合った鞘を作らせてるってことだな」
「たぶんね」
「早速、刀剣を扱う店を当ってみよう」
小袖は苦笑して、
「そんないわくつきの刀を、その辺の店に持ち込むと思う？」

「じゃ、どこを捜すって言うんだ？」
「どんな刀だった？」
「そうだな。チラッと見ただけだが……。短めの刀だ。お前の小太刀より少し長いくらいかな」
「出来合いの鞘では合わないでしょうね、それじゃ」
小袖は小さく肯いて、「道場の先生が、たぶんお持ちだわ。お願いして拝借して来ましょ」
「それでどうするんだ？」
「もしも、並の刀でないと分って盗んだのなら、鞘を作らせたとしても、きっと口止めしてるでしょう。普通に、『こんな刀に鞘を作らなかったか』と訊いても、知らないと言われたらそれきり」
と、小袖が言った。「まあ、私に任せて」
次郎吉は面白くなさそうに、
「どうせ俺は役立たずだよ」
と、すねて見せた……。

「ま、こんなもんだな」

次郎吉は、小袖が借りて来た刀を抜いて、おおよその長さを見ると、「たぶん同じくらいの長さだった」

「じゃ、これを使いましょ」

と、小袖は言って、手拭(てぬぐ)いを持って来ると、刀身にクルクルと巻きつけた。

そして、それを風呂敷(ふろしき)に包むと、

「さ、出かけましょ」

「どこへ？」

「できるだけ目につかない刀剣の店。それと刀鍛冶(かじ)」

「どうやって捜す？」

「先生に伺って来たわ。そういう店や職人に詳しいって方をね。その人に訊いて、回ってみましょ」

小袖の方が、すっかり張り切っている。

やれやれ……。

次郎吉は、ため息混りで妹について家を出た。

お昼ごろから歩き始め、日が傾き始めるころになっても、鞘をこしらえたという店は見付からなかった。

「――足が棒だぜ」

と、次郎吉がこぼすと、
「もう少し頑張りましょうよ」
小袖の方がケロリとしている。
そして——どこかさびれた刀鍛冶の仕事場を訪ねた。
「ごめんなさい」
と、小袖が呼びかけると、しばらくして、
「誰だい」
と、しわがれ声がして、奥から具合の良くなさそうな老人が現われた。
「お邪魔してごめんなさい」
「何の用かね？」
と、いぶかしげに小袖を見る。
「これに鞘をこしらえてほしいの」
刀身を手拭いで巻いた刀をパッと置く。
その一瞬、老人が目に見えて動揺した。
「何の真似だ！」
と、声を震わせ、「そんなことは——そんな鞘など作れん」
「でも、最近、これと同じくらいの刃渡りの刀に鞘をこしらえたでしょう」

と、小袖は言った。

「知らん！　そんな物は持って帰ってくれ！　さあ！」

老人は小袖を店から追い立てるようにして外へ出すと、ピシャリと戸を閉めてしまった。

小袖は刀を手に、傍に立っていた次郎吉の方へ、

「いかが？」

と言った。

「当りだな」

次郎吉は肯いて、「刀鍛冶〈雪堂（せっどう）〉か……。今の様子、ただごとじゃなかったな」

「怯（おび）えていたわね」

「あの刀に鞘を作ったのは間違いねえが、何か特別にいわくがありそうだ」

「後は兄さんに任せたわよ」

と、小袖は言った。「ごほうびに、かんざしの一つも買ってもらおうかしら」

因縁

荒れた墓だった。

ろくに訪れる者もなさそうな荒れ寺で、墓地も雑草が伸びていた。
老人はそんな墓の一つ一つを見て歩くと、その内、一つの墓石の前で足を止めた。
悩み深い表情で墓に向って手を合せたものの、胸中にあれこれ渦巻いていることは、一見して分った。
「わしはどうすればいいのか……」
と、老人は呟いた。「もうあれはわしのものではない……。そうだとも」
砂利を踏む音がして、老人が振り向く。
「雪堂殿ですな」
若い侍が立っていた。
「わしに何か用が？」
「さよう……」
刀の鯉口を切る。老人は後ずさって、
「何をする！」
「主人の命で、お命をちょうだいする。恨むな」
と、若侍は刀を抜いた。
「主人とは――間垣様のことか！　そうなのだな」
「わけは知らん。拙者は命ぜられたままにするのみ」

「こんな年寄りを斬って、恥ずかしいと思わんのか！」
「気は進まぬが、いたしかたない」
と、刀を構える。
「待て！――一つ聞かせてくれ。あの刀をどうした？」
「刀、とは？」
「間垣様がお持ちになった刀だ」
「それを聞いて、どうする」
「あれは恐ろしい刀なのだ。そのことを間垣様に申し上げなかった」
「死んで行く人間の知ったことではなかろう」
と、若侍が一歩踏み出す。
「生きてる者が聞かせてもらおう」
と、声がした。
「誰だ！」
次郎吉が、老人と若侍の間へ素早く割って入ると、
「年寄りは大切にするもんだ」
と言った。
「邪魔すれば、お前も斬るぞ！」

「斬れまいよ」
と、次郎吉が笑った。
「おのれ……」
カッとなった若侍が斬り込んだが、次郎吉はたやすくかわすと、足を引っかけて前のめりに転ばせる。
「おっと。足下にご用心」
「貴様――」
怒りに顔を紅潮させて立ち上ると、もう一度斬りつける。
次郎吉が匕首で刀を払い、若侍の腕に斬りつけた。刀を取り落として、立ちすくむところへ、次郎吉の匕首が喉へピタリと当てられた。
「助けてくれ……」
若侍は青ざめて、「殺さないでくれ……」
「命が惜しけりゃ、例の刀をどうしたか、しゃべることだね」
「拙者は……よく知らんが、殿に献上されたはず」
「殿とは？」
「牧野総之介様のことだな」
と、雪堂が言った。

「ああ、噂に聞く、遊び呆けてる三男坊だな？」
と、次郎吉は言った。「それなら大した害もあるまいよ」
「いや、何かとんでもないことに……」
と、雪堂が言った。「間垣様には企みがおありのご様子だった」
「ふーん、じゃ、知ってることを話してもらおう」
「それは……」
若侍の顔に汗が浮んだ。
「私が代りに訊く？」
小袖が若侍の背後に立つと、小太刀を抜いて、若侍の背へ斬りつけた。

「ありふれた話だ」
と、雪堂は言った。「しかし、当事者にとっては、そう達観してはいられぬ」
「話してくれ」
次郎吉が促す。
「わしには、不似合な若い妻。一番弟子だった、刀鍛冶……。並外れた腕前で、わしはその男がねたましかった……」
「なるほど。そのお弟子と、若妻の不義か」

「さよう……。苦しかった。本当なら、二人を添わせてやれば良かったが、わしは赦せなかった……」

「それで？」

「弟子は自分が最後に鍛えた刀で自害した。それを見た妻は、後を追って、同じ刀で喉を突いて死んだ……」

「それがあの刀？」

「その通り」

「処分すべきではなかったんですか」

と、小袖が言った。

「確かに。――二人が死んで、悔んだがもう遅い。わしは弟子の棺にあの刀を入れてやった」

「埋めたと？」

「誰かが話を聞きつけ、墓を掘り返して、刀を持ち去ったのだ。それから、もう五年たつ。――どこをどう渡り歩いたか、間垣様があれをお持ちになったときは、背筋が凍った」

と、雪堂は息をついて、「間垣様とは長いお付合い。断るわけにもいかず……」

次郎吉は腕組みして、

「さっきの若侍の話……」
「嘘はついていないでしょ」
と、小袖は言った。
小袖の小太刀に袴を斬り落とされ、髷を落とされた若侍は真青になって、主君、牧野総之介が、兄二人を茶会に招くことを白状した。
「家督を継げない三男坊の恨みを、その席で晴らすつもりか」
と、次郎吉は言った。
「でも、兄二人、斬ったりしたら、ただじゃ済まないでしょ」
「あの刀は、そんな気持にさせるものを秘めておる」
と、雪堂は言った。「長いこと耐えて来たものが一気に噴き出すような……」
「正気を失わせるんだ。あの浩次も、『女を斬れ』と刀が言った、と話してた」
「恐ろしいことだ。しかし、もう刀が殿様の手に渡ってしまったとあっては、どうすることも……」
と、雪堂がうなだれる。
「そう嘆くこともないかもしれませんよ」
と、小袖が言った。

「兄上たちに、ぜひご覧に入れたいものがある」
茶会の後、穏やかな宴の庭で、総之介は言った。
「ほう。何だ？」
長兄の忠法が盃を手に訊く。
「みごとな刀を手に入れましてな」
「刀？　お前がか」
と笑って、「ろくに剣の修行もしなかったお前が？」
「笑うがいい」
と、総之介は不敵に笑って、「一見すれば兄上にも納得していただけよう」
「よほどの業物らしいな」
「間垣、これへ持て」
と、総之介は声をかけた。
漆の箱が持って来られると、総之介は紐を解いて開け、中からあの刀を取り出した。
「それか」
兄二人も、興味を持ったらしく、盃を置く。
「さよう。ふしぎな力を持った刀でな」
「見せてくれ」

「喜んで」
総之介は柄に手をかけると、静かに刀を抜いた。
――やや沈黙があって、それから兄二人が爆笑した。
「茶会の余興か？　お前にしては上出来だ」
と言うと、さらに大笑い。
総之介は呆然として、手にした刀を見つめていた。――竹光だったのである。

「これは間垣様」
と、雪堂が店に出て、「ご用でございますか」
「大した用ではない」
と、間垣はポンと刀を投げ出し、「この刀、どうなっておるのだ」
雪堂は刀を抜いて、
「これは私の知らぬものでございますな」
「わけが分らん。若殿に差し上げたときは、確かに本物の刀だったのだ」
「では、あのときの刀が、いつの間にか竹光になっていたとおっしゃるので？」
「そんなことがあるのか？」
「さあ……。世間には色々ふしぎなことがございます。この刀も、人を斬りたくなく

なって、姿を変えたのかもしれませぬ」
「自ら竹光になったと申すのか」
「あの刀で、何をなさろうとしておいでしたか。人の邪(よこしま)な欲を感じ取って、刀が刀でいることをやめたのではないでしょうか」
「拙者は――危うく切腹させられるところだった」
「ですが、生きておいでです」
と、雪堂は微笑んで、「それこそ、何より大切なこと」
「そうかもしれんな」
間垣は苦笑して、「拙者も死ぬ気が失(う)せたわ」
と言うと、フラリと出て行った……。

「良かったな」
次郎吉は、傷の治ったお国を迎えに来て、ホッとした。
「はい」
「小袖が、今夜は何でも好きなものをごちそうすると言ってる」
「ありがとうございます。でも、先生にもお礼を……」
「もちろんだ」

千草が現われると、
「どうも……」
と、会釈した。
「お国が世話になりました」
と、次郎吉は言った。「全快を祝って、一席設けたいんですがね。ご一緒にいかがで」
「はあ。ですが、父の許しをもらいませんと」
「じゃ、ぜひにとこちらからお願い申しましょう。夕刻にお迎えに上りますよ」
次郎吉はお国を連れて、仙田良安宅を出た。
歩きながら、
「旦那さん……」
「うん？」
「私……あの千草先生の所で働きたいのです」
次郎吉はびっくりして、
「医者の下で？」
「千草先生がおっしゃいました。助手になって、医学を学んでは、と」
「そうだったのか。——いや、お前がそうしたいなら、そうすればいい」

「いいでしょうか」
「ああ、もちろんだ。お前はいい医者になるかもしれねえな」
刀を振り回す時代は、やがて終る。次郎吉は、すり替えた、あの妖刀を深い沼へ沈めながら、そう思っていた……。
「じゃ、千草先生のお宅へ住み込むことにします」
「ああ、いいとも」
正直ホッとした。
すると、お国が言った。
「旦那さんもその方がいいですよね」
「何のことだ？」
「だって、夜中にこっそりお出かけになるとき、私を起さないか心配しなくて済むでしょ」
次郎吉は目をパチクリさせて、
「お国、お前——知ってたのか」
「私、とっても目ざといんです」
と、お国は言うと、「チュウ！」
と鳴いてみせて、笑いながら次郎吉の先へ駆け出して行った。

解　説——江戸のモテ男七カ条

ペリー荻野（コラムニスト）

一年三百六十五日、元気よく時代劇を見る生活を続けている私は、これまで多くの「江戸のモテ男」と出会ってきた。

推理力抜群の岡っ引きの親分、キンキラ派手な着物が趣味の旗本、白馬に乗った上様、どんな病にも立ち向かう名医、秘剣を遣う剣豪、そして盗賊……時代劇には、実に個性豊かな（ある意味変人）のいい男がいるのである。

史実においても、江戸でモテモテの花形といえば、「役者」「火消し」「定町廻り同心」「相撲取り」と決まっていたという。役者がファッションリーダーであり、モテなのは今も変わらないし、威勢のいい体育会系火消しや相撲取りの兄さんがキャーキャー言われるのも納得。八丁堀の旦那は、今でいえば颯爽とした刑事ドラマの主人公というところか。本作には、役者の浜島文之進（「鼠、くじを引く」）、火消しの長五郎、若い同心（「鼠、火の粉をかぶる」）が登場。主人公・鼠と深く関わってくる。モテ男大集合である。

そこで、ここでは、私が発見した「江戸のモテ男七カ条」を、鼠こと次郎吉と合わせながら解説してみたい。

「江戸のモテ男」七カ条その一は、「謎があること」

赤川次郎さんが、「鼠」を世に登場させたのは、第一巻『鼠、江戸を疾る』第一話「鼠、起つ」であった。その書き出しは、

「四尺幅の廊下を、鳥の羽根が撫でるように軽々と進んで来た足が、ピタリと止った」

このたった一行で、事件の予感を濃厚に漂わせ、暗闇に生きる鼠小僧の世界へと引き込む。さすが赤川作品とうなるしかないが、ここでうなるのはまだ早い。第一話で残忍な殿様にひと泡吹かせた鼠は、月明かりの下で江戸の町をひとり見下ろす。このことが好きだから盗人をやめないのだという。だが、なぜ、彼がこの道に入ったのか、何がきっかけだったのかは語られない。

彼の表の顔である「甘酒屋の次郎吉」は、近所の人に何か頼まれると嫌とは言えない、気のいいあんちゃんである。裏の顔にも彼なりの「正義」があり、筋が通っているように見える。しかし、根っこはいつも謎のまま。ここが気になる。

七ヵ条その二は「滅法強いこと」

鼠は、仕事に対してのプロ意識が高く、悪に対しては、容赦ない。悪い殿様のちょんまげを斬り落とすなんてことは朝飯前。悪だくみをした連中に斬りかかられると、

「次郎吉の手に短刀が光って、一人の喉を切り裂く。

残った一人は愕然として、あわてて逃げだした。次郎吉の手から短刀が飛んで、背中をみごとに捉える」（「鼠、くじを引く」）

冷徹に命のやりとりもしてのける。この厳しさ、ヒリヒリ感は、裏街道に生きる男独特の魅力となってにじみ出るのだ。

七ヵ条その三「弱点があること」

滅法強い、のあとにこんな条件とは矛盾しているようだが、実は無敵のスーパーヒーローというのは、近寄りがたくて、案外モテないもの。それより、「これはダメ」という弱点がある方が、人間味も愛嬌も感じられていい。

鼠には最大の弱点である妹の「小袖」がいる。

この小袖のキャラクターが面白い。お茶やお花の修業より、道場で小太刀をふるうのが大好きで、腕は相当なもの。なんたって、ひ弱いとはいえ、兄の天敵でもある同心を助けたこともあるのである。小袖は単身でたびたび強敵を撃退。何人にも取り囲まれても余裕たっぷりに立ち向かう。

「一人、峰打ちにしておいたわ」（「鼠、幻をみる」）

いざとなれば悪人を斬ることもいとわない小袖は、強い女子である。裏の仕事もすべて承知の妹に「命を大切にして」などと言われた次郎吉は、

「なあに、お前の嫁入り姿を見るまでは、死なねえよ」（『鼠、江戸を疾る』「鼠、泳ぐ」）

とまじめに答える。

もっとも、肝心の妹は、「じゃあ、兄さんは天狗並みに長生きしなきゃ」と、切り返す。ふたりのやりとりは、ケンカのようでケンカでない。兄妹の賢さ、強さ、愛情の深さや江戸っ子の照れくささも伝わり、小気味いい。

七カ条その四は「洒落っ気があること」

したくもない斬りあいをし、息切れはするわ、腰は痛めるわ、腹下しまでして、いったん勝負をおあずけにした老女と老武士。彼らを救うために、鼠が仕掛けたのは、南蛮渡来の術だった。さすがに費用を心配する妹に、鼠はひとこと、

「ま、かかった金はあの屋敷の蔵からちょうだいしよう」（「鼠、つきまとわれる」）

老人たちの気持ちも知らず、大ごとにした殿様たちから必要経費はしっかりいただくのだ。それにしても、鼠が思いついた仕掛けは、ケレン味たっぷりの芝居の演出のよう……と思って、気がついた。原作の赤川さんは、無類の演劇愛好家。もちろん、

鼠小僧の物語は、歌舞伎の定番のひとつ。平成になってからも、かの野田秀樹さんが、中村勘三郎さんと「野田版　鼠小僧」を上演。これは、お白州で鼠小僧が手拍子に合わせて歌い踊ったりする異色作。この他、ドラマの世界には、妖艶な美女（小川真由美、中原理恵、大地真央）の女鼠小僧や、夫婦鼠（堺正章、岩井友見）、「お父っつぁんのあとを継ぎました」なんてことを言いながら、月夜に屋根の上でポーズを決めている娘鼠（古手川祐子）などなど、さまざまな鼠小僧が登場している。

おそらく赤川さんは、これまで数多くの鼠小僧を目にしてきたはずだ。そのうえで、自らの筆で描く鼠小僧は、洒落っ気がいっぱい。すっきりとした男前だ。

七ヵ条その五は「人助けを当然と思うこと」

時代劇のヒーローの世直しは、ボランティアがお約束。「水戸黄門」などは、「わが藩で一大事が」と助けを求められると、ご老公が「助さん、格さん、参りましょうか」と、ボランティア団体を結成するのである。しかし、鼠の場合、裏稼業を思えば、できるだけ目立ちたくないはずなのだが、なぜか人助けがらみの事件や騒動が向こうから飛び込んでくる。鼠シリーズ第二巻『鼠、闇に跳ぶ』では、小袖にきっぱりと、

「いいじゃないの、鼠の仕事は人助け」（「鼠、成敗し損なう」）

と宣言され、「そうはいっても、ちっとも儲からねえんじゃな……」と、愚痴も飛び出す。なのに、ひる日中、歩いていれば、

「まだ十六、七というところか。じっと欄干の手すり越しに川面を見下ろす白い横顔は、目をひくほどに美しかった。

だが、そんな呑気なことは考えていられなくなった。

見ていると、その町娘が欄干を乗り越えて、いきなり川へ飛び込んだのである。

『兄さん！』

『身投げか！』

次郎吉は次の瞬間、自分も川の中へ身を躍らせていた……」（「鼠、面子をかける」）

もはや反射的な人助け魂。しかも、せっかく助けた娘は、超強気な性格で「何だって余計なことをするのよ！」とかみついてくる始末。やれやれ。それでも、若い男女の恋の行方を見守る鼠は、つくづく偉い。

七カ条その六は「けちけちしないこと」

博打で勝てば、賭場の若い衆に「一杯やってくんな」と、相手がちょいと驚くほどの額を置いていく。内緒の知らせを持ってきてくれた牢番には「とっといてくれ」とすっと手間賃を出す。若い娘を助けるため、渡来物の高い薬を惜しげもなく使う。いかにも江戸っ子の金離れのよさが、鼠の男っぷりをあげている。

ちゃっかりしているのは妹の小袖で、得意の小太刀で兄を助けるたびに、

「兄さん、帯二本ね」（「鼠、火の粉をかぶる」）

とすかさず要求してくる。それをそれほど嫌でもなさそうに「ああ」と引き受ける鼠。ついにはまんまと妹の策に乗せられ、色町で売られそうになった十二歳のお国を身請けすることにもなってしまう。「安いもんだった」とけろりとしている妹に呆れながら、鼠は、目をきらきらさせたお国に「しょうがねえな、腰でももんでくれ！」と言いつつゴロリとなる。この時、どんな顔をしていたのかと想像するだけで面白い。

一方でこの男は、見栄ばかりはるわりに、蔵の中は空っぽという大名屋敷には、冷たい目を向ける。商人の町として発展した上方と違って、土地の七割を武家が所有し、残りの三割に庶民がきゅうきゅうと暮らしていた江戸は、武士中心の都市だった。威張りちらす無粋侍と、野暮を嫌う江戸っ子は、そりが合わないのは当然のこと。鼠は、大胆な盗みで金をつかみ、ここ一番のときにさらりと使うことで、心意気を見せつけているような気がする。

七ヵ条、最後のひとつは「簡単に女になびかないこと」

本書の一話「鼠、火の粉をかぶる」の冒頭で、鼠がなじみの店で酒を飲み、寝入っている場面を読んで、心配になった人も多いに違いない。なにしろ、ここの艶っぽい女将おしまは、鼠に惚れている様子。このまま二人はねんごろになっちゃうの!? ここで注目したいのは、鼠の女に対する勘だ。自分だってたたけばホコリの出る体。いやむしろ、モテ男は、脛に傷のひとつやふたつ持っていてほしいのだ。しかし、「据

え膳」とも見えるおしまに対する態度には、鼠の新たな一面を見た思いがする。

さらに続く「鼠、くじを引く」では、なんと大奥にいた女を「一人一両で抱けるってんだ」と持ちかけられても、洟もひっかけない。

ただ一言。

「酒がまずくなる。あっちへ行け」

よかった……ここでほいほいついていく鼠なら蹴っ飛ばしてやりたいところだ。

以上、七カ条。鼠小僧は、見事に「モテ男」の条件をクリアした。おめでとう!!

なのに、この本の中では、あんまりモテてない気がする？　確かに……。それはおそらく、美女としっぽりなんて展開になると、われわれのようなファンが眉をつりあげてしまうから。作者の気配りなのだと思う。

とはいえ、本書、最後の一話「鼠、妖刀の影を断つ」に出てきた女医の千草先生の存在は気になる。彼女は、弟子入りしたお国とともに、本書の続編でも活躍することになっている。鼠との関係は？

乞うご期待！

というところで、小袖をまねして、チョンと拍子木を鳴らし、私の解説の幕引きとさせていただきたい。

本書は二〇一一年三月、小社より単行本として刊行されました。

鼠、影を断つ

赤川次郎



角川文庫 17529

平成二十四年八月二十五日　初版発行

発行者―井上伸一郎
発行所―株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・編集（〇三）三二三八―八五五五
〒一〇二―八〇七八
発売元―株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話・営業（〇三）三二三八―八五二一
〒一〇二―八一七七
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所―旭印刷　製本所―BBC
装幀者―杉浦康平

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Jiro AKAGAWA 2011　Printed in Japan

あ 6-149　ISBN978-4-04-100336-7　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日



横溝正史ミステリ大賞
YOKOMIZO SEISHI MYSTERY AWARD

作品募集中!!

エンタテインメントの魅力あふれる
力強いミステリ小説を募集します。

大賞 賞金400万円

●横溝正史ミステリ大賞

大賞：金田一耕助像、副賞として賞金400万円
受賞作は角川書店より単行本として刊行されます。

対 象

原稿用紙350枚以上800枚以内の広義のミステリ小説。
ただし自作未発表の作品に限ります。HPからの応募も可能です。
詳しくは、http://www.kadokawa.co.jp/contest/yokomizo/
でご確認ください。

主催 株式会社角川書店

エンタテインメント性にあふれた
新しいホラー小説を、幅広く募集します。

日本ホラー小説大賞

作品募集中!!

大賞 賞金500万円

●日本ホラー小説大賞

賞金500万円

応募作の中からもっとも優れた作品に授与されます。
受賞作は角川書店より単行本として刊行されます。

●日本ホラー小説大賞読者賞

一般から選ばれたモニター審査員によって、もっとも多く支持された作品に与えられる賞です。
受賞作は角川ホラー文庫より刊行されます。

対象

原稿用紙150枚以上650枚以内の、広義のホラー小説。
ただし未発表の作品に限ります。年齢・プロアマは不問です。
HPからの応募も可能です。
詳しくは、http://www.kadokawa.co.jp/contest/horror/でご確認ください。

主催　株式会社角川書店





ISBN978-4-04-100336-7

C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

なじみの小料理屋で飲み、寝入ってしまった次郎吉。おかしな気配に気がついて目を覚ますと、隣家から火の手が上がっている！次郎吉の機転で延焼は防げたが、火元の家に住んでいた母と幼い娘が焼け出された。火事の原因は不明。さらに母子の周辺に見え隠れする怪しい人物たち。何かあると感じた矢先、今度は小料理屋が火事に――。人情篤い盗賊・鼠小僧こと次郎吉が悪と闘う痛快時代小説シリーズ。ますます絶好調の第３弾！